



特 260
214

池坊生花學習帖
中卷科

6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始

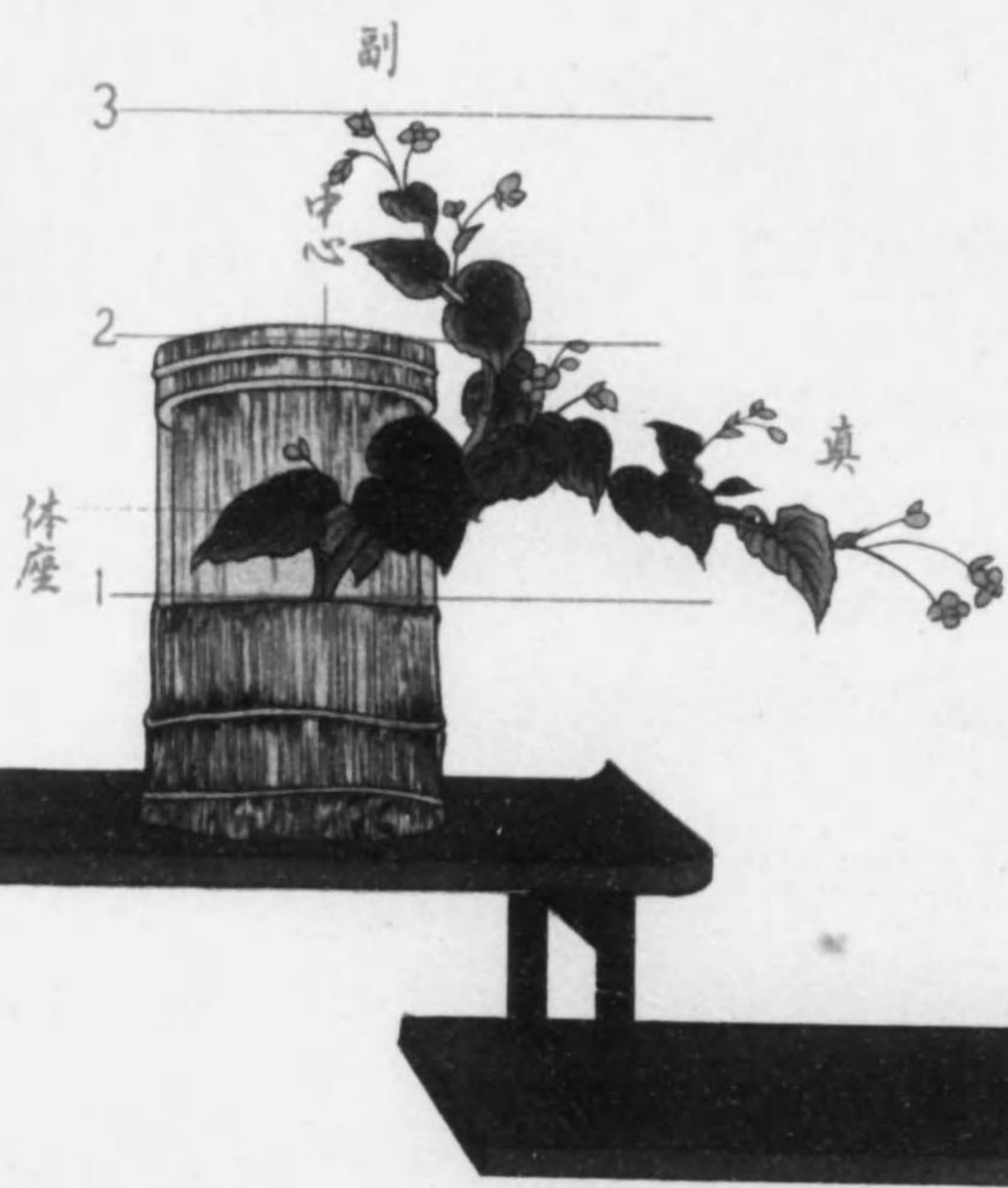


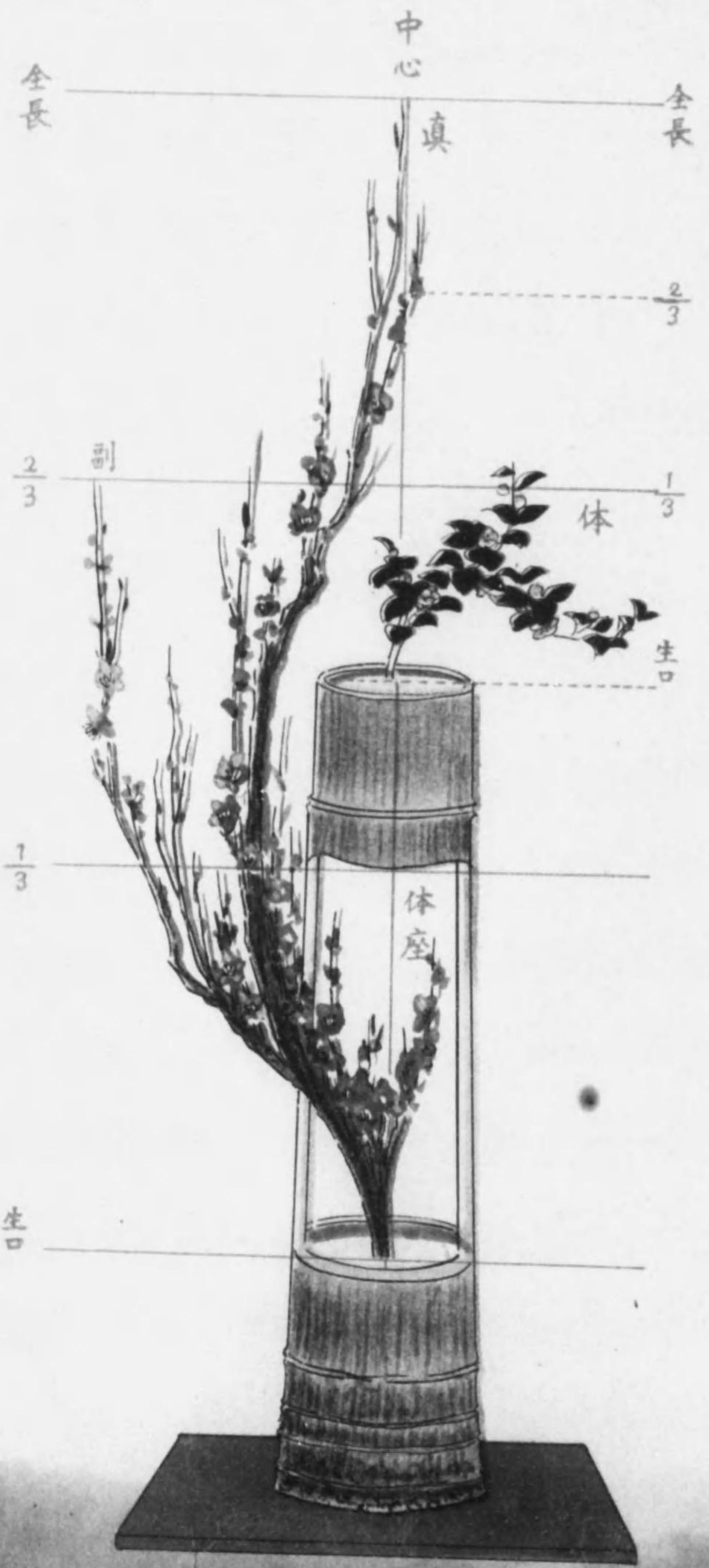
月形花生 (コデマリ 葉麻繡球)



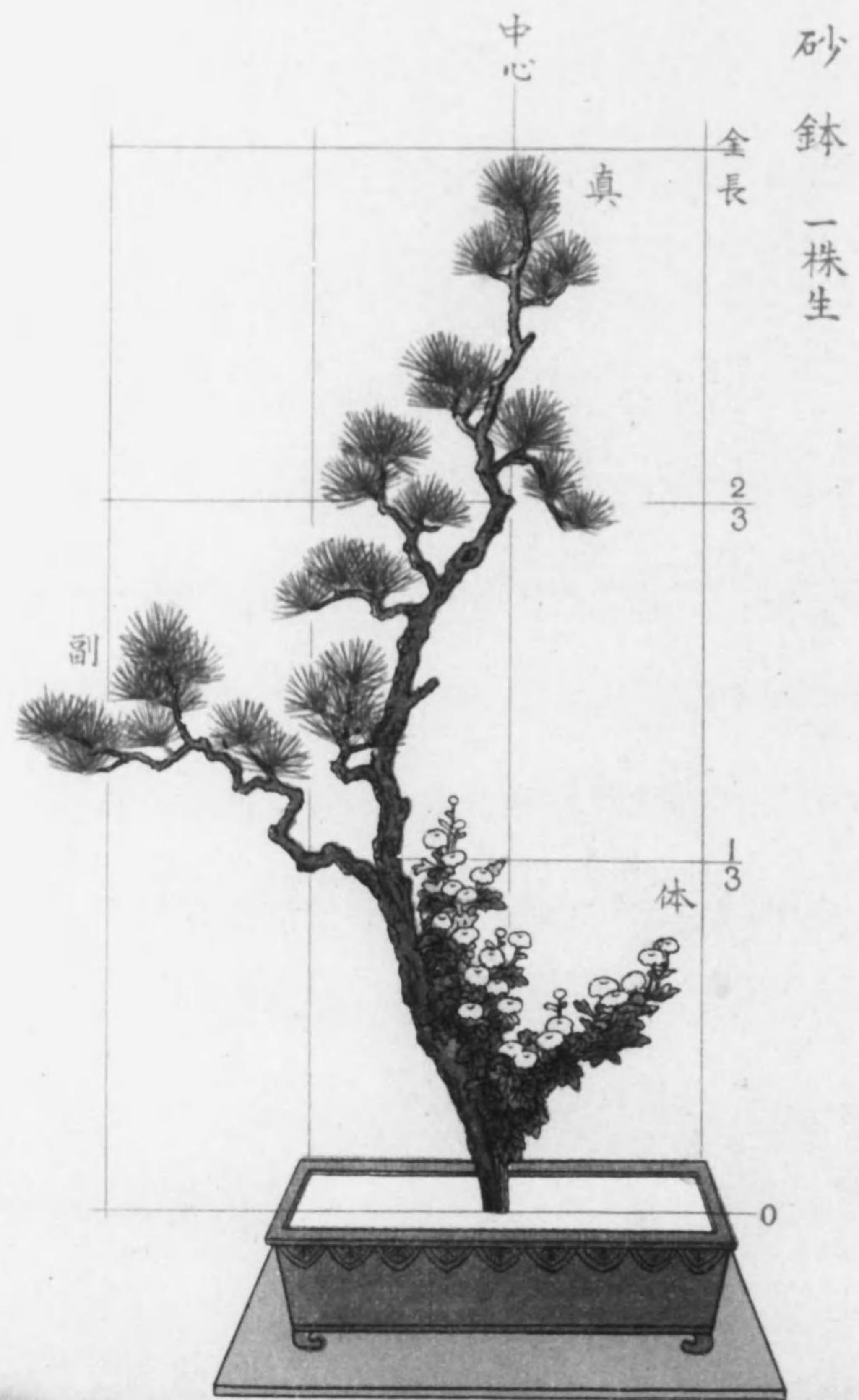
棚置

獅々口 (蕪花生に準ず)
(窓内の花軽く)





二重立上り生
 (上)白玉椿
 (下)緋桃



中心

砂鉢
一株生

真

全長

$\frac{2}{3}$

副

$\frac{1}{3}$

体

0



立上り生

中心
真

全長

$\frac{2}{3}$

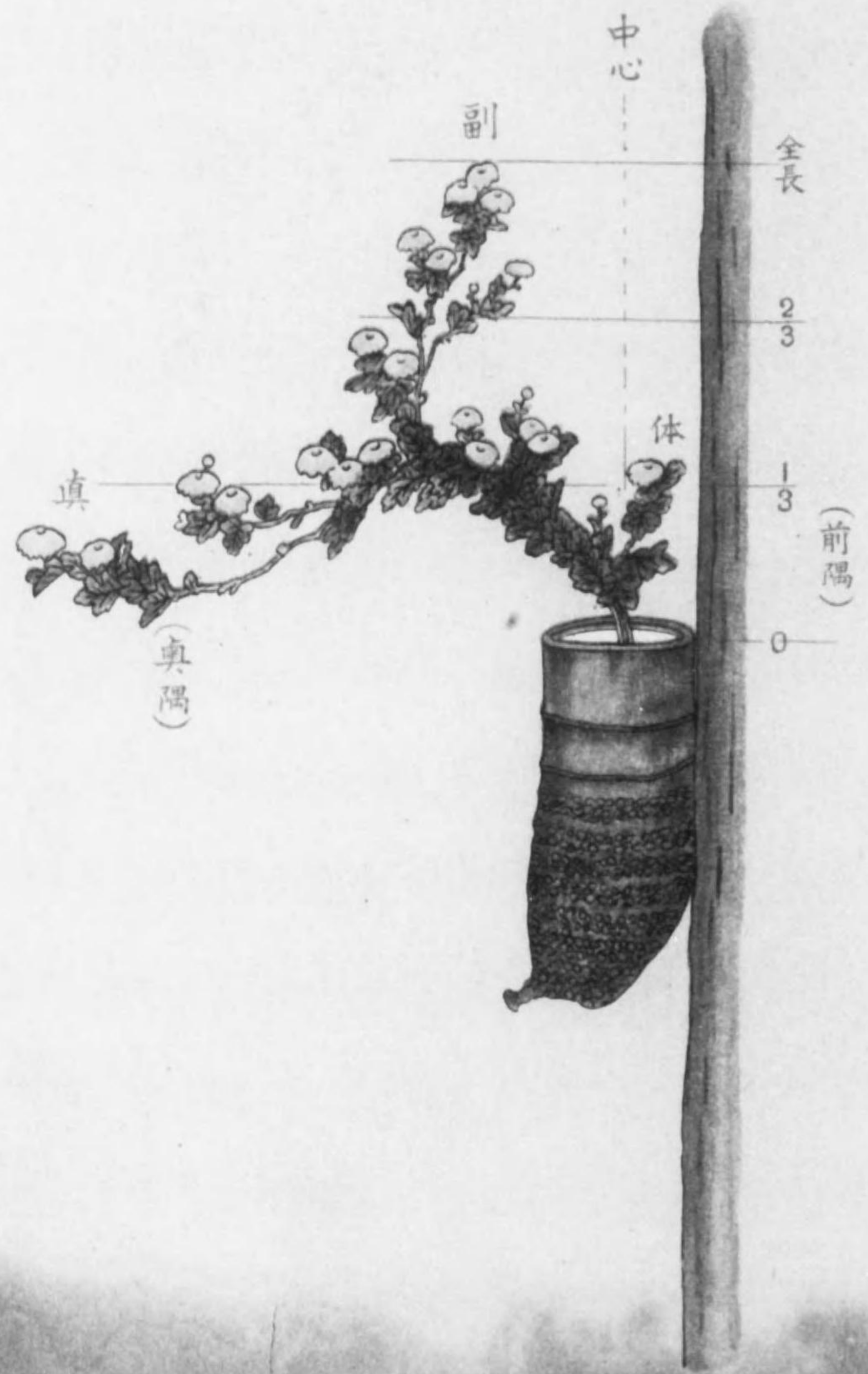
副(前隅)

$\frac{1}{3}$

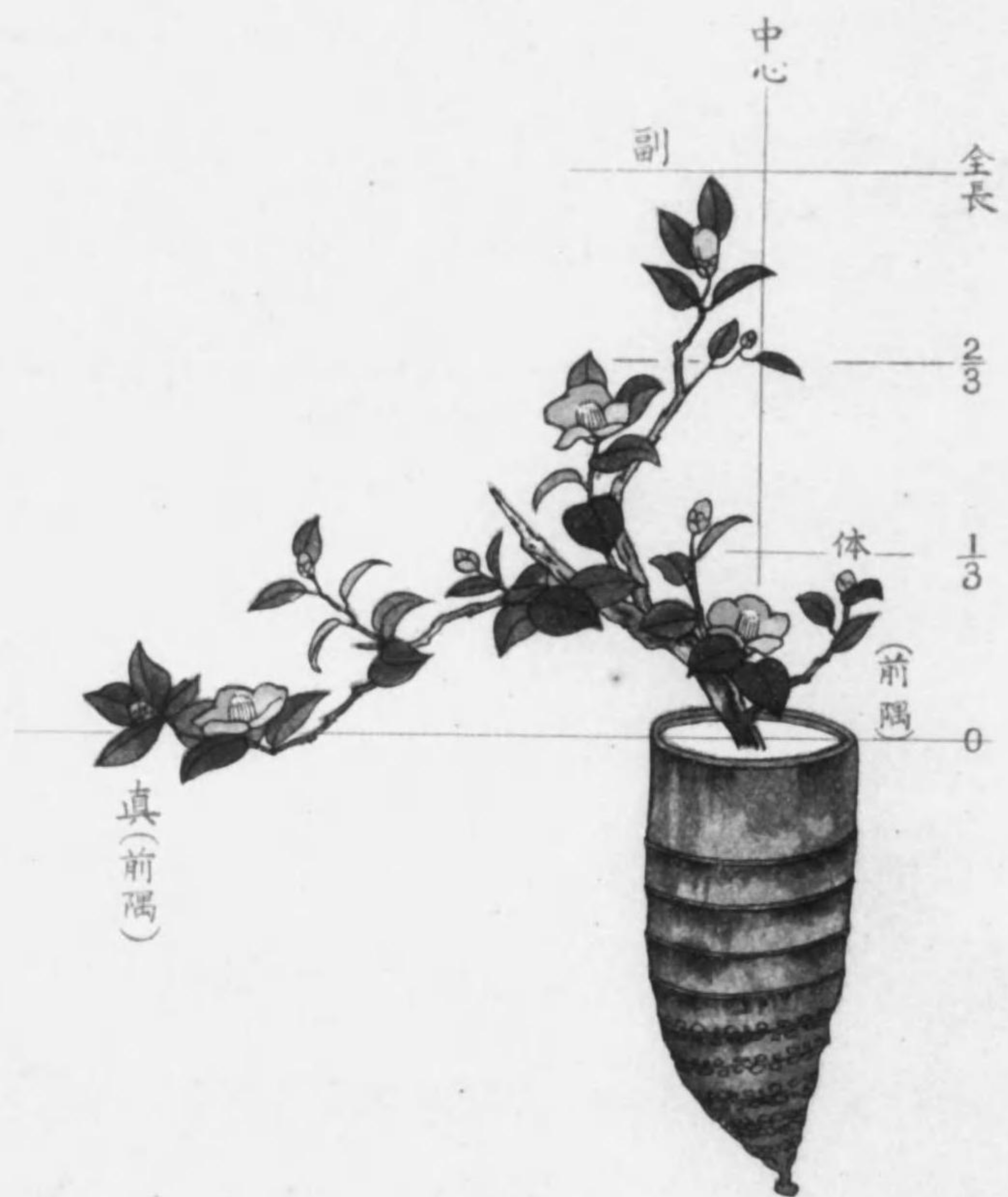
体(前隅)

0

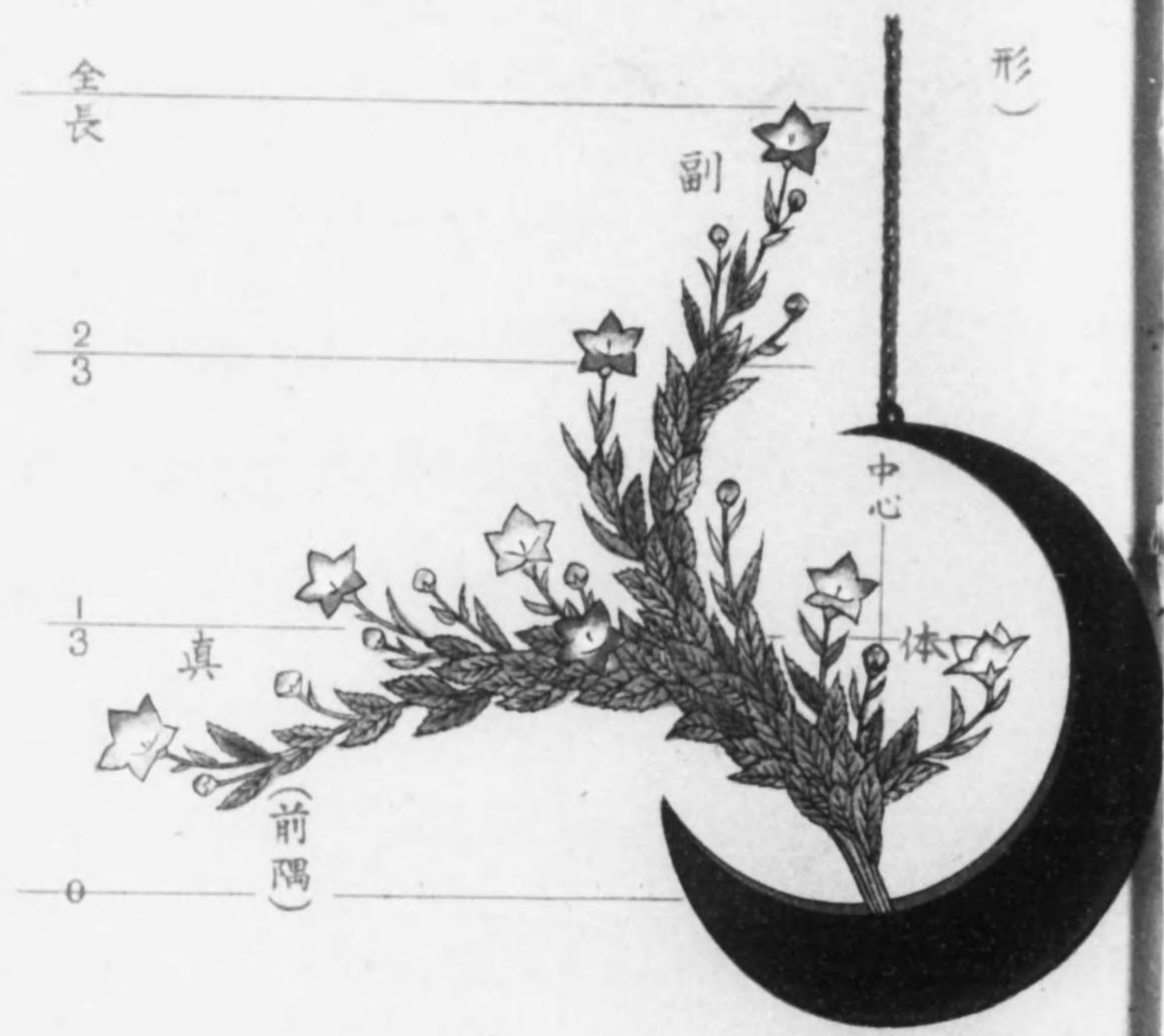
横
掛



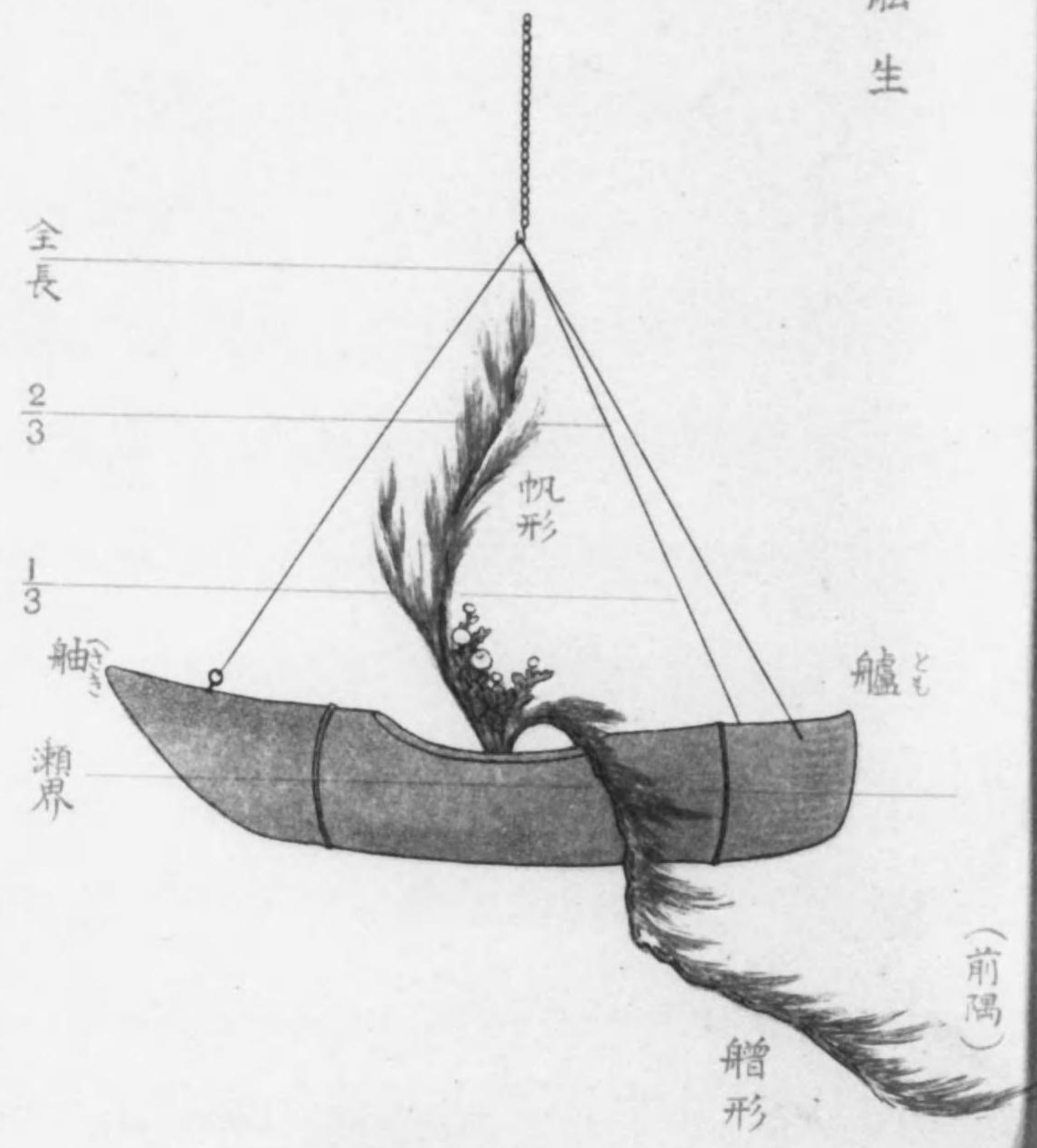
向
ッ
掛



釣生(月形)



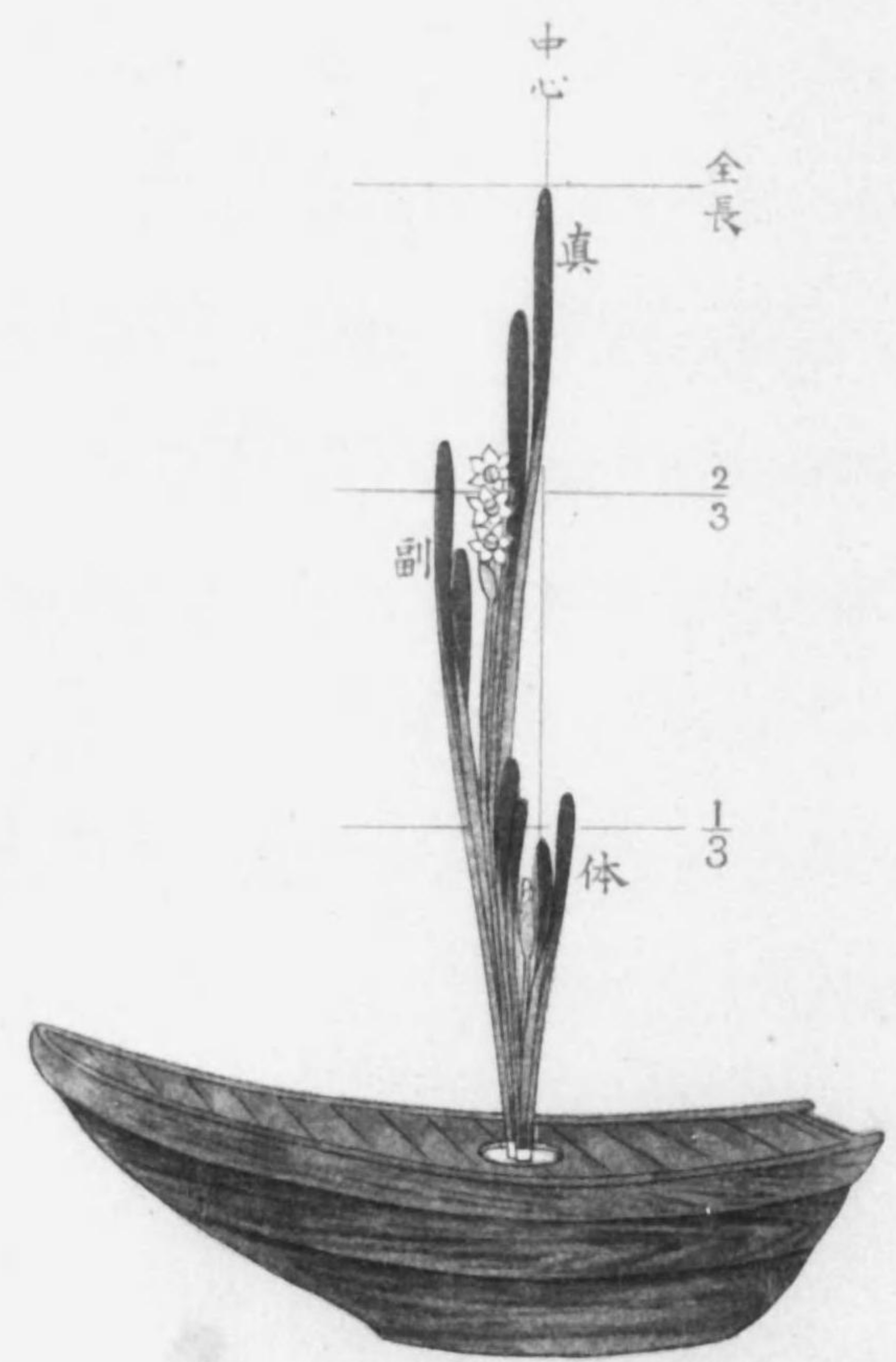
出船生



交
生



置船(泊船)



水
仙



持260
214

華道池坊教授用

池坊生花學習帖 中等科

大日本華道學院

本 櫻 (ほんざくら)

櫻は薔薇科に屬する木本で我が國の代表的な花である、されば全國到處に栽培せられ其種類も二三百に達すると云ふが、華道では之れを極く大別して山櫻・本櫻・彼岸櫻・寒櫻の四つ位に見て夫れ／＼適當な取扱をなすのである。

本圖は厚物とも稱へられる八重咲のものであつて之れを牡丹櫻とも云ひ、江戸櫻・柴山櫻・山科櫻・御車返など之れに屬する、春陽四月頃爛漫と咲き亂れた姿は云ひ知れぬ美しさを感じるものである。

本櫻を一種生となした場合は普通の生方であるが、本圖の如く松を配したものは傳花で特別取扱方のあるものである。其の大體は本櫻は其の自然を表はす上に於て相當賑やかに且つ姿の瘦ないやう心掛ける事が肝要である、此の意味に於て行の花形が相應しく花器は金屬器・土器・手なき大籠など何れも用ひられるが、如何なる場合にも二重や釣・掛・砂鉢の類には生けない事になつてゐる。

傳花の櫻は嵐山の風光に象つたものである、それで之れに松を添へる事にするが、其の松はたゞ添物の感なきやう、不完全でも松のみにて花形をなして居るやう取扱ふ考が大切である。而して本櫻は主として里に育つもの故、松も黒松を配する事が相應しい。材料は中段以下が満開となり副先など將に散り初めんとし、眞のみは峰を意味し稍蒼勝ちとする心得で選ぶがよい、而して之れに苔木を生け合せるが、それは水際に見せず中段の花の間より見ることに取扱ふ、そして主居即ち陽方に五七輪裏花になるものを使ふことになつてゐる。

筆 記 欄

本 櫻 (ほんざくら) 「傳花」 本勝手 行の花形 (平籠)

1



山 櫻 (やまざくら)

敷島の大和心を象徴するものは此の山櫻であつて、之れは美しい計りでなく其の散り際に潔よい事にある。此の花も一種生の時は普通の生方であるが、之れに松を配した場合は傳花と云ふ事になつて居る。而して山櫻は主として山に育つものであるから之れに使ふ松は赤松を以てするがよく、其の位置は陰方下段が適當である。そして櫻の傳花を生ける時に使ふ松は總て若松よりも老松の方が風情あつてよく、何れも體先と見るべき部分に十分力をもたせ而も餘り横廣くならぬやう立ち上らせる事にし、大體に於て眞副體の趣を表すやう整へることが肝要である。そして松の前の方に櫻の花を多く見せ、恰も松の幹が霞に包まれてゐるかの如く風情つくる事は面白いものである。

其他、花の姿を賑に生け、花器も大型の物を選び行の置生として、中段より下段にかけて満開の花を使ひ、副先など散りか、つた風情を表はし、副下に五七輪の裏花を見せ、眞のみは幾分蕾があつて満開に近い程度のもになす等の事柄は本櫻と全く同一である。

傳花の生方は一樹の姿でなく、一山の風光を表はす意味のものであるから、相當の幹を用ゐるも水際より現には見せず、山の中腹に姿を示せる趣に取扱ふ考がよく、苔木や朽木など櫻の自然性であるから、適當なものを選び用ふべきである。

櫻は國華であり花王と崇められるもの故、床に飾る時は他の花と置き合さず必ず一瓶に限り、連花の節は上座に配する。席は入營出征など相應しきも婚禮その他の祝席には好まぬ。

山 櫻 (やまざくら) 「傳花」 逆勝手 行の花形 (平籠)



彼岸櫻 (ひがんざくら)

彼岸櫻の一般に就ては前に記したのであるが、總て此の材料は眞行の置生に適し、老樹で都合よいもの、ある場合に限り、掛花生や釣花生に草の花形を生けるも面白いとされてゐる。而して眞の花形には満開のものは相應しくない、それで大てい蕾勝ちの伸び／＼とした若枝をあつさり竹の寸筒などに生けることになつてゐる。

薄端などに姿を稍大きく生ける時には小さな木を配して幾分しつかりとした姿に取扱ふこともよいが、更に枝数を多く使つて艶麗に生けやうとする時には、相當太い籠か又は砂鉢の如き花器を選ばなければならぬ。

斯かる生方に於ては普通の花形よりも稍低く平たい姿に整へる考が大切であり、花形が賑やかであるから可なりな幹をあしらふことも肝要である。

本圖の如き一重立上生にあつては大體の姿を普通の一重生と同様に取扱ふも、彼岸櫻の個性を表はす爲めに、小枝を多く使ひ無数の花を見せて賑ならしめる事にし、また相當の幹を用ひ眞副など幾分曲ある枝を用ひて格好を整へるが相應しい。

草の花形は若木では容易に生け得ないものであるから、自然に枝の下がつたものなど見付かつた場合に生ける事がよいのであつて、斯かる材料を使ひ二重の上に艶やかに生けることも面白く、また掛花生や釣花生には下つた枝を軽く使つて姿を整へることが適するのである。總ての場合一種生をよいとすると、椿・瑞香・水仙・金盞花・菜の花などを根締に用ふるも差支はない。

筆記欄

彼岸櫻 (ひがんざくら) 一重立上生 本勝手 (竹一重切)





枝垂櫻に菜種 (しだれざくら・なたね) 一重立上生 逆勝手 (竹一重切)

枝垂櫻に菜種 (しだれざくら・なたね)

枝垂櫻は糸櫻とも枝垂彼岸とも云はれ、彼岸櫻よりも少しく花期を遅くする。此の木は相当大木をなし高さ數丈に達するものがあるが、總て其の枝條が長く垂れ下がりで無数の美花をつけるので頗る愛玩せられる。枝垂櫻は萼が紅色で花瓣が淡紅色であるので非常に美しく、殊に萬枝爛々として枝垂柳の如くそれに優しい單・重瓣の花をつける様は何とも云ひ難い美觀を呈する。彼の有名な京の祇園の夜櫻は之れ類するものであり、平安神宮の枝垂櫻など天下にその美を誇つてゐる。

華道では之を垂物とし行草の姿に取扱ふことが相應しいとされてゐる。而して之れを置生となす場合は、眞副を櫻で整へ體に當季の草木の花即ち椿・瑞香・菜の花・金仙花・東菊の如きを挿合せることがよく、廣口などにあつては、相當の幹を用ひ大木の趣を見せることが面白いものである。また櫻の前方に石を配し、女株に燕子花を生けた水陸生の如きは、陽春の氣に充ち頗る風情あつてよいものである。

又二重の上口に生けた場合、窓に燕子花や菜の花などをあつさりと入れる事は誠に奥床しいものであり、立上生の時には椿や菜の花の如きを配するのが相應しい。而して掛花生や釣花生には一種生が風情あつてよいのであるが、場合によつては前に示したやうな花物を根締にすることも差支ないのである。

彼岸櫻も他の櫻と同様に婚禮の席や老ひ先を祝ふ場合の床花としては好まないが、其の他の席や連花會合の花としては面白いものである。

連翹 (れんげう)

連翹の性状や風情については前に記した通りであり、これが生方の大體を述べて置いたが、この連翹は垂枝によつて之れが個性たる優味を十分に表はさなければならぬので、材料を選ぶ場合適當な枝を選定することに意を用ひなければならぬ。それには成るべくしなやか味ある優しい枝を選定することにし、決して太い枝を無理に撓めて垂らすやうな取扱をしてはならないのである。

本数は成るべく少い方がスツキリとして自然味の現はれるものであるから、大てい掛花生では二三本位にして根締に椿の二三輪も添へる程度に取扱ひ、眞行の置生にあつても五七本乃至九本位に止めることが相應しいのである。勿論、根締は連翹の優味に對し強いものは調和を缺く恐があるから、主として草物を選び木物であつても瑞香や庭梅の如きが好ましいものである。

連翹を眞の花形に生ける事も出来るが、其の時は三五本で眞副を整へ、體に他の草木の根締を配するか、五七本で眞副體を整へる程度に取扱ふことがよい、而して此の場合大てい眞に稍老木を使つて陰方に垂れを見せ、副體及びあしらひ等には若枝を使つて、連翹の叢生せる自然性を見せる事が相應しい。尙垂物を眞の姿に生けた場合は其の姿の如何を問はず、之れを眞の草に屬する花形と見做す事も知つて居なければならぬ一事である。

垂れ枝は一二ヶ所と云ふ事になつてゐるので、眞の陰方又は副、その何かを垂らすこともよく、本圖の如く二ヶ所垂れを見せる事も差支ないのである。

連翹 (れんげう) 本勝手 行の花形 (土器壺)



連翹 (れんげう)

連翹を稍大きく行の姿に取扱ふ場合は、材料も七九本位も使ひ、花形の如何によつて相當の幹を配することもよいものである。而して之れを一重に立上生をなすことも出来る、此の生方は普通の立上生と同様であるが、必ず眞の陰方又は副に垂れを見せることが肝要である、而して此の花形に於て垂枝の最も使ひ易いのは副を垂らす場合である。

二重生の場合は眞の枝全體が已に垂れた姿を示すものであるから、殊更に小枝の垂れたものを用ふるの要は無いのである、而して上重は連翹のみ一種でもよく、又之れが體座に花物を使ふことも差支はないが、成るべく連翹の風情を傷つけないやう優味ある材料を撰んで、軽く取扱ふことが肝要である。下の窓の花も此の心得をもち、花の色合その他に於て調和よいものを選ばばよいのである。

横掛・向掛・釣船などの花器にも連翹を生けて相應しいものであつて、何れも二重同様の考で取扱へばよいのであるが、總て此の木は木質が脆くて折れ易いのであるから成るべく其の材料が示す姿によつて花形を整へることが肝要であり、之れに撓めを施す場合には特に念を入れて如何なる細枝にても、節と節との間を丁寧に撓めるやうにせねばならぬ。

規定として垂物は祝儀賀席に用ひない事になつて居るから、平素の床花として生け又は連花會合の席花として用ふことが適當である。花器は成べく優味あるものをよいとすが、しかし何れを使ふも差支はないのである。

筆記欄

連翹 (れんげう) 逆勝手 行の花形 (平籠)



春の太蘭と燕子花 (ふとろ・かきつばた)

太蘭は前に述べし如く水草の垂物と云ふ事になつて居るが、實際の取扱に於て垂れ葉や蔭葉などは用ひない。殊に本圖の如く春日若葉の育つた計りの物である場合は之れが自然の如く殆ど直立の姿に取扱ひ、僅かの曲によつて眞副の恰好を示す程度にするのである。

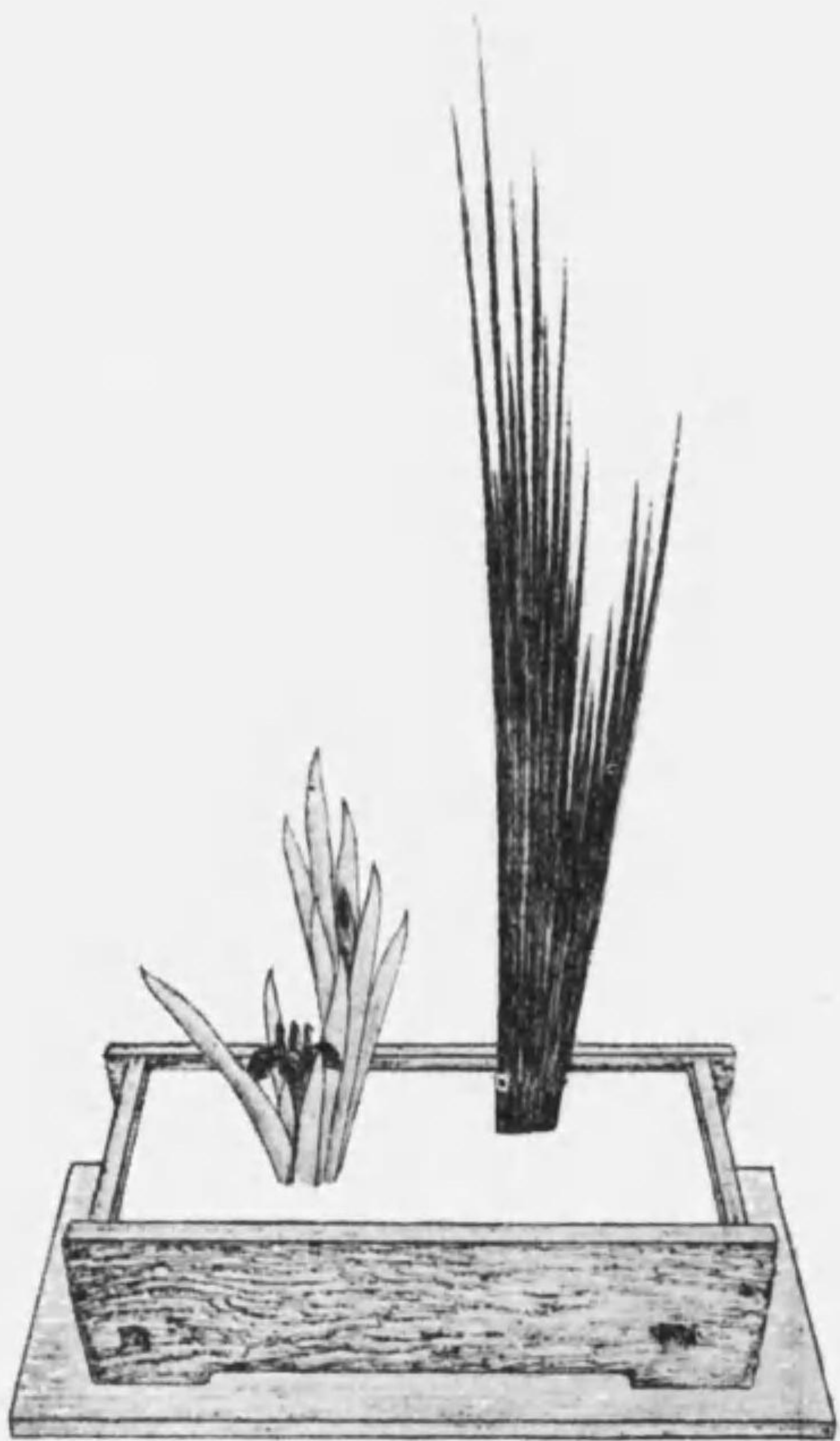
此の草は夏日淡黄褐色の花をつけるが、ただ一種の雅趣あるだけで決して美しいものではないのであるから、其の時季にも美しい花を持つ水草を之れに生け合せることにする。而して之は水物である關係上廣口の花器に生ける事が相應しく、花形は一株生・交生・魚道生などに取扱ふことが普通とされる。

本圖は春の太蘭に水草の杜若を配した魚道生であつて、男株を太蘭一種とし、女株を燕子花で整へたものであるが、總て此の魚道生は、花器の長い方を三等分に見て其の線上より稍中に寄つた位の處に男株女株を挿すことになつてゐる、そして必ず男株を少しく奥に、女株を僅かに前にする、即ち花器の對角線上に兩株を位置せしめることにするのである。此の生方は池中に兩種の水草が育ち、其の間に魚の道を見せるの意である。

而して此の花形は兩株を合せて一つの整つた花形となすが、もと一株生を眞副と體とに引き離した姿であるから、男株は眞副の恰好を示し、女株は體即ち根締の姿である、従つて兩者の高さなどに於て互に均衡を保つて居なければならぬ事は云ふ迄もない。なほ此の魚道生は總て水草二種を限り取扱はれるものであつて、如何なる場合にも陸物と水物、又は陸物二種などを以てする事は許されないのである。

(學習帖・初等科27、32参照)

春の太蘭と燕子花 (ふとろ・かきつばた) 魚道生 逆勝手 (水ザレ水盤)



初期の芦に燕子花 (あし・かきつばた)

芦は四月頃新芦の出初めた頃より十月頃まで生花の材料に用ふる事が普通となつてゐる、しかし場合によつて初冬の頃冬枯の姿を生ける事もあるが、それは別に差支はないのである。芦の取扱に就ての大體は前に述べた處であるが、爰には初期の芦について記すことにする。

本圖に示すものは四月頃漸く若芦の出た計りの物を材料としたのであるが、勿論若芦のみを使つてもよいけれども、其の時季のものは極めて丈が短かく、花形を整へることが困難であり、且つ初期の氣分を十分に表はす上に於て、昨年枯れ残りの古芦を眞や副に高く用ひることが好ましい。

而して若芦は其の眞や副に添はせて使ひ、根縮に燕子花を配したのであるが、此の生方では古芦が殊更に高く使はれ、爲めに體の燕子花など低くなつて居るが、此の場合に於ける古芦は添物であつて之れのみを標準として取扱はれたもので無いからである。それで五月頃になれば若芦を一段高く使ふと同時に古芦の數を減じ、六月頃には早や古芦を使用しない事にするものである。

尙ほ芦は垂物であるが、四五月頃までの若芦は其の自然が眞直であるから、それに倣ひ垂れ葉を見せなくても差支はないのである。

冬より春にかけて生ける場合枯れ物を使ふことにするが、元來枯れた草木を使ふことは餘り好ましい事ではないけれども、其の自然現象を花に見せ、其の季節の風情を表はすことには差支ないと思ふ。

初期の芦に燕子花

(あし・かきつばた)

砂

鉢

生

逆勝手

(水ザレ水盤)



金雀花に金盞花 (えにしだ・きんせんくわ)

金雀花は生花に最も多く使はれ、花の頃は勿論花無き頃も其の美しい枝條を賞でて一年中を通じて材料に選ばれる、而して花の姿も眞行の置生より一重・二重・掛・釣などあらゆる花形に用ひられるものである。そして花の頃は一種生もよく、之れに當季の花物を配するも差支ないとされてゐるが、花のない頃には是非草花を根締に使はなければならぬ。

金雀花の特徴として其の主なる事は、枝條の美しい事であるから、生花では小筋の物まで一本々々丁寧に捌いて、梳られたやうに整へることが肝要であり。垂れ物であるから花形中一二箇所に必ず垂れ枝を見せなければならぬ、而して垂枝の場所は普通通副又は眞の陰方うしろあしらひ等にするが、すべて弱く優しいものを選び自然らしく取扱ふことが肝要である。

本圖の如く二重立上生に取扱つた場合は、上の重に當季の草花を根締に使はなければならぬが、其の材料は色合などに注意し、金雀花の美しさに不調和ならぬやう考慮を拂ふことが大切である。大體の取扱方は普通の場合と同様である。

金雀花は二重の上に生け下の窓に杜若その他の草花を配するが如き取扱ひも面白く釣舟などに一種を生け又は草花を根締に使ふこともよいが、斯かる場合根締の草花は必ず其の挿口を體形の枝の前に挿すことにせねばならぬ。

此の花は垂物であるから改まつた祝席に生けてはならぬが「縁にしだ、とか雀(花の形)百まで踊わすれぬ」などのことを意味して、祝席に使ふこともある。

金雀花に金盞花

(えにしだ・きんせんくわ)

二重立上生

逆勝手

(竹二重切)



山茶黄 (さんしゆゆ)

山茶黄は落葉灌木であるが幹も相當大きくなり高さも丈餘に達する。若枝は至つて素直であるも老樹になれば甚だしく曲を表はして来る、しかし老樹であつても其の新枝は矢張り伸びノと素直に立ち上るものである。

生花では主として若木は眞又は行の姿に生け、老樹を行草の花形に取扱ふも、大體に於て此の木は行の置生に最も相應しいものである、餘り僅かな材料で眞の姿などに生けると淋し味を感じるので、五七本位も使ひ相當賑やかに生け、陽春の氣分を表はすことが大切である。

山茶黄の個性であり特徴とするのは左右に小枝が多數分岐する點である、されば生花に於ても此の特徴を十分に表はしてこそ山茶黄の味も出るものである、然るに稍もすると各枝先に缺を入れて、其れ等の小枝を剪り落して一本にして了ふことがある、之れは甚だしい間違ひである、勿論、眞副體などの枝先は小枝を摘み去つて一本となすもよいが、其の他のあしらひ枝などは二股三股の儘に使ひ、成るべく極端に感ぜられない限りは缺を入れない事が望ましい。生花も少しく進んでからは花則に反しない範圍に於て、出來得る限り其の個性を生かすべく取扱ふやう、その點を十分に研究することが肝要である。

本圖の如く可なり多くの材料を使ひ、賑やかに生けた場合は一種生もよいが、之れが體に他物の根絡を配することも差支はないのである。また山茶黄は晩秋の頃落ち残りの葉と實のついた材料を使ひ、菊などを根絡として生けるも面白いものである。

山茶黄 (さんしゆゆ) 一重立上生 逆勝手 (竹一重切)



棣棠に燕子花 (やまぶき・かきつばた)

棣棠は山吹とも書き薔薇科に属する落葉灌木で山野に自生するも、専ら觀賞用として庭園に栽培せられる。莖は叢生して高さ四五尺に及び、四月頃新芽を生じて後ち枝先に黄色の五瓣花を開く、種類によつて重瓣のものもあるが何れも頗る美觀を呈する。而して單瓣のものは花後實を生ずるも重瓣花は「七重八重花は咲けども山吹の實の一つだに無きぞかなしき」の歌の如くに結實を見ないものである。

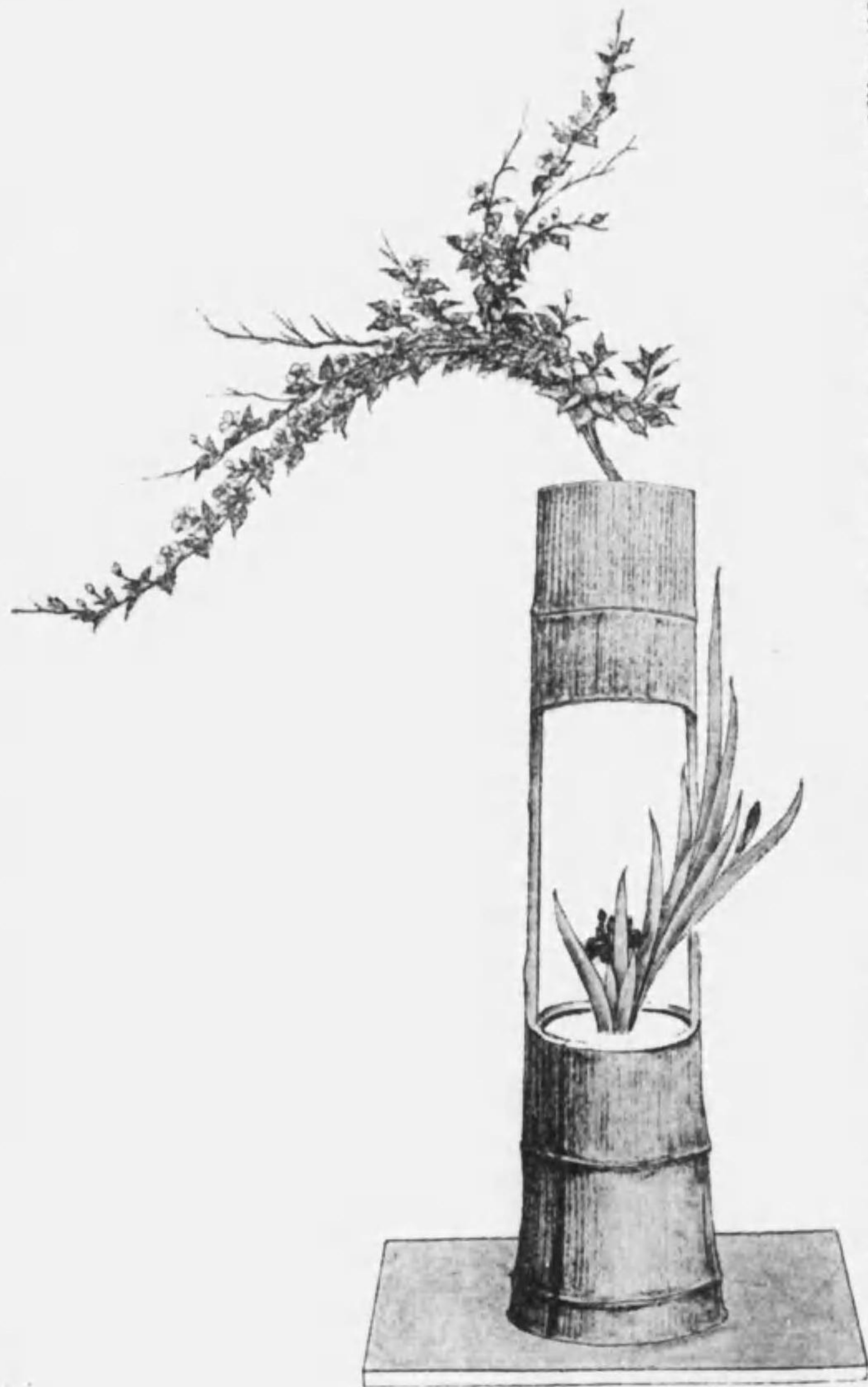
棣棠は莖が軟弱で直立出来ないものであるから華道では之れを通用物とし、垂物中で片垂れ物として取扱ふことになつてゐる、花の姿は大てい二重の上や横掛・向掛・釣生などを以てするが、場合により之れを置生にする事も出来る、しかし其れには餘程技術を要するのであるから、初心者には置生けはしないのが安全である。

棣棠は其の自然の姿が眞の枝に適するもので、副に相應しいのが甚だ稀であるから材料を選ぶ時には此の點に心を用ふる事が肝要で、これさへ有れば容易に生け得るのである。また棣棠は土際の新芽には花をつけぬものであるから、花形も體には成るべく花の少ない枝を選ぶことは自然味を表はすことになつてよいものである。

また他物をもつて之れが根締となすことも差支ないが、通用物であるから必ず草花を配することにせねばならぬ、そして色合には特に意を用ふる事が肝要である。

棣棠は優しい姿のものであるから金屬の花器は好まぬ、なるべく竹器・籠類・土器の如きを選ぶべきである。而して垂物であり實なきもの故婚禮席は勿論一切の祝席に好まぬ。

棣棠に燕子花 (やまぶき・かきつばた) 二重生本勝手 (竹二重)



初春の燕子花 (しよしゆんのかきつばた)

燕子花は早春より初冬まで殆んど一ヶ年を通じて生けられるものであり、季節によつて花葉の状態を異にするのであるから、其の時に適合するやうに取扱ふことが肝要である、而して各期に於ける變化の状態は前に記したのであるから、爰には初期の燕子花に就て述べる事にする。

生花では僅かに五六寸位に伸びた頃より用ふるものであるが、此の季のものは葉が幾枚も重なり合つて株は極めて低く、そして平たい姿をなしてゐる。殊にまだ生れた計りの軟弱な葉であるから斯かる材料は葉組をかへず、或程度にしつかりとなつてから葉を解き離して組みかへるのが普通である。しかし材料の都合で葉組をする事は素より差支はないのである。

花の姿は其の自然に倣つて低く平たく取扱ひ、葉を素直に使つて眞又は行の花形に整へることにする。そして葉よりも花を低く使ふのであるが、此の季は葉も至つて低い折であるから、花は餘程低くなる譯である。而して株数も多くせず發芽期の氣分を生け表はすことが肝要である。

初春中春の花は大てい昨年の出遅であつて、初めに咲いたものよりも後に出了た莖の莖が高く伸びるのである、それで生花では二輪生の時は、すべては體に開花を使ひ、莖を副に用ひて眞を葉のみとし、或は眞に堅い莖を使つて副を葉のみとするが、三輪生の場合には體に開花を見せ、副に莖、眞に堅い莖と云つたやうに、後に生れたもの程高く使ふことにするものである。

筆記欄

初春の燕子花 (しよしゆんのかきつばた) 二輪生 逆勝手 (廣口土器)



辛夷 (こぶし)

辛夷は木蘭科に属する落葉喬木で高さ二三丈にも達するが、此の一種に高さ間餘に止まり、枝振り密に出て多くの花をつけるものがある、都會で辛夷と稱へ生花材料に使ふのは多く此の種である、何れも新葉に先だつて白色の花をつけ相當觀賞に値するものであるから、庭園などに多く栽培せられる。

生花としては眞・行・草いづれの花形にも生け得ることになつて居るが、此の木の姿より見て行の生方が最も相應しいやうである。而して辛夷は其の風情を生け表はす上に於て一種生を最もよしとするも、場合により當季の草木の花を之れが根締に使ふことも差支はないが、辛夷の花が白であるので之れに使ふ根締は赤の椿や躑躅など殊によく、草物では菜の花や紫蘭の如きが適する。

辛夷は玉蘭と同じやうに木質が至つて脆い爲めに挽めを施すことが困難であるから、最初材料を選定する際に枝振をよく見立てることが肝要である。尙ほ材料に相當の幹を使ひことに砂鉢の如きを生ける場合は可なりの幹を用ひてドツシリとした姿に整へることが相應しい。

辛夷は大體に於てしつかりしたものであるから、花器も金屬器や土器などに調和よいものであるが、時によつては竹器や籠の類も相應しい場合がある。

辛夷を生ける席としては佛事などが好ましく、其他連花會合の花としてもよいものである、しかし祝儀の席花としては餘り好まぬ。

筆記欄

辛夷 (こぶし) 本勝手 行の花物 (御玄猪)





白藤 (しらふぢ) 釣生 逆勝手 (黒銅月形花生)

筆記欄

白藤 (しらふぢ)

藤は苧科に属する纏繞性木本で山野に自生し觀賞用として庭園にも栽培せられる。葉は他物に纏はつて数丈の高さに達する。葉は數個の小葉を有する奇數羽狀複葉で、四五月頃葉腋より長さ數尺に及ぶ花房を垂れる、花の色は紫と白であるが薄紅色位のものもある。而して藤の莖は白藤は左巻で紫藤及び其他は右巻である。



紫藤 (右巻)



白藤 (左巻)

り且つ枝先が蔓狀をなして居るので蔓物として取扱ふことになつて居る。而して之れが生方は草の花形に限り、大てい掛花生・釣花生・船・二重の上などに使ふのであるが、場合によつては殆ど枯れたやうな赤松にからませて生け、根締に草花を配して置き生けになすこともある、之れは「藤かけ松」と云ふ取扱ひである、しかし元來が蔓物であるから置花生には好ましくぬものである。

掛や釣に生ける時は他の木物を手に使つて生けることがよく、また藤と藤とからみ合せて立ち上らせることもあるが、この場合の巻き方は其の藤の自然に従ひ、白藤は左巻、その他は右巻きとなし、其の箇所がハッキリと見えるやうに取扱はねばならぬ。其他蔓先を必ず上に向はしめる事や、花房を纏れなく美しく垂らす等の事が大切である。なほ之れに草物の根締を使ふも差支ないが、一種生の時は體には花を見せないことが自然に叶つてよいものである。

藤は木物であるが莖至つて弱いので、華道では竹・牡丹・藤を三通用物とし、獨りてに立ち上ることが出來ず他物に纏は

老松に石南花 (らうしよう・しやくなげ)

筆記欄

松は若松・中年松・老松(それら)風情を異にするものであるから、此の自然味を生花の上に見せる事が肝要である。本圖は黒松の老樹を砂鉢に大きく生けた物であるが、此の取扱に就ての心得としては、松は雄大味を見せる事が大切であるから、此の意味に於て相當の太い幹を使い、成るべく一本か二本迄に止める。そして幾分垂れた様に枝を整へ其の枝先の葉は叢生して團をなして居るが如く見せる、此の性状は赤松に於て殊に甚しいのではあるが、黒松にあつても老樹の場合はこの取扱が大切である。また老松を生ける場合一瓶中幾箇所かに葉のついて居ない枯枝を見せることも、風情を表はす一法として必要な事柄である。

松には必ず常季の花物を根締に用ひなければならぬ、それには牡丹・櫻などの特種なものを除く外の草木は何れを使ふも差支ないものであるが、花形によつて適當なものを選択する事が肝要で、本圖の如き場合は白玉椿・長春・躑躅・石楠花・大中輪菊などしつかりした物が調和よいものである。而して水陸生をなす場合は水草のうち松に相應しい物を選ばなければならぬ。尚、これは松に限つた事ではないが、すべて砂鉢に生ける場合は、眞の枝に對して副や體を低く使ひ、十分に張らせて平た味を見せるやうにする事が肝要である。

松は一年中を通じて生けられ、其の風姿諸木に優れ且つ縁かはさぬ採をもつものであるから、之れ等の點を賞して如何なる賀席に生けるも差支ないものとされて居るが席の如何によつて之れが根締の材料に意を用ふることが大切である。

老松に石南花

(らうしようにしやくなげ)

砂鉢生

本勝手 (黒銅砂鉢)



葵 (あふひ)

葵は葵科に属する草本で専ら觀賞用として栽培せられる。種類七八も算へられるが普通に最も多く見受けられるものはタチアフヒと稱へるものである。この種は多年生で莖の高さ七八尺にも及び、葉は互生し心臟形の淺裂ある相當な大葉で、五六月頃葉腋に大形の花を開く、花の色は帯紅紫色の絞り最も多く、紅・白・紫など様々あつて何れも美しいものである。たちあふひは多く單瓣であるが、また重瓣のものもある。

莖は直ぐに育つものであるから、之を生花とする場合にも眞の花形に取扱ふことが相應しく、材料も二三本位を使ひスツキリとした姿に整へることが望ましいが、場合によつて五本迄は使用することも出来、行の眞程度の花形にも取扱ひ得るのであるが餘り好ましくはない。

本圖は眞一本・體一本をもつてし、體先と副先とは太い葉を働かせることにし、一瓶の姿を整へたのであるが、葵は二本位の少數を使つて生けることが最も相應しい、しかし別に副に一本を用ひ都合三本で整へることもよいのである。

元來葵は雅趣あるものでもなく、直幹であつて變化ある取扱も出来ないものであるから、生花として餘り面白味を感ずるものではないが、眞の花形を生けるに最も適當な材料であるから茲に範例として示すことにした。

花器は竹器など相應しく、一般祝席などには用ひないことになつてゐる。

葵 (あふひ) 本勝手 眞の花形 (竹寸筒)



燕子花 (かきつばた) (其一)

本圖及び次頁に掲げた圖は何れも春の盛り期のものを取扱つたものであつて、中春頃の燕子花發育状態と見るべきである。初春や中春の初め頃の花は大てい昨年の出遅れのものであるから、花莖が短かく花數も少ないが、中春も中頃に至ると餘程暖氣加はり、今年芽生えた物も咲き始める事になり、爲めに開花・莖ともに高く低く全く不規則となり、一時混亂状態を示すものであるから、生花に於ても此の自然状態に倣つて、花數も五七輪乃至九輪も使ひ、開花と莖を高く低く巧に取りまぜて用ふることが相應しい。そして花の姿も素直な中に伸びノとした力のこもつた趣を生け表はすことが肝要である。

花形は眞・行・草いづれにも生け得るが、大てい眞か行の置生に取扱ふことが普通となつてゐる。尤も此の季節にも二重・立上り生・掛釣などに生けても差支はないが、まだ葉が短かく姿も素直であるために、餘程熟練した者でないといふ十分に風情ある取扱は出来難いものである。

中春の終り頃より今年芽生えた花が咲き出るのであるが、之は早く發生したものでより高く伸びて開花し、莖もだん／＼伸び上つて花を開くことになる。それで此の期には開花を上段・莖を中段・下段に使ふことが適當なるも、花莖を五七本以上十三本も用ふる場合は眞・副・體に開花を使ひ、莖を其他のあしらひに用ふるやうにすると、花形を整へる上に都合よいものである。殊に體の開花一輪は花に落ち付きあつてよいものである。

筆記欄

燕子花 (かきつばた) 逆勝手 行の花形 (廣口水盤)



燕子花 (かきつばた) (其二)

盛り花は材料を相当多く使つて姿の瘦せないやうにし力めて賑やかに取扱ふことが相應しい、そして晩春の頃よりは暖氣も増して来るから、今まで素直に引き締つた姿に扱つて居たものを漸次緩やかなるやうにし、一ヶ所位は靡き氣味の葉を見せて、其の氣分を表はすことにしたい程である。

此の季に至ると花莖も餘程高く伸びることになるが、しかし未だ發育中の折であるから花よりも葉の方が高いものであるから、生花にても此の考で整へることが肝要である。

本圖は中春の頃燕子花一種を男株・女株に分けて魚道生をなしたものであつて、男株に花莖七本を使つて眞・副の姿を整へ、女株に二本の花を用ひて體としたのであるが、晩春の盛り期などにあつては十一輪も十三輪も用ひて、十分に賑やかに派手に取扱ふことが相應しいものである。

燕子花には紫碧色・白色・淡紅色・翠碧色・斑など種々あるが、其の原色は紫碧色で其の他の物は何れも變化したものである。魚道生などでは二色の物を生け合せる事もあるが、華道で定められた色の順位即ち白・黄・赤・青・紫の規定より言へば、此の場合白花を男株とし女株に紫花を用ふべきであるが、燕子花は其の原色が紫であり、且つ自然の發育状態より見ても、白より紫のものが太く高く育つのであるから、紫花を男株に白花を女株に使ふことが相應しい。

燕子花や菖蒲は葉組に重きをなすも之を觀賞するのは花であり、殊に陽性の草本であるから祝席に用ふるも差支はないが、すべて華道では紫花を祝儀の席に忌むことになつてゐるから、普通白花をもつてする事になつてゐる。

燕子花

(かきつばた)

魚道生

逆勝手

(水ザレ板砂鉢)



紫 荆 (すはう)

紫荆は豆科に属する落葉木本で多く庭園などに栽培して觀賞する。幹は相當高く育つても大木とはならず、根元より小さな幹を灌木状に出す。四月頃葉に先だつて節々より紅紫色の小花を簇生し、落ちついた味を示すものである。此の木の特徵は割合に太い小枝が節々よりコキノと規則的に屈曲を示し、花は下方より咲き上り、根元の方は満開してゐても中程は半開、上部は若と云つゝやうな特異の趣を示す。

花の姿は眞・行・草いづれにも生け得るが此の木の自然より見て行の花形などが最も相應しいやうである。總じて成るべく派手に生け春陽の氣分の漂ふやう心掛け、花形の瘦せないやうにせねばならぬ。それで砂鉢などに大きく生ける時は可なり太い木を使ふことが望ましい。

紫荆は幹がコキノと屈折して居るので水際が亂れ見苦しくなり勝ちのものであるから、始に一本々々丁寧に曲を直し美しく水際を描へることが肝要であるが、尤もそれは水際だけの事であつて其の他の部分は自然の儘の曲を見せるのである。なほ成るべく枝先を剪らないやう心掛け、止むを得ぬ場合には斜に切り其の部分の花を少しく除いて自然らしくせねばならぬ。

此の木は一種生よきも都合によつては他物の根縮を使つたがよい場合もある。本圖の如き花形に於ては上口に黄色の葉の花を使ふことが色彩の調和よく、又砂鉢に燕子花を配して水陸生をなすも面白い。此の花は紫色であるから祝儀の席には好まぬ。

筆 記 欄

紫 荆 (すはう) 二重立上生 逆勝手 (二重切)



紫木蓮 (しもくれん)

紫木蓮は木蘭科に属する落葉亞喬木であるが、玉蘭と異なり灌木状を呈して土際より小幹を簇生し高さ間餘に止まる。花は四月末より咲き始め同時に葉を生ずる。花の色は紫色で頗る香氣高いものである。

木蓮はすべて若木の間は枝素直に伸びるも老樹になると伴って漸次伸びが悪くなり、小枝を多く出して曲を示すことになるが、しかし所々に若木で見るとやうな素直な枝を出す。そして其の蒼は生育地の如何に拘らず南に面した方の花壇が著しく發育するために、彎曲を示し其の尖端が多く北に曲つてゐる。

花の姿は眞・行・草何れにも生けるが、挽めを施すことが稍困難であるから、成るべく自然の枝振を利用するやう心掛けなければならぬ、それで若木は主として眞、中年のものは行、老木は草と云つた風に取り扱ふことが都合よいものである。而して之を最も恰好よく生けるには、葉の少し出初めた頃がよく、この季節には花が割合に少ないので、葉をあしらつて姿を整へ、その間に點々花を見るやうにすると都合がよい。

紫木蓮は一種生もよく當季の草木の花を根給に使ふも差支はないが、色彩調和の上より白又は黄色のものを選ばなければならぬ、また此の花は下方より咲き上るのであるから中段に開花を用ひ、眞・副など主要部には半開位のものを使ふ事が相應しい。

紫木蓮は死と瞑目と蓮とを聯想され、且つ紫色でありシの字がつく等の事で、一切の祝席には用ひない。しかし蓮の名前がつくので佛事によいと云はれ、又目蓮尊者の名に差合ふから用ひないとも云はれてゐるが、之等は誠に他愛ない事柄である。

筆記欄

紫木蓮

(しもくれん)

砂

鉢

生

逆勝手

(水サレ板砂鉢)



麻葉繡毬 (こでまり)

筆記欄

麻葉繡毬は薔薇科に属する落葉小灌木で原産は支那である。幹は細くて高さ四五尺に達し新條は傾垂を示す。春日新葉と共に白色の小花を繖形狀に排列し毬の如くに密集する。此の頃に至ると花の重みで枝條が著しく下垂するので、華道では此の花を垂物として總て掛や釣又は二重の上などに草の姿を生けることになつてゐる。

麻葉繡毬は古枝に多く花をつけ、根元に叢生する新芽には花を見せない事が自然であるから、花形の上に於ても之に倣ひ、體には餘り花のついて居ない枝を配することが望ましいのである。

此の材料は主として一種生をなすも場合により他の根條を使ふも差支はないが、麻葉繡毬は通用物であるから之が根條には草物をもつてせねばならぬが、二重の上などに生けた場合、窓に紅檜などの木物を使ふことは差支はないものである。

本圖の如く月形花生に生ける際は眞を懸崖狀に長く使ふので、垂物たる意味を表はす事になるから、特別に垂れ枝として別に使ふ必要はない。そして副を立ち上らせ體を月の中に收める事にするが、此の生方では眞と副との岐れを月の輪の處に見せる事がよく、輪の中で岐れる時は窓をなすので面白くない事になるのである。なほ眞と副との中間に枯枝を見せる事は、自然性と風情とを表はし得てよいものである。

麻葉繡毬は垂物であるから祝儀の席には一切用ひない事になつてゐる、それで普通の床や連花會合の花として専ら用ひられてゐる。

麻葉繡毬

(こでまり)

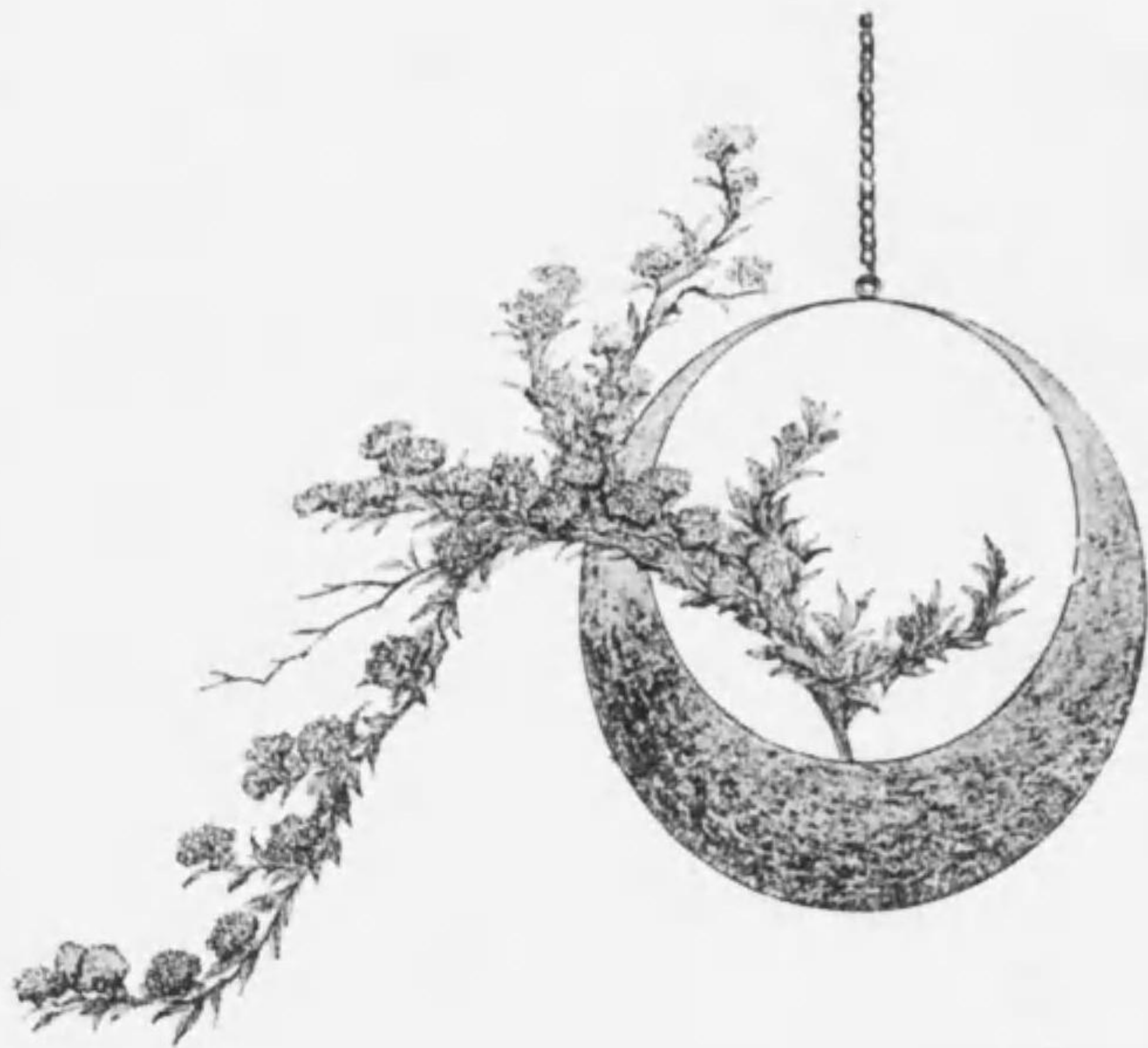
釣

生

本勝手

草の花形

(月形花生)



牡丹 (ぼたん) 其一

牡丹は毛茛科に属する落葉灌木で支那の原産である。唐土では「花王」と稱へ恰も我國に於ける櫻の如く愛で尊んでゐる。樹は高さ六七尺に止まり早春の頃枝頭に紅芽を發し、それより葉を生じ五月頃花を開く、色に淡紅・濃紅・猩血紅・雪白・粉白その他粉紅に深紅の暈あるもの又は白色に紫暈あるもの等様々あり、大輪・小輪何れも一重・八重・千重・萬重などがある。此の他に寒中に花を見る寒牡丹もあるが花は稍小形である。牡丹の木は灌木で柔しいので華道では草木通用物とされてゐるが、殊に竹・藤・牡丹の三つを代表的の物に選び、三通用と稱へられてゐる。而して其の氣品と美しさを賞し之を七種傳花の一つとして特別取扱をされる事になつてゐる。即ち牡丹は其の徳を尊び且つ美を傷けないために他の草木を絶対に挿し合さず、必らず一種生となし、且つ品位と風情を現はす上に於てすべて置生に限り、如何なる場合にも掛や釣には用ひない事になつて居る。

牡丹は至つて貴重なものであるから成るべく少い數を使つて姿を整へる意味に於て花の數を二三輪とし葉は之に相應する程度のもを以てする。而して花は同色のものを使ふことがよいが、しかし材料の都合で二色を取り合せて生けるも差支はないとされてゐる。

花の使ひ方は總て上段に蒼、下段に開花と云ふことになつてゐるが、材料が短い時は枯幹を眞に使ひ或は葉を以て眞となすが如き取扱もされるが、開花は必ず體に見せることにするのである。

筆記欄

牡丹 (ぼたん) 『傳花』 本勝手 行の花形 (籠)



牡丹 (ぼたん) 其二

筆記欄

花二輪の時はすべて開花一輪、若一輪をもつてし、若を眞、開花を體に使ひ、副を葉のみとする、又は前圖の如く中段に若、體に開花を用ひ、眞や副を花の無い枝若しくは幹をもつてするものである。

花三輪の時は本圖の如く眞及び眞のあしらひに若と中間の花を使ひ、體に開花を見せ、副を葉のみにするか、又は眞・副・體に一輪づつ、を配するかするのである。

幹の数はすべて五・七・九・十一などの奇数による事は申す迄もないが、牡丹は土際より出た新しい芽には花をつけられないものであるから、此の自然に倣ひ水際には必ず昨年の古い莖を使ひ體の花を配することにせねばならぬ。なほ眞などに使ふ枯幹に南天を代用するなどは、練習の際にはよいとしても正式の花には絶対に許さないものである。

牡丹の花配は花王の徳に對し、すべて眞の花配に非箇に組むことに定められてある。而して正式の花配は青竹を用ひ、初めに向ふ側の一文字を入れ、次に左右の二本最後に手前の一文字を入れる事になつてゐるが、初心者にあつては便宜上、左右二本を嵌め、次に後と前の一文字を入れるも差支なしとの許しもあるが、しかし練達してからは正式の組み方によらなければならぬ。

花器は手ある籠、手なき籠何れもよく、之に次ぐに土器をもつてする。席は何れに生けるも差支はないが、數瓶生け並べる時は必ず上席に配すべきである。而して祝席には一切枯幹を用ひない事が肝要である。そして佗を主とする茶席の花としては好まず、新築、移轉などには赤色の花を遠慮すべきである。

牡丹 (ぼたん) 『傳花』 本勝手 行の花形 (籠)





玉 蟬 花 (はなしようぶ) 本勝手 眞の 花の形 (尊式)

玉 蟬 花 (はなしようぶ)

玉蟬花は鳶尾科の多年生草本で水邊濕地に生育するが、概して陸のものより水中に生ずるものが丈も高く花冠も大きい。早春地下莖より二三枚の水切葉を出し、それより順次に完全な葉を出す。玉蟬花の發育状態は燕子花と同じやうに、下部の懐に抱かれたる葉が伸びるのであるから、葉は互に抱き合ひ葉先の爪も燕子花同様發生順に向き合ふことになつてゐる。花には白又は紫があり、何れも晩春より初夏にかけて殆んど一ヶ月も咲き續けるが、その間に一つの花苞中から二三度咲き變るのである。そして葉より花莖が伸びて高く開くので盛り期には頗る美觀を呈する。

花の姿は眞直に育つ自然性に倣ひ眞又は眞に近い行の花形を以てし、或は水盤に男株女株の生方をなす位とし、決して掛や釣に草の姿を生ける事はしない。そして普通一種生をなすが、廣口の花器に水陸生の女株に使ひ、或は竹の根締とし又は太藪や蒲の如き直ぐなものと交生などする事も出来る。

玉蟬花は燕子花同様一たん葉を解き放して、體を三枚組とし其他を二枚組に整へるが、其三枚組の葉は燕子子の三枚組の中央の葉を長く引き伸ばした姿に整ふればよい。そして其他の二枚組は短い葉を前に長い葉を後に重ねるので、丁度三枚組の前の葉一枚を除いたものと同様にするのである。

體は葉ばかりとし、花数は二輪の他は五・七・九・十一などの奇數を使ひ、二枚組の葉も五・七・九等の奇數によるのである。そして開花を高く花と花を近く用ひ苔は稍低く見せる。此の花は主として端午に生けられ白花は總ての祝席に用ひられる。



玉 蟬 花

(はなしようぶ)

逆 勝 手

魚

道

生

(水ザレ砂鉢)

玉 蟬 花 (はなしようぶ)

玉蟬花は水陸何れにも育つものであるから生花では水陸通用物として、陸草とも水草とも見做し何れにも取扱ふことになつてゐる。大體の姿は燕子花に酷似し生育状態もそれと同様で、葉が互に抱き合ひ其の懐より新葉を生じ、葉先の爪は互に向き合ふことになつて居るが、燕子花と相違せる點は次の如き事柄である。

- 一、燕子花の女性的で優し味あるに反し、玉蟬花は凛々しく男性的であること。
- 一、燕子花は四季咲のものもあつて、殆んど十ヶ月餘に亘り、其季節により種々變化を示すが玉蟬花は一ヶ月位を花季とする。
- 一、燕子花は一莖より一花を出すのであるが、玉蟬花は葉腋より枝を出し、之にも花をつける。
- 一、燕子花の花は季節によつて高く低く開花と蒼も時候によつて高下するも、玉蟬花は總て開花高く蒼低くなつてゐるが、しかし低いと云つても中段以下には花を見ない。
- 一、燕子花の水際の出生葉三枚組は中央の新葉を低く見るも、玉蟬花は之と全く反對に他の二枚よりも中の葉を高くする。
- 一、燕子花は季節によつて眞行草すべての花形に取扱ひ得るも、玉蟬花は直ぐ出生のものなれば、眞行の置生に限り如何なる時にも掛や釣に草の姿に生けることはしない。
- 一、燕子花は水草であるから他の水草同様の取扱によるも、玉蟬花は陸の草木と生合せ又は水陸生、魚道生、水草との交生など、すべてに用ひられる。



溪 蓀 (あやめ) 本勝手 行の花形 (平籠)

溪 蓀 (あやめ)

溪蓀は鳶尾科の多年生草本で水邊又は平地に生育するも、生花材料として又は觀賞用として園圃に多く栽培せられる。花葉の姿は燕子花や菖蒲などに似てゐるが、花冠至つて小さく葉巾も狭くて總てが優しいものである。

生花としては自然の儘を根引して使ふことが最もよく、殊に紫花の溪蓀は根元が紅色を呈して居るので、此の特徴を水際に見せる上には根引のものが最も好都合である。而して此の場合眞・副體に使ふ材料の高さを考慮して適當なものを選ばなければならぬ。

また材料の都合で葉組を仕替へる事もあるが、其の場合水際の三枚組の葉は、一番長いものを前にし、一番短かい葉を次に重ね、其の後に中位の高さの葉を重ねて中央に見せ各葉の高さが段々になるやうに整へ、其の他の二枚組の葉は長い葉を前に、短かい葉を後に重ねて使ふことにする。

花の姿は行の花形最も相應しく、大てい一種生をなす事になつてゐるが、場合により溪蓀を他の草木の根縮として用ふることも出来る。一瓶一種で整へる時花の数は三五輪乃至七九輪を普通とし、花は葉よりも高く又は低く適當に用ふればよいのである。此の材料は至つてしなやかな物であるから、總て緩やかに取扱ひ、副や體の葉など垂れを見せ、或は靡き氣味に取扱ふことが、風情を表はしてよいものである。そして花器は其の柔しみに調和するやう口の廣い土器又は籠の類を選び、一般の祝席に生けるも差支ないものであるが、紫花であるから特に改まつた祝儀の席には好まぬ。

筆 記 欄

芍 藥 (しやくやく)

芍藥は毛茛科に属する多年生草本で専ら庭園などに栽培し觀賞せられる。此の花は藥用植物として支那より移入せられたものが、今日では觀賞花卉として愛養せられるに至つた、種類には多々あるが何れも春日莖を生じ高さ二三尺に達し枝を岐つて數花を開く、色には紅・白・淡紅・深紅などあつて、單瓣、重瓣の別がある。何れも相當大きく美しいものであるが、また其の莖を包む程に繁茂する鮮綠色の葉も實に美しいものである。

芍藥は直ぐに育つものであるから、生花では眞行の何れかに取扱ふことにするが、其の福やかなどつしりとした趣を生け表はす上に於て行の花形が最も相應しいものである。而して牡丹芍藥と並び賞せられるほどの物のゑ、其の品位を賞して總て一種生をなすが、また他の草木とは絶對調和しがたいからでもある。

材料として満開のものは花瓣が垂れて見苦しいので、成るべく満開に近いものより半開莖と云つたやうに選び用ふることがよく、花の數に定めは無いのであるから、花形の大きい場合は相當多くを用ひて差支はないが、すべて花の數を奇數にすることは申す迄もない。

總て開花を高く莖を低く使ふことや、花なき枝を數本生けませるなど、此の花の自然を表はす事になつて好ましい事柄である。而して水際は必らず大葉を使ひ美しく整へなければならぬが、すべて葉を生かして福よかに整へることが、特に大切である。

芍藥は藥草たる意味より改まつた席には生けず、殊に婚禮には忌むことになつて居るが其他は花の色に注意すれば大い差支はない。

筆 記 欄

芍 藥 (しやくやく) 本勝手 行の花形 (籠)



著 莪 (しやが)

著莪は山野に自生する多年生常緑草本で、地下莖より芽を出し高さ一尺四五寸位に達する、夏日莖を抽んで一二尺に及び數枝を出して、白色に紫の斑點ある美しい花を開く、其の形胡蝶に似てゐるので胡蝶花とも稱へられる。

大體の姿が低く平たいものであるから、生花でも主として行の花形に取扱ふことにする。花莖は大てい二本を使い、一本を眞に一本を副とするが、材料の都合で三本を選び、眞・副・體眞などに配するか又は眞と内副と眞の前、胴の部分など前後振分けに用ふることもよいのである。

すべて花は葉よりも高く使ひ、莖を低く開花を高く取扱ふことが肝要である。而して葉は自然の儘に用ひ葉表が眞の花の方に向ふやうにすればよい、それで成るべく自分に出かけて根着の儘の材料を選ぶことが望ましくも、止むを得ぬ場合は一部分葉組を仕かへて生けることも差支はないのである。

著莪は常緑草本であるから、昨年の葉が本年まで残つて居る、それで先枯れのした去年葉を少しく生けまぜることは、風情を表はしてよく、また成るべくしなやかに垂れ氣味を見せ、緩やかに取扱つて著莪らしい風情を表はすことも亦肝要である。

著莪は大てい行の置生に一種生をなすが、すべて低く平たい趣をなすので、之に相應しいやう低くて平たい怪しい土器、籠の類か、又は廣口などを選ぶ著莪は陰物なれば質席には用ひられないのである。

筆記欄

著 莪 (しやが) 逆勝手 行の花形 (廣口水盤)



木 瓜 (ほけ)

木瓜は薔薇科に属する觀賞用灌木で高さ六七尺に及び、葉は長楕圓形をなして互生す。陽春四月頃葉に先だつて花を開く、種類には色々あつて白花のものを白木瓜、深紅花を緋木瓜、紅白雜色のものを更紗木瓜といひ、山野に自生するものは草木瓜と稱し、通常一尺位に止まり花の色は樺又は淡紅色である。

花の姿は適當な材料さへあれば眞の花形にも生け得るが、普通行又は草に取扱はれる。而して此の花は相當美しいものであり、幹の線も亦賞すべきものであるから、一種生をなすことが最も相應しいのであるが、場合によつては木瓜の花の色と調和より草花を之が根締に使ふことも差支はないものである。

木瓜は垂物ではないから、之に垂枝を用ひなければならぬ譯は無いが、本圖の如く副や眞の陰方などに面白い曲線や垂枝などを使ふことは、自然に出來たものであるから素より差支はなく、殊に之によつて木瓜がもつ曲線美を表はし、同時に木瓜の柔し味を感じしめる上に於て効果ある取扱方である。

木瓜は柔しいものであり且つ灌木であるから、成るべく軽い感じのする土器・竹器・籠の類などに相應しく、金屬器を使ふ場合にも此の心得をもつて選ぶべきである。なほ此の花は餘り祝席などに適しないものであるから、日常の床や連花などに専ら用ひられてゐる。

水揚法としては根元を水中で二寸位も切るだけでもよく、また炭火で根元を焼き或は根元を割つて薄荷油かビータ水揚液に一分間つけると一層よい。

筆 記 欄

木 瓜 (ほけ) 本勝手 一重立上生 (二重切)



紫陽花 (あぢさゐ)

紫陽花は虎耳草科に属し専ら觀賞用として庭園などに栽培せられる陰性の落葉灌木である。幹の高さ四五尺に達し通常叢生する。春日綠葉を出し七八月頃に梢頂に苔を生じ、多數集團して大なる球形をなして開花す。花の色は通例淡紫碧色であつて種々變色をなすも中には變色しないものもある。種類は七八種あるが普通のものは一團の花が全部同形をなして一時に開き随分大きいものであるが、山野に自生する萼あぢさゐ(たまあぢさゐ)とも云ふは花の集團遙かに細く、外圍にある少數の裝飾花のみ形大きくて、花瓣の如き萼をもつてゐる。

紫陽花は何れも丈が伸びず叢生して幹の弱々しいものであるから、華道では之を通用物と稱へ、木にも草にも通ずるものとして取扱はれてゐる。花の姿は行最も相應しきも材料の如何によつて眞にも草にも生け得るものである。總て一種生よきも場合により草花を之が根縮となすも差支はないものである。

紫陽花の自然として土際に今年生れた新莖には花をつけない、すべて去年以前の古幹より青莖を出し其れに花を見るものであるから、體の部分などに花を使ふ時は其の古幹を水際に見せることが肝要である。

花の姿は方めて瘦せないやうに力め、成るべく廣く平たく派手に取扱ふやうにし、花器も金屬製の堅い感じのするものを選び、土器・籠器・廣口などを選び用ふことが望ましい。而して紫陽の花は陰性花であり且つ花の色が變化するので祝儀の席には遠慮し、日常の客席にも餘り好まじからぬものである。

紫陽花 (あぢさゐ) 本勝手 行の花形 (籠)



柘榴 (ざくろ)

柘榴は柘榴科の落葉喬木で、高さ丈餘に達し幹に燃れがあつて頗る面白い曲を示し老樹に及ぶと下枝の垂れ下がる習性をもつてゐる。花には白・紅の二色があり單瓣と重瓣とあつて何れも梅雨頃に咲き出で、花後實を結び秋に至つて熟すれば裂けて紅肉をもつ種子を露出する。

生花材料としては五六月頃の花時をもつてする事になつてゐるが、總て若枝の伸び伸びとした素直な材料では、眞又は行の姿に生けることが普通であつて、老樹の面白い曲をもつてゐるものは、其の線の美を表はし柘榴の風情を見せるために、行若くは草の花形に取扱ふ場合が多い。

而して眞の花形では少ない材料を使ひ、若木の伸び／＼とした姿に生けるが、行の花形では若木や中老樹を生け合せ、花器の如何によつては相當太い幹を用ひ、どつしりとした姿に取扱ふことにする。總て此の材料は瘦せないやうに、そして稍派手に賑やかに生け、陽春の氣分の漂よふ様に整へる事が肝要である。

本圖は素直な若枝を使つて、月形花生に草の姿を生けたものであるが、立上生や二重生又は掛、釣などに於ては、相當老樹で面白い曲線をもつ材料を使つて生けることが相應しいものである。

柘榴は垂物でないから垂枝を用ひるの要はないが、老木などにあつては自然に垂れた材料を選び、中段以上の箇所一二の垂枝を使ふことは面白い。而して之は一種生最も相應しいが、都合により花色の調和よきものを根緒に配するも差支はない。

柘榴 (ざくろ) 木勝手 草の花形 (月形花生)



空木に燕子花 (うつぎにかきつばた)

空木は通常漫漶と稱へられ、虎耳草科に属する落葉灌木で、山野に自生するも庭園や籬などにも植ゑられる。幹は叢生して高さ五六尺に及び葉は長楕圓形をなして其の先端尖り邊緣に細鋸齒があり葉の表裏ともに甚だ糙澁である。短かい柄を有して枝に對生してゐる。花は白色で五六月頃花穂をなして開花する。花は五瓣で花後花柱のある小圓の實を結ぶ。

此の木は至つて軟弱な幹であるから、少しく長く伸びると垂れ下がるので、華道では之を通用物の垂物として取扱ふことになつてゐる。斯様に立ち上ることが出来ないものであるから、花の姿も下垂の狀を表はす草の花形に取扱ふのである。

それで掛花生や釣花生に使ふ場合は、主として一種生をなすが、場合により當季の草花を之が根締に使ふこともある。本圖の如く二重の上に生ける時は、上を空木のみの一種で整へることも出来、又は體座に他の草花を使ふことも差支はないのである。

下の窓は燕子花を以てしたのであるが、他の相應しい草花を配するもよい、本圖の如く燕子花を使ふ場合は、晩春初夏の季節による取扱をしなければならぬ。此の意味に於て開花を低く體に使ひ、蒼を高く見せ着き葉(冠り葉)を花よりも高く見せることにしたのである。

空木を生ける花器は何れにても差支はないが、餘り堅い感じのする金屬器よりも竹器や籠の類が相應しく、この花は垂物の系祝儀の席には用ひられないものである。

筆記欄

空木 (うつぎ・かきつばた) 逆勝手草の花形 (二重切)



萱草 (かんざう)

萱草は百合科の多年生草本で山林路傍に自生するも生花用として畑地にも栽培せられる。毎春地下莖より柔かい葉數枚を出し、夏に至つて葉間から莖を抽で花をつける。葉は細長い劍狀をなし垂れた姿を示すもので、花は橙黄色六瓣で紫黒の暈がある。花梗の頂に數個の荂をつけ交代に咲き替るのであるが、花の壽命は僅かに一日を保つのみである。

萱草の葉は數枚對生して株をなし一株より一莖を出すが、其の花莖は普通葉の和合の中より出ない、(或特種のものを中心より出る)總て萱草は新芽より花莖を生じない、必ず古芽より發生するのであるから、新芽と古芽との間に生じ一枚の古葉がそれを抱えてゐる。

萱草は大てい二株をもつて一瓶とするのであるから花莖も二本を用ひる、それで太い一株で眞副を整へ開花一本を使ひ、小さな一株で下段のあしひと體を整へ中段に荂一本を配するのが普通で、花の姿は行に屬するものである。

萱草は葉で姿を整へるものであるが、杜若などの如く葉を組み替へるのではない、自然の儘を用ひる事とし不完全な葉のみ數枚取りかへる程度に止める、また花莖も他の株のものと取りかへる事も差支はない。而して眞の花は新しい太い葉の前陽方に挿して和合はつれた箇所に見せ、其のうしろに抱え葉一枚を見せる、前の株は前葉で體先を整へ後葉を下段の陰方に働かせ、花莖は其の後に挿して抱え葉一枚を添へるのである。花器は水盤の類がよく壺形の土器や籠も適する。此の花は陰性の草本であるから祝儀の席に好まぬ。

筆記欄

萱草 (かんざう) 逆勝手 廣口生 (土器廣口)



海芋 (かいう)

海芋は天南星科の多年生草本で、池沼や湿地に成育し、毎春根球より新芽を發し、二尺以上にも及ぶ。葉は互に懐で抱き合ひ、其中より順次新葉を出す、總て出初めの葉は巻いてゐる、五六月頃に至ると高く花莖を抽でて花を開く、花の色は純白に近い、此の種をオランダカイウと稱へてゐる。

海芋の別種にカラーと稱へるものがある、之は普通の海芋より稍細形で葉も幾分細長くて其の先端が尖つてゐる、その葉に白の斑があり、花の色は黄色であるが、葉に斑點があつて白い花を開くものはシラボシカイウと稱へてゐる。本圖は普通の海芋であつて次の圖はカラーに屬するものである。

海芋は萱草と同様に葉の和合の中より花莖を出さない、初めに數枚の葉を生じて花莖を出し、同時に別に抱き合つた葉を生ずる、この點が普通の草木と相違する處であるから、生花に於ても其の自然に倣つて取扱ふことが肝要である。

海芋は普通置生の時は大小二株を用ひ花莖二本を以てするが、魚道生などでは二株または三株を使ひ一瓶を整へる事にする。總て水中に生育するものであるから、専ら廣口の花器を用ひ、一株又は魚道生をなし、場合によつては芦、蒲、太蘭の如き水草の根縮に使ふことも出来、水陸生の女株となす場合もある。(次頁つづく)

筆記欄

海

芋

(かいう)

逆勝手

廣口生

(土器廣口)



海芋は一株に花莖一本を配し普通大小二株で一瓶を整へ、葉数は奇数でさへあれば必ずしも何枚と限られては居ない、しかし相当太い海芋であれば七九枚位を程度とし、稍葉の小さいカララにあつては、九枚乃至十三枚ぐらゐるを使ふことが、相應しいのである。

而して眞・副・體の大體の恰好は葉をもつて整へ、アシライの葉はバラシやギボシ等に準じて取扱ひ、眞の前後を等分にし陰の葉を一枚多くする。海芋はすべて葉表を花莖の方へ向けて使ふが、此の取扱ひは大株小株何れも同様である、尤も大株では卷葉又は細長い形をした稍小形の葉を選んで、花莖の後に使ひ、葉先を陽方に働かせるやうにするのが最も都合よいやうである。

花は葉よりも高く抽でて開花するのが自然であるから、生花も之に倣ひ、必ず花を高く葉を低くし、開花を上段に莖を中段以下に見せることにする。

海芋とカララはよく類似するも幾分相違せる點があるので、次の如き考で取扱ふことが肝要である。

一。海芋は大形の葉で水揚げも困難であるから、成るべく葉と葉を近づけ水際も下けて低く整へることがよい。そして葉数を七九枚位に止める。

一。カララは總てが小さく水揚げもよいので、葉数も九枚より十三枚位を使ひ、水際も稍高くして傾を見せるに適するやう取扱ふ、それで葉も大小、開、中開、卷葉、水際の生葉など總てを取合せて巧みに整へる。

逆勝手 廣口生 (土器廣口)



燕子花 (かきつばた) (其一)

初夏の頃は春の盛り期も過ぎ葉数が少しく減じては来るが、しかし四季咲のものは續いて開花し、一期咲のものも後れたものが次ぎ／＼に花を見せるのであるから、花数も三五輪を使い、魚道生などにあつては七輪くらゐをもつてするが相應しいものである。

初夏より中夏にかけては日々氣温が高くなつて来るので、花莖の伸びも漸次著るしくなり、春の燕子花に比べて葉と花との差が少くなつて来るが、しかし未だ着き葉を花よりも高く見る季節であるから、其の自然に倣つて葉を高く取扱ふことにし、開花と蒼との高低は不規則となる頃であるから、高く低く花形を整へる上に於て都合よきやう用ふればよいのである。

而して此の季節に至ると幾分垂れを現はして来るのであるから、花形の上にも其の趣を見せる意味に於て、一二ヶ所に垂れ葉や躰き葉を使ふことが相應しい。夏より秋にかけては垂れを多く見るのであるが、華道では三ヶ所垂れを使つたものは三垂と云つて嫌ふのであるから、垂れは二ヶ所位に止め其他は躰き葉をもつてすることが適當である。

本圖の如く魚道生とする場合には、男株に五輪を使つて眞・副・體座を整へ、女株に二輪を用ひて體を生け、水際に出生葉三枚組を見せることにする。而して中春後の燕子花は總ての花形に生け得るのであるから、眞・行の姿は勿論・一重・二重の立上生・二重の上口・横掛・向ふ掛などにもよく、又廣口の花器へ魚道生・水陸生をなし、或は他の水草との交生など何れにも適するのである。

筆記欄

燕子花

(かきつばた)

(其一)

逆勝手

魚道生

(水ザレ砂鉢)



燕子花 (かきつばた) (其二) 横掛

横掛は小間床の柱、押板より三尺二寸乃至六寸迄の所に打たれた釘に、掛花生を用ひて生けるものである。従つて之を拜見するのは花の正面からでなく、床の中央より三尺離れた位置に座して、斜前より見ることになるので、其の場合に於て最もよく姿の整つたものたらしめなければならぬ、此點が他の花と趣を異にする譯である。

此の生方は草の花形であつて、眞を倒して床の向ふ隅へ振り、副を中心近づけて立たしめ、體を前に低く見せる、大體の姿や葉の整へ方は二重の上と同様であるが、二重切では眞を前隅に向けて振り出すのであるが、横掛は反對に向ふ隅に振る。而して體の花葉が床縁より前に差し出ないことに定められてあるから、割合に細く整へることが肝要である。

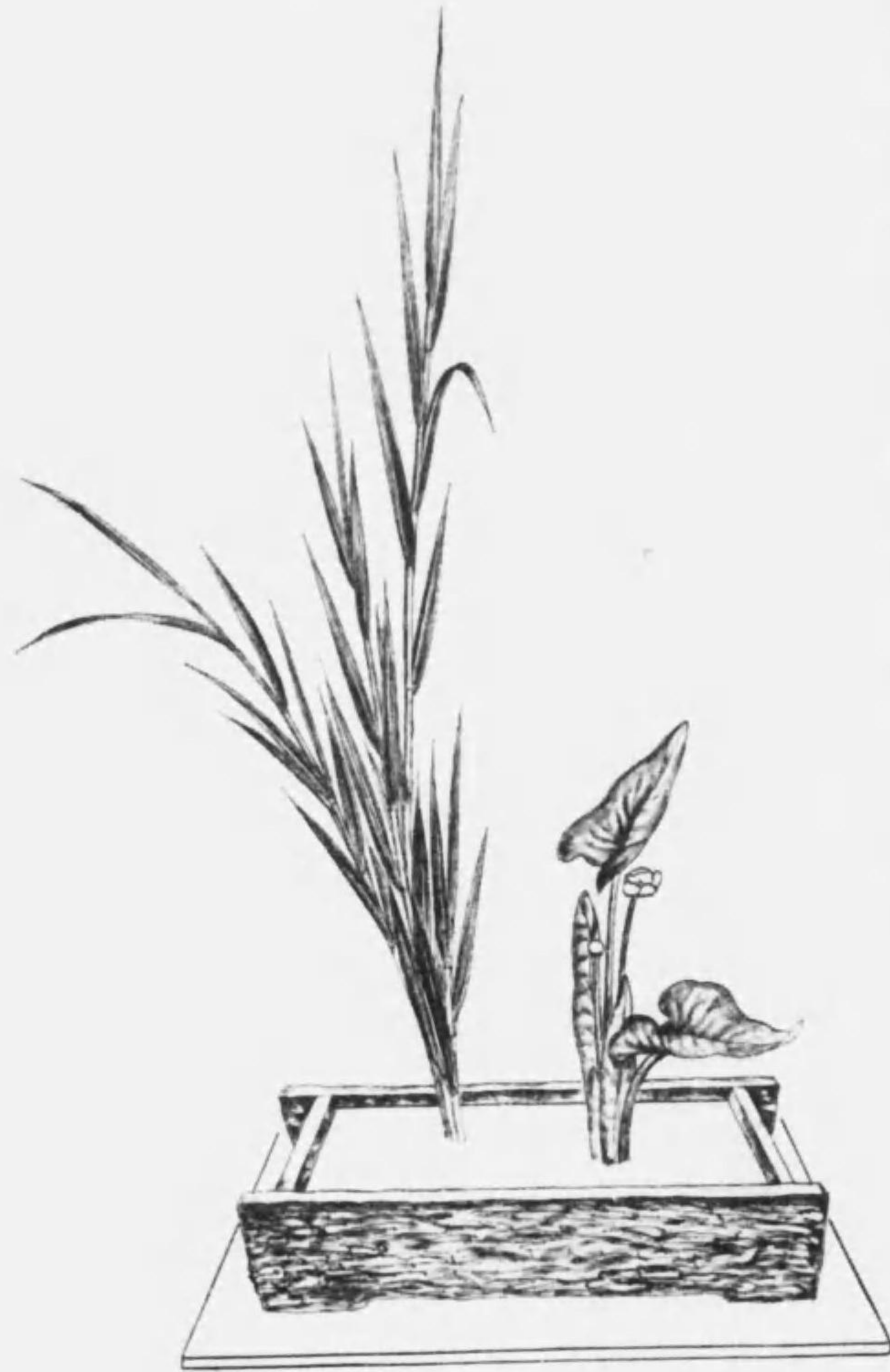
なほ斜下より見るのであるから、總ての場合、水際を低くなし、恰好を整へる時は、床の正面三尺の位置より見て、美しく姿をなして居るやうにせねばならぬ。

挿し方は普通の生方同様に、體に三枚組の出生葉を使い、體に屬する葉全部を挿して次に眞の葉や花を挿し、最後に副の部分を入れる事にするが、葉や花の高低及び蒼と花の配置などは、其の季節の生方によることは勿論である。しかし此の花形は概して花葉を少なくして、閑雅の趣を見せることが肝要である、なほ花器は小形の土器又は籠の類が相應しく、總て燕子花のみの一種生となすものである。

燕子花

(かきつばた) (其二) 横掛 本勝手 草の花形 (土器掛花生)





葦に河骨

(あし・かはほね)

本勝手

魚道生

(水ザレ砂鉢)

葦に河骨

(あし・かはほね) 魚道生

筆記欄

葦はヨシ、ハマオギ、ナニハグサ等稱へられ、禾本科の多生草本であつて池沼又は海邊などに自生するが、地下莖が地中を匍匐し、所々より地上に莖を抽出するので、時としては池邊の陸地に姿を見ることがある。しかし其れは水中のものが伸びたものであつて、絶対に陸地のみに生育するものではない。されば葦を水陸通用物と見ることは誤りであつて、之は絶対水草であることを知らねばならぬ。

毎春四月頃發芽し漸次暖氣に伴れ成長して高さ數尺に及び、多くの線狀披針形の葉をつける、八月頃に至れば頂に穂を出し、晩秋の頃には冬枯れの姿を示し、枯葉枯草など翌春新芽の出た後までも其儘に残つてゐる。

葦は四月頃の若葦に枯葦を高く使つて生け、又は晩秋の頃冬枯に近づいた物を使ふことも面白いが、葦の季節としては新葦が相當に伸びて眞副の姿を整へ得る六月頃である。本圖は其の季節をもつてしたのであらが、總て葦は當季の花ある水草を根柢に配する事に定められてゐるから、茲には河骨を之に合せて魚道生をなしたものである。元來葦は直幹なものであるけれども、其の葉は伸びるに伴つて、漸次垂れ下がるので華道では竹や芒同様に垂れ物とせられてゐる。それで一瓶中一二の垂れ葉を使ふことにするが、四五月頃の若葦は其の自然に倣ひ、垂れを見せなくてもよいのである。葦は水草であるから成るべく廣口物を使ひ水面を多く見る事が相應しい。

牽牛花 (あさがは) (其一) 出船生

牽牛花は蔓物で垂れ下がる性質のものであるから、置生にはなし難いので必ず釣船、向ふ掛・横掛の如きものに生けて、蔓を垂れしめるやうにするが、しかし置生でも二重の上などは生口が高い處にあるから、生けるのも差支はないのである。

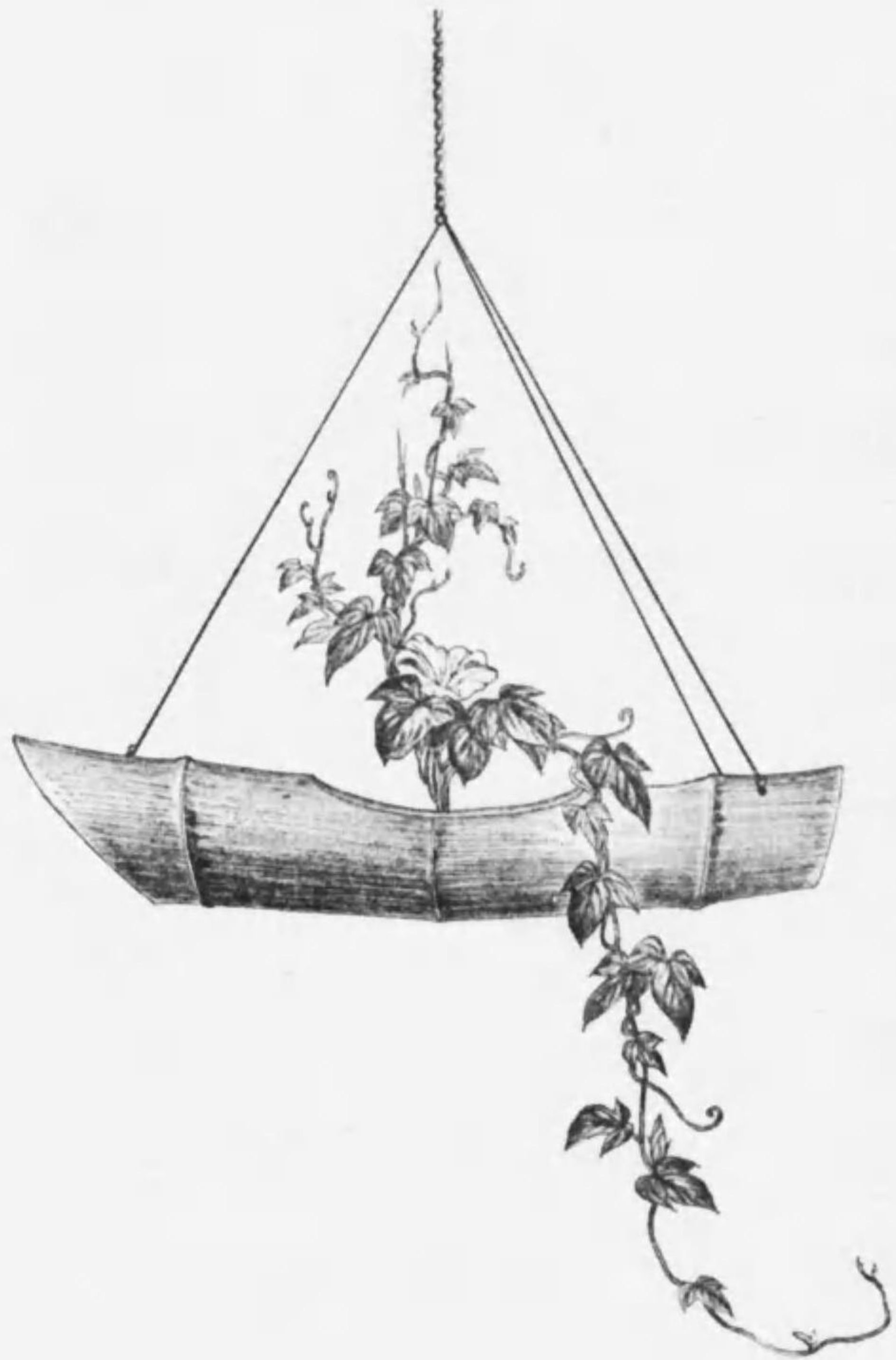
此の花は一莖の蔓に數個の蕾をつけ、次ぎ／＼に咲きかはるのであるが、我が家元の傳書には「開花一輪各一輪よし」と示されてある。しかし其れは本圖の如く傳花として取扱ふ場合のものであつて、普通の蔓物として牽牛花を生ける場合は、花數に限定はないものである。

牽牛花は獨でに立つことが出来ず、其の蔓は必ず他の物に絡まつて伸び上がる、それで之を生ける時には萩の枯枝や、竹の小枝などを支柱とし、之に絡ませることにするが、總て牽牛花の蔓は左巻になつて居るから、それに倣つて巻く事が大切である。而して支柱にこれを巻く場合下の方は少しく縮るやうになし、上方になるに従つて漸次緩やかならしめ、其の末端は支柱を離れて立つやうにすることも、蔓物の自然性を表はす一つである。

牽牛花は花莖ともに一輪を尊ぶ程であるから、本數も成るべく少なくし、二、三本を使つて軽く入れる考が大切である。而して之は前晩切り取つて支柱に絡ませ、瓶か桶に挿して屋外に置くか井中に吊し置き、翌朝に生けることにせねばならぬ。なほ開花の輪の中に冷水少々入れ置く時は花を勢よく保たしめ得るものである。

牽牛花

(あさがは) (其一) 釣船 出船生 (竹釣船)



牽牛花 (あさがほ) (其二) 二重生

牽牛花は根元の葉ほど大きく、花も元の方より漸次咲き上るのであるから、此の自然に倣ひ體に太い葉を使つて姿を整へ、開花も體に用ふことがよく、眞の先や副先及びあしらひ等には、何れも蔓先を見せ苔は夫れ等の部分に使ふことが相應しいのである。

此の意味に基づき傳花の生方では、開花を體に見せ、苔を眞(釣船の生方では、眞に相當する枝、即ち船形の蔓)の蔓に使ふことに定められてある、それで二重生などで一瓶に數輪を使ふ場合にも、常に此の心で取扱ふことが肝要である。

二重生の時、眞の蔓は前隅に垂れしめるのであるが、總て蔓物は花器に近づけて垂れを見せ、其の蔓先は必ず上方に向き直るやう、取扱ふことが自然味に叶つてよいのである。尚、下の窓は場合によつては、只水を張つて置くのみにても差支ないが、普通の場合上口の花と調和よい材料を選び用ふることになつてゐる、されば本圖では窓に燕子花を軽くあしらふ事にしたのである。

牽牛花は朝の間に開花し正午までには萎むことが個性であるから、池坊では之を朝の間の花と限り、之が自然に順應した取扱をなすことに定められてある。牽牛花は斯の如く壽命が一日限りのものであるから不吉のものともされるが、また朝夕に咲きかへ數ヶ月に亙る盛り久しい花として賞するものもある。されば牽牛花を祝儀の花ともされてゐるが、しかし蔓物で垂れ下がるもの故、改まつた祝席には遠慮すべきものであらう。

牽牛花に燕子花

(あさがほ・かきつばた)

(其二)

本勝手

草の花形

(二重切)



玉 簪 (たまのかんざし)

玉簪は銀寶珠の一種で、百合科の多年生草本である。専ら山野に自生するも觀賞用として庭園などにも多く栽培せられる。銀寶珠と玉簪は姿のよく似たものではあるが、其の自然に餘程相違した點があるので、生花として取扱ふ際は、判然たる區別を必要とする。即ち

銀寶珠は極めて横廣い卵形で濃い綠色をなして蠟質の白粉をつけてゐる、そして葉の先端が尖つてゐる。恰も擬寶珠の恰好をなしてゐる、而して此の花は總狀をなし、下方より咲き上るものである。此の一種に唐銀寶珠があるが、これは葉脈が甚だしく目立ち、花莖が極めて矮少である。

玉簪は稍長い卵形をなし、葉色は薄い緑であつて、花は初めの中は莖頭や小枝の先に一團をなし、恰も玉簪の如きである。

銀寶珠類は概して葉低くして花莖高く、葉は中筋より左右の廣さを異にするものが混生し、葉先が或一方に反つてゐるが、その反りには確然たる定まりはないのである。華道では美しい葉を賞して葉物とし、葉をもつて眞・副・體の姿を整へ、之に花莖二本を配することは紫苑と同様である。従つて花形は必ず行の置生とし、葉数は五、七、九位を選び、時としては十一枚も使ふが、それ以上は好まぬ。而して總て反りによつて整へ表裏の使ひ方は葉蘭や紫苑などと同様の考でよい、花は太い一本で眞を保たせ、小さい方は之があしらひとして取扱ひ、葉のみで眞・副・體の恰好をなすと同時に、花を併せてなほ一瓶の姿が整つてゐるやうになす事が肝要である。

筆記欄

玉 簪 (たまのかんざし) 逆勝手 行の花形 (土器壺)



河 骨 (かはほね)

河骨は萍蓬草又は骨蓬とも書き、睡蓮科に属する多年生水草で、水の浅い池沼を好んで生育する、毎春三月頃發芽して美しい葉を水面に見せ、五月頃より開花を始め七八月ごろに盛り期となる。總て花莖一本には一花を開き、色は黄色であるが變種には赭色をなした紅河骨と云ふものがある。

河骨は根莖より葉や花莖を出す、花莖は葉の和合の中よりは生じない。また花の季節にも次ぎ／＼と新葉が生れるので一株の中には常に開き葉・角葉(堅く巻いた葉)蕾、開花など何れも揃つてゐる。

生花では葉に重きをなして取扱ふのであるから、之を葉物とし花は従と見て一瓶の姿を整へるのである。而して水草であつて相当大葉のものであるから、廣口の花器に生ける事が最も相應しい、それで大い廣口に一株生をなし、又は男株女株に分けて魚道生となすか、或は他の水草との魚道生、陸物を併せた水陸生の女株などに取扱ふことになつてゐる。其他場合によつて水草の根縮として用ふる事もあるが、二重切や掛・釣などには生けない、しかし釣生も遠池の生方などには差支ないものである。

一種生の時は總て開き葉をもつて眞・副・體の恰好を整へ、中段に中間、水際に堅い卷葉などを使い總數を奇數になすが、河骨に限り水叩葉と云つて一枚又は二三枚の葉を半分も水中に沈めて用ふるやうにするものである。花は五六月では開花も低く用ふるが七八月頃の盛り期には、開花を高く眞、副に使い、堅い莖を下段の體などに使ふしかし何れも葉より低く、數は普通二輪とし、魚道生などでは五輪も使ふ。

河

骨

(かはほね) 本勝手 魚道生 (水ザレ砂鉢)



蓮 (はす)

蓮は宿根水草で年々地下茎は新根を伸ばし、其の節々より葉や花莖を生じて水面高く抽出する。其の初めに生ずるものは小形圓形のものであつて、之は第一の節を生じ僅かに水面に達するだけのもので、日時を経るも高く伸び上がるやうな事はない、さればこの葉を浮葉と稱へられてゐる。

第三節より後のものは何れの節よりも葉と花莖とを生じ水面を離れて相當の高さに達するが、何れも幼芽は堅く巻いて居り、水面を離るゝにつれて漸次に開くものであるから、其の開く程度によつて卷葉・撞木葉・開葉と稱へられる。而して華道では蓮を浮葉・卷葉・撞木葉・開葉、朽葉の五つに區別して取扱ふことになつてゐる。蓮の花は早朝音を立て、開花し、午後に至つて一たん閉ぢ翌朝再び開花する、其の様は睡蓮同様であつて、斯く繰返すこと三回に及び、三日目の午後に至つて花瓣散り果を残す、此の果を華道では蓮肉と稱へる。

蓮は傳花で之が取扱には定まつた規定があり、夫れも理由あるも其詳細は略すが、要は眞に開葉、中段に撞木葉、下段に卷葉を用ひ、副・體は眞同様に開葉を以てし、眞の後下段に朽葉を使用することになつてゐる。而して本圖の如く廣口の花器に生ける場合には浮葉一枚を用ふ。花は蒼を上段より中段までに使ひ、開花は下段、蓮肉は陽方に赴くやうに用ひる。蓮は佛縁深いものとして過去、現在、未來の三世の姿を一瓶中に整へ、悟りの因として居る。蓮は水揚も困難であるから特に研究を必要とする。

蓮 (はす) 逆勝手 廣口生の花形 (土器廣口)





女郎花に河原撫子

(をみなへし・かはらなでしこ)

逆勝手

行の花形

(土器壺)

女郎花に河原撫子 (をみなへし・かはらなでしこ)

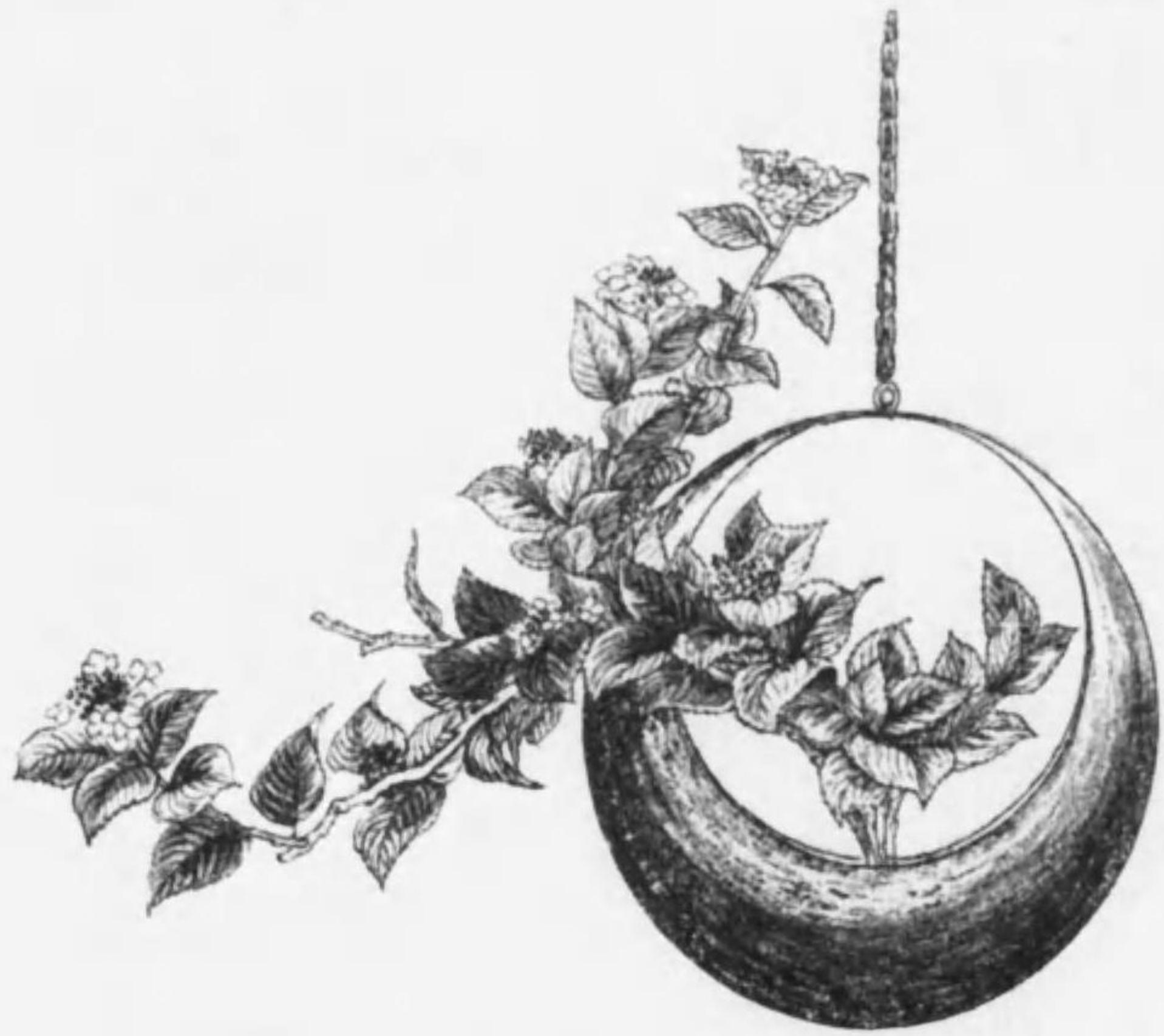
女郎花は直ぐ出生のものであるから、眞又は行の置生になし、普通一種生をなすが之に他物の根絡を配することも差支はない、また場合により他の秋草と交生にする事も風情あつてよいものである。

而して一種生の時は他の草物よりも幾分水際を高くする事が、女郎花としての個性が表はれてよいものである。之に他物の根絡を使ふ場合、最も相應しいものは、桔梗・河原撫子・野菊などであり、交生には桔梗が一番調和よいが、刈萱や薄などを使ふことも面白いものである、桔梗や刈萱は女郎花よりも低く見せるやうにするが、薄は女郎花よりも高く使ふことにせねばならぬ。

北海道などでは女郎花は紫苑の葉に似た、相當大きな土葉を生ずるのであるから、斯かる地方にあつては其の自然に倣つて、之を花形の中に取り入れる事が必要であるが、他の地では小さいものがあるけれども、それ等は殆んど使用し得ないもの計りである。

女郎花は優しさと淋し味を風情とするもの故、花器としては籠が最も相應しい、それに次ぐものは土器や竹籠などである、尤も金属器も使つて差支は無いが、何となく堅い感じがして、しつくりと調和しないので餘り好まぬ。此の花は祝席には適しないが、其他一般席には生けてよく、七夕や名月の夜の花としては最も相應しい。

女郎花は日中に切ると萎れ易いから、必ず早朝か夕刻かに切ることにはせねばならぬ。



紫陽花 (あぢさゐ) 釣生 本勝手 (月形花生)

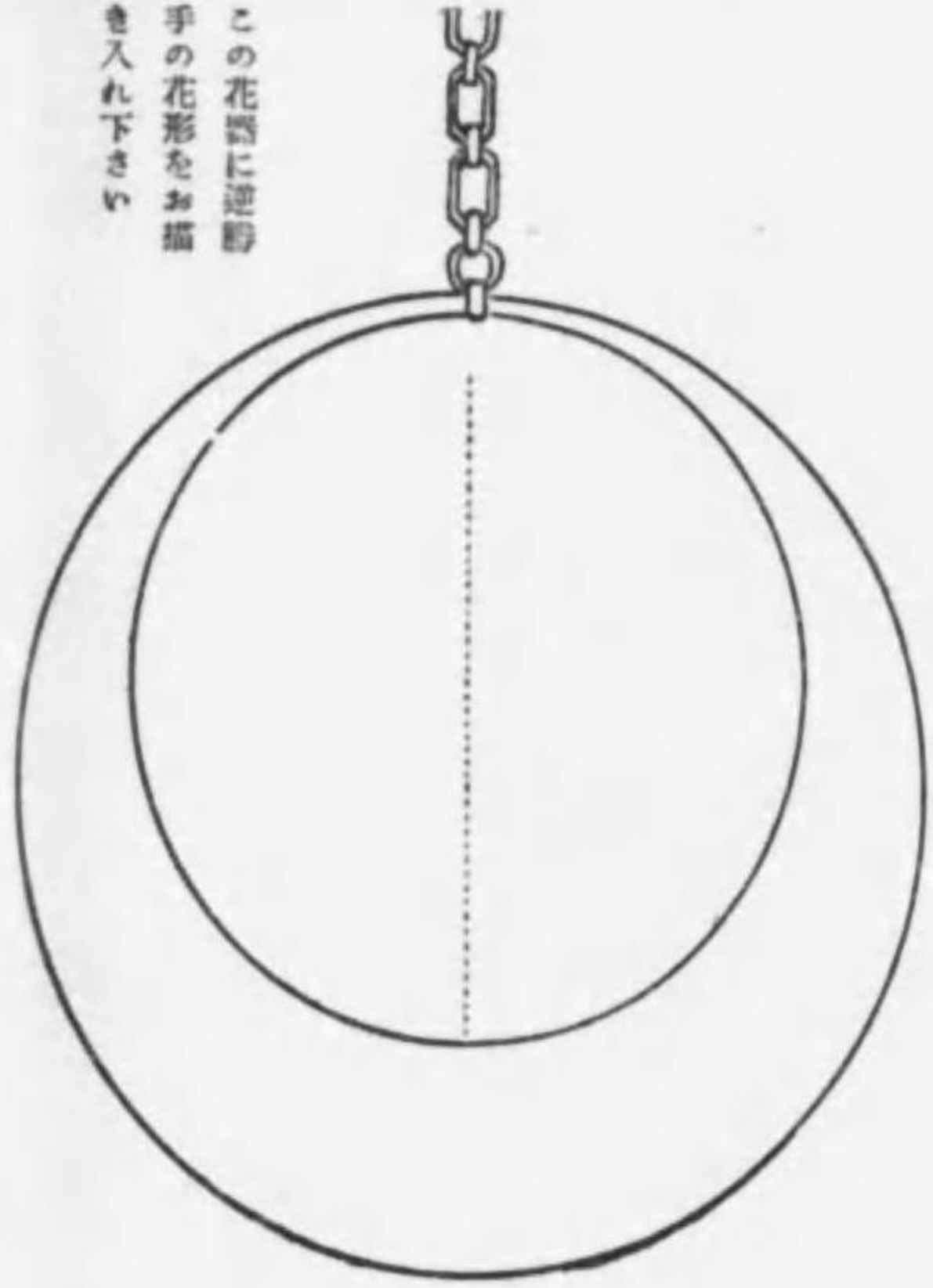
紫陽花 (あぢさゐ)

紫陽花は落葉灌木で、七八月頃梢頭に多数の花集團して開く、始めは淡紫碧色なるも日を経るに従つて、種々花色を變ずるので、俗に七變化など呼んでゐる。

年々枝頭に新幹を伸ばし、花葉とも相當繁茂するが、總てが優しく弱々しいものであるから、華道では草木通用物として取扱ふことにする。

花の姿は眞・行・草何れにも生けられ、多く一種生とするも、場合によつては草花を之が根締に使ふことも差支はない。本圖は之が一種を月形花生に用ひたものであるが、體先などの新幹には花を見せないことが相應しい。

この花器に逆の手の花形をお描き入れ下さい



牽牛花 (あさがほ)

牽牛花(朝顔)は旋花科の一年生草本で、莖は纏繞性の蔓物である、花の色は白と紅が原色であるが、今では幾色となく變化してゐる、此の花は一朝で凋むもので至つて短命のやうであるが、しかし初夏より中秋までも咲き續く盛りの久しい花である。

生花では牽牛花を蔓物の垂れ物として取扱ふことになつてゐる、それで總て置生にせず掛花生や釣花生に限られてゐるが、二重の上など高い箇所には生けてよい事になつてゐる。此の意味に於て本圖の如き丈の高い花器、即ち尺八などには取扱ふことが出来る。

元來牽牛花は華道では相當重きをなし、之を傳花として特別の取扱をなすのであるが、其の場合には古實(生花大全に掲載)によつて、開花一輪苔一輪と限定されてある。しかし傳花の生方でなく普通の花として取扱ふ時は、他の蔓物垂物の扱ひ方に準じて行ふのであるから、花の數には制限はないから、奇數にさへなればよいのである。

牽牛花は獨りで立ち上ることが出来ないで、竹の枝や萩の枯枝などを支柱とし、それに纏はせて立たせる、而して眞は成るべく花器に近づけて垂らし、其の蔓先を上へ向きなほるやうに取扱ふ、花は自然に倣つて根元の方の莖に開花を見せ、苔は蔓先の方に使ふことがよいのである。

この花は前晩にとつて支柱に左巻にからませ、大體の恰好を作つて翌朝生けるときは、花葉の向きがなほつて居るから姿を整へよいものである。牽牛花は蔓物で垂れ下がるので一般祝席には用ひないがよい。

筆記欄

牽牛花 (あさがほ) 逆勝手 草の花形 (竹尺八)



薄に桔梗 (すすき・ききやう)

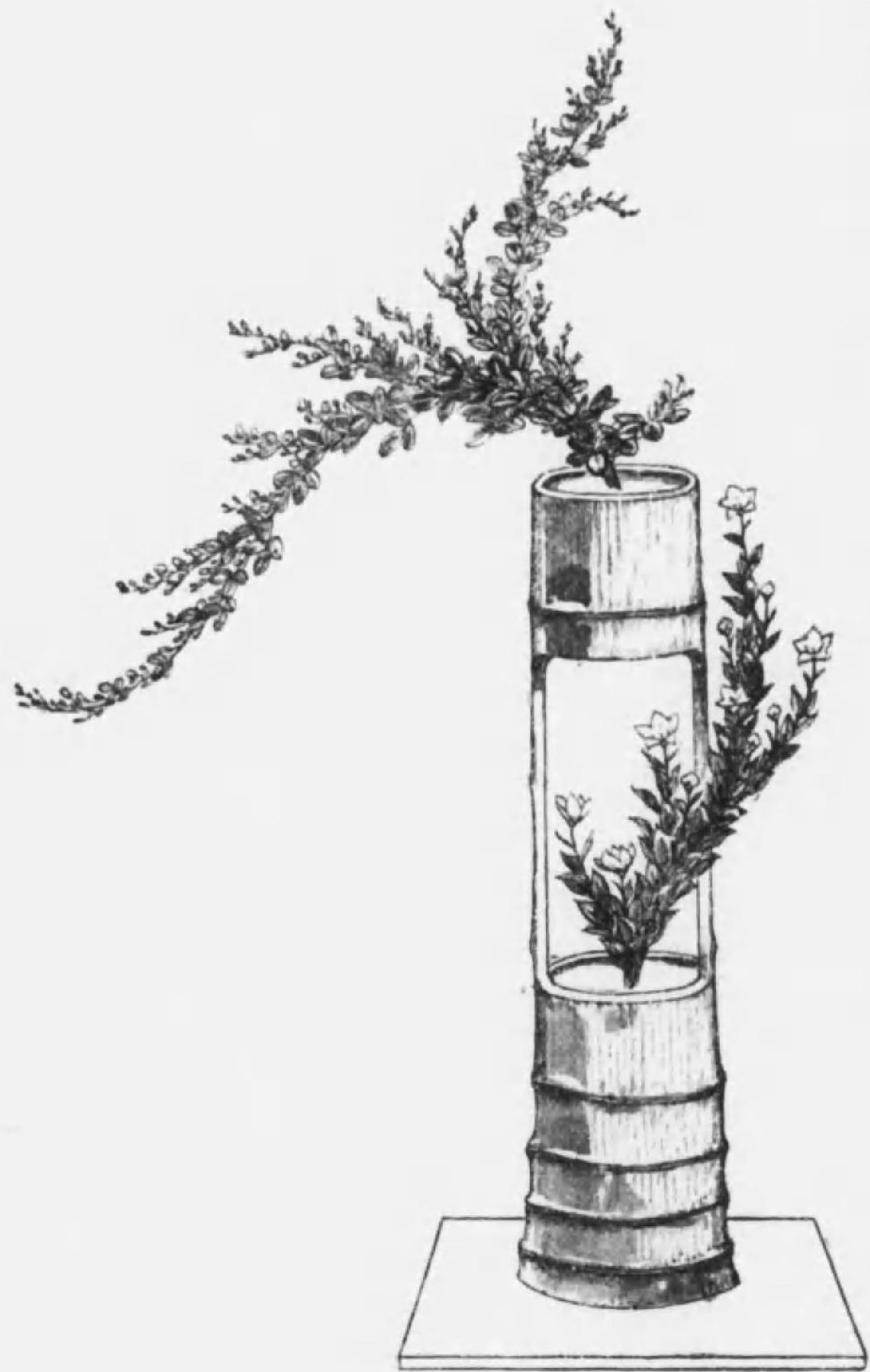
秋草の中でも薄、桔梗は殊に秋らしい気分を漂はしめるものであつて、更に此の兩者の交生は、秋草の美しさを感じさせると同時に、何處となく淋し味を想はせるに足る面白い取扱方である。

而して薄と桔梗とは其の個性より見て、高く育つ薄を後に高く使ひ、低く育つ桔梗を前になすことは申す迄もない。それで交生の場合も其の生口は薄の真副に桔梗を根縮に使ふのと同様に取扱ふのであるが、其の枝先は種々變化ある姿に整へることが出来るのである。本圖の如き生方では、薄をもつて真と副との姿を作り、體の部は僅かに體座とも見るべく、軽く整へるのであるが、薄は垂れものであるから、下段には見せない事にする。而して桔梗は桔梗のみを以て稍整つた真・副・體の姿を生けるのであるが、此の場合真と副を割合に軽くし、體に十分の働きを見せるやうにする、斯くして挿し上げた花は、薄の弱い部分を桔梗で補ひ、桔梗の足らざる箇所には薄が強く働き、兩者によつて完備せる一瓶を形造ることになるものである。

尤も此の交生は體の桔梗を高く上らせて使ひ、變化ある花態を構成する一つの方法であるから、必ずしも桔梗を真・副・體の各部に使用せねばならぬ事は無いが、しかし薄は薄のみにて、桔梗は桔梗のみにて、不完全ながら真・副・體の姿を保つてゐるやう取扱ふことは必要である。尙此の生花は至つて優し味のあるものであるから、花器は成るべく柔かみあるものが相應しく、それには籠を第一とし、籠に次ぐものは土器などである。

芒に桔梗(すすき・ききやう) 交生 逆勝手 (籠)





萩に桔梗 (はぎ・ききやう)

二重生

本勝手

(二重切)

萩に桔梗 (はぎ・ききやう)

萩は薔科に属する多年生の灌木で山野に自生するも、其の姿風情に富み花葉ともに美しいものであるから、専ら觀賞用として庭園などに栽培せられる。此の木は冬季になると落葉し枯木の如き趣を示すが、陽春四月頃に至ると新芽を出すものであつて、年数を経れば可なり大きくなるも、幹の太さ指大以上のものは餘り無いのである。高さは四五尺に達するも總て叢生して多くの枝を出す。初秋の頃白色又は紅紫色の花を開き花後實を結ぶ。

萩は秋の七草の一つに算られ、生花としても多く用ひられるが、幹が至つて優しくは直立することが出来ない、それで之を草木通用物と見、垂れ物として取扱はれるのである、されば花形はすべて草とし、二重の上、掛、釣などに懸崖の姿に生けることにする。

萩の個性としては枝先になる程多くの花を見せ、根元の方は殆んど葉のみであるから、生花も之に倣つて萩を眞や副に使ひ、體に小菊・日々草・河原撫子の如き草花を配すやうな取扱もなすが、しかし萩の風情を十分に見せるには一種生の方が適する。尤も、此の場合は體に成るべく花を少くするやうにせねばならぬ。

本圖は上を萩の一種生とし、下の窓に桔梗を使つたのであるが、總て萩に相應しいものは桔梗・小菊・燕子花などである、而して此の二重生の場合は、窓に木物を使ふことも差支はないが、成るべく草物とすることが望ましい、なほ萩は水揚困難なものであるから、其の點に注意が肝要である。

燕子花 (かきつばた)

本圖は初秋の燕子花を一重立上生に取扱つたものであるが、すべて燕子花は秋の季節になると、花莖に歪みを見せたものが多く出来るので、此の自然味と曲を利用して、二重の上に懸崖の姿を生け、その他掛花生や釣花生に草の花形を生ける事が相應しいのである。尤も此の季にても真や行の姿に取扱ふことは素より差支はないのである。

初秋も初め頃は餘り多く花を見せないものであるが、九月の末頃になると四季咲きのものが秋の盛り期となるので、稍花数を増して来る。しかし春や夏の盛り期に比しては餘程少い、それで生花では一瓶に三輪か五輪位を使ふことを普通とする。

花莖は一年中で一番高く伸びる時であるから、初秋や中秋の生花は花形の如何を問はず、總て花を高く真などには花首の伸びたものを用ふことにするが、此の季にも着き葉は花莖の上部までであるも餘り長くは伸びないものである。

本圖は初秋の終り頃の材料を使い、出来るだけ緩やかに整へるやう力め、垂れ葉を眞の後と副の二ヶ所に見せたのであるが、他の花形では體などに垂れを見せることもよいのである。また材料の都合では此の季より葉先の枯れ初めたものや、虫喰の葉など見せるも風情を表すことになるのである。花の数は秋の盛り期として五輪を用ひたが、この頃よりは次第に花莖の伸びが悪くなるのであるから、其れを意味して開花を高く、莖を低く用ふることにしたのである。

燕子花 (かきつばた) 一重立上生 本勝手 (二重切)



蒲に燕子花 (がま・かきつばた)

蒲は香蒲科に属し池澤に自生する多年生草本で、毎春根莖より芽を生じ、莖の如き恰好の葉を多く出し、一株の中より一本の花軸を抽んで、其の莖頭に雄花、雌花をつける、而して其の上方にある雄花は早く散つて、茶褐色の圓筒形の雌花(俗に狐の蠟燭)は次第に發育して遂には芒の穂の如く風に散亂する、葉はすべて二三右燃れになつてゐる花よりも高く伸びる。蒲には小蒲や姫蒲、葉に縞のある斑入蒲と云ふ種類もある。

蒲は水草の垂物として取扱はれ、花の姿は行草の置生に限るものとされて居る、それで一株に生けるもの、他の水草と交生にするもの、魚道生にするもの、以上の取扱方をなすが、此の花は美しいもので無いから、必らず他の水草を之が根締に用ひるところになつてゐる、而して蒲に相應しいものは燕子花、河骨、海芋、澤瀉などである。

蒲は大てい三本以上九本位を使つて生けるが、すべて低い部分のあしらひには、穂の出でゐない若蒲を生け合せることも風情あつてよいものである。

本圖は蒲と燕子花との交生であるが、素より蒲は四五尺より七八尺に及ぶ大きいものであるから、之を後に眞、副に使ひ、その前に燕子花を眞、副の姿に整へて、之れを合せ用ひたのであるが、蒲は垂物であるから其の意味を見せるために、必ず花形中に幾枚かの垂れた葉を見せることにせねばならぬが、それは大てい眞や副の前後に使ふことが普通である。

蒲に燕子花 (がま・かきつばた) 逆勝手 交生 (土器廣口)



燕子花に河骨 (かきつばた・かはほね)

本圖は八月の終より九月の初めを季とする燕子花と、河骨との魚道生であるが、此の季節は餘り花数を多く見せない頃であるから、普通の置生では二三輪位に止めることが多い。しかし魚道生などにあつては相當花数を使つて、賑やかに取扱ふことが相應しいので茲には五輪を以てする事にしたのである。

花莖は次第に伸びて高く開花を見せることになるが、苔は發育中のものとして開花よりも低くすることがよいのである。また出来るだけ花を緩やかに取扱ひ、垂れ葉や障き葉を二三見せることにせねばならぬ。

魚道生は燕子花をもつて男株とし眞・副の姿を整へ、其の水際に出生葉三枚組の葉を見せる事とし、女株には河骨をもつたのであるが、之は葉五枚花二本を使ふことにした、而して此の生方に於ては男株は男株のみにて眞・副の恰好を整へることにするが、體の部分は僅かに出生葉位に止め、之を體座と見る程度に取扱ふ事にし、女株は女株のみにて不完全ながら眞・副の體の揃つた、一つの花形を構成するやうにせねばならぬ。

尙花器は本圖の如き金屬器を使ふも差支はないが、すべて水草を生ける場合は水ザレ板の廣口などが調和よいものである。

燕子花に河骨 (かきつばた・かはほね) 逆勝手 魚道生 (砂鉢)



紫苑 (しおん)

紫苑は専ら觀賞用として栽培せられる多年生草本で、春日地下莖より葉を生じ莖を抽んで、初秋の頃に至つて莖頭より出でたる小枝に菊花狀の薄紫色の小花を多數につける。此の花は地下莖より年々葉や莖を生ずるのではあるが、年々出代るにつれて相當大葉となり、花莖は和合の中より出でず、全然別の節より出生するものである。紫苑は花を賞すると共に葉を尙ひ、殊に生花にては之を葉物として取扱ふことになつてゐる。葉数は五、七、九、十一などの奇數をもつてし、葉先の振れ方によつて巧く姿を整へるのであるから、相當手練を要するものである。

而して之が葉の使ひ方は、葉蘭などに準ずればよいが、紫苑の眞は花であるから、眞の位置に使はれし葉は、葉蘭の如くに高くせず、副や體に對する割合より低く、且つ稍軽く取扱ふことが大切である。そして此の葉は大てい花の前に使ふも、場合によつては眞の花の後に用ふるも差支はない。

紫苑の生方では總て一瓶に花二本と云ふ事に定められてあり、何れも眞に屬する部分に用ふることは銀寶珠同様である。而して其の中太い一本は中心上に立たせ、短い方は花の隅方に立たせ、恰も眞のあしらひとも云ふべき恰好に整へるのであるが、此の二本の間に太い葉を挟むことは宜しくない。

紫苑は必ず一種生とし、すべて行の置生に限られて居るのであるから、之を他物と生け合せたり、掛や釣などに用ひてはならぬ。なほ紫花でありシの音がつくので、一切の祝席には遠慮すべきである。

筆記欄

紫苑 (しおん)

本勝手

行草の花形

(籠)



木 槿 (もくげ)

木槿は葵科に属する落葉小灌木で、觀賞用として庭園に栽培せられたりまたは籬に植ゑられる。幹の高さ丈餘に達し、葉は楔狀卵形をなし三裂片をなしたものが多く、毎年四月頃新芽を出す。花は六月頃より咲き始め、色に淡紫色・淡紅色・白色の別があり、單瓣と重瓣がある。何れも一ヶ所に數個の萼をつけ、それが次ぎ／＼に咲きはるものである。

生花としては眞・行・草ともに生け得るのであるが、この材料は行の花形が最も相應しいのであるから、多くこの姿に取扱ふことになつてゐる。しかし眞や行の花形に生ける場合は餘り大きくない材料を用ひ、砂鉢などの花形に於ては太幹を使つて賑やかに生けることがよいのである。

木槿は其の個性を表はす上に於て一種生を最もよいとするが、之に他物の根縮を使ふことも差支なく、場合によつては木槿を他の木物の根縮とすることも出来るが、其の時には眞副を相當太い木で整へることが肝要である。

木槿は小灌木ではあるが、可なり幹が大きくなり、高さも一丈餘に及び、相當しつかりとしたものであるから、之を生くる花器は金屬器其他土器・竹器・籐の類いづれを使ふも調和よいものである。

木槿は一般祝席の花としては用ひない事になつてゐるが、其の姿より佛事には相應しいものとされてゐる。

筆 記 欄

木 槿 (もくげ) 本勝手 行の花形 (土器壺)





松に射干 (まつ・ひあふぎ) 本勝手 行の花形 (土器壺)

中年松や老松は之に雄大味をもたせる事が肝要であるから、此の意味に於て木数を一本か二本位に止め、力めて繁雜をさけるやうにする。それで本圖の如く一本の幹で眞副の整つたものであれば誠に結構であるが、適當な材料の無い場合には、眞を一本副を一本として都合二本で整へることにするが、其の時は同種の松で樹齡もほぼ同じ位のものを選び、之が一本に見えるやう取扱ふことが望ましいのである。併し黒松と赤松、又は老松と若松など取り合せて使ふことも差支はないが、其の場合は二本が全然別個のものであるやう、そして各が一つの花態をなしてゐて、而も全體の調和均衡などよく調節のとれた姿のものとしなければならぬ。

松は花の無いものであるから、必ず季節の花物をこれが根締に配しなければならぬ。而し之が根締には牡丹や櫻など特種のもを除く他のものは何でも使用が出来ないのであるが、其の中で最も相應しいのは菊である、これならば品位から見ても姿の調和上よりも誠に申し分はないのである、而して其のものでは白玉椿・節分後の水仙、百合・長春・躑躅の如きものが適するのであるが、本圖の如く射干なども用ひて差支ないものである。

本圖の松は中年松よりも老松と云ふべきものであるから、斯かる材料は枝先に葉が叢生して團をなし、それが段々をなす老松のもつ習性や其の風情を表はすやうに取扱はなければならぬ、而して之が今一段と老樹に及べば、幾箇所かに枯枝を見せるのも風情を表はす一法であるのである。

松に射干 (まつ・ひあふぎ)

筆記欄

大輪菊 (たいりんぎく)

菊は四季を通じてあるもので、生花としては春菊、夏菊、秋菊、寒菊、その他江戸菊、野菊など何れも用ふことが出来、夏菊や秋菊は大輪、中輪、小輪に區別して之が取扱をなすのである。

花の姿は眞・行・草何れにも適するが、主として大輪や中輪の菊は眞又は行の花形に生け、小菊は行や草に取扱ふことが普通である、しかし大中輪のものでも野生的な材料で、自然に垂れた姿のものは、掛や釣に草の花形を生けることも出来るのである。

本数は五七本より数十本も使ふことが出来るが、すべて奇數を選ぶことが肝要である。花の数は大中輪にあつては奇數とすることになつてゐるけれども、十七輪以上の多數に及び一見して數を知り得ない時などは、必ずしも奇數でなくてもよいのである。而して小菊は花の圓を奇數に整へるのであるが、それも十五段以上に及ぶ場合は、強ひて奇數たらしめずとも差支はないのである。

菊のみを以て二重生をなす時に限り一瓶三色まで用ひてよいが、普通の生方では一色又は二色をもつてする。而して二色の時は輪の大きいものを眞・副に使ひ、小輪のものを體とするが、色の順位は白・黄・赤・青・紫であり、其他の色や斑入などは其の下位と知らねばならぬ。

水際は大中輪にあつては相當高く見せ、小菊の類は低くすることが、自然に叶つてよいが、何れの場合にも水際には特に立派な葉を使つて美しく整へることが大切である、其の他の箇所も菊は花に注意を拂ふ以上に、葉を巧みに取扱ふことを忘れてはならぬ。

筆記欄

大輪菊 (たいりんぎく) 逆勝手 行の花形 (籠)





垂檜にルピナス

(たれひば・ルピナス)

本勝手

行の花形

(土器壺)

垂檜にルピナス (たれひば・ルピナス)

垂檜は糸檜とも稱へ松杉科に屬する常綠木本で、山野に自生するものであるが、其の姿を愛賞して専ら庭園などに栽培せられる。幹は相當高木の樹皮は檜に似て杉よりも稍赤味を帯びてゐる。葉は小鱗片をなしてゐて、其の先端は長く垂下して風韻に富む。

此の木は常綠樹であるから、何時にても生花材料として使用が出来るのであるが、之は花なき種類に見て、必ず冬季の花物を之が根締に配することになつてゐる。而して之が根締としては木物でも草物でも差支はないのであるが、概して優美な趣をもつてゐるものであるから、餘り強い木物の根締は調和を缺く恐れがあるから、白の小菊や本圖の如き黄色のルピナス(昇り藤ともいふ)など草物を使ふことが無難である。しかし木の花でも白玉椿の如きは非常に調和がよくて、花がすつと引き立つて見えるものである。

花の姿は材料の如何によつて眞・行・草ともに取扱はれるのであるが、大體が直ぐに育つものであるから、眞や行の置生となすに最も相應しいものである。而して何れの場合にも小枝のみを使つて生けることは面白くないから、相當の幹を用ひて生けることが風情あつてよいものである。それで木數を多く使はず眞副を二本位にて整へることが相應しい。

また相當太い木を使つて、廣口の花器に大きく花形を生け、石を配して燕子花を女株となした水陸生などは、夏季の花としては頗るふさはしいものである。花器は何れにても差支はない。此の花は改まつた祝席や新築移轉などの席には用ひない。

唐菖蒲 (とうしやうぶ)

グラジオオラスは其の姿が菖蒲に似てゐるので唐菖蒲の稱がある。しかし其の個性や出生に於ては兩者は全く異なるものであるから、生花にあつても同一取扱はなさない事になつてゐる。而して此の花は相當以前より我が國にも栽培せられてゐるが、それは近年に輸入せられたものに比べると、花蕾至つて小さく色彩も數種に限られてゐる。

現今に於ては全國到處の花屋に見受け、花の色も實に多種多様である。従つて之を生花にも盛花にも多く使用されてゐるが、大體の出生は射干に類してゐるものである、それで體の前の葉は着葉の如くに花莖の前後に用ひ之により一瓶の水際を整へるやうに取扱ふことが相應しい。

一瓶に使ふ材料は普通五本乃至七本位をもつてすることが普通であつて、九本も使つて差支はないが、餘り花が多過ぎるやうな感じがして、爲めに花形の見劣りのするものである。花の姿は行の生方を適當とする、而して之は一種生をよいとすることも、必ずしも一種生に限られたものではないから、場合により體に日々草の如きものを使ふことも面白い、殊に體に適當な材料を得難い時などには、調和よい草花を之に配する時は、却つて無理がなくて見よいものである。

唐菖蒲の生方には特別に心得べき事柄などはないから、花の位置や葉の配り方など巧く整ふやう工夫して挿せばよく、體先や副先など距き氣味の葉をもつてすることなど、風情を添へてよいものである。花器は堅き感じのするものを選べることが望ましい。

筆記欄

唐菖蒲 (とうしやうぶ) 本勝手 行の花形 (土器壺)





葛に桔梗

(くす・ききやう)

木勝手

草の花形

(二重切)

葛に桔梗

(くす・ききやう)

筆記欄

葛は山野に自生する纏繞性の多年生草本で、長さ二三丈にも達する莖を有し、葉は三つの小葉に岐れてゐる。秋紅葉腋に五六寸位の穂を出し、蛾形花を綴り色は紫赤色である。花後莢を結ぶ、この根よりは葛粉を製する。

葛は至つて繁茂するものであつて、雑草中に生ひ繁つた様は餘り美しいとも、雅趣に富めるものとも思はれないが、しかし葛には亦特種の趣をもつものであるから、取扱方によつては亦云ひ難い風韻の存するものである。

葛は蔓物であるから普通の置生にはなし難い、それで七種生の場合の他はすべて草の花形として、二重の上や横掛・向ふ掛・釣生などに取扱はれ、立ち上る蔓は朝顔と同様に萩の枯枝や竹の小枝などに纏はせることにする、而して他の支柱に巻く時は其の自然に倣つて左巻となすことが肝要である。

總て枝先には蔓を見せることにし、必ず蔓先を上方に向はせるやうにするが、體先は蔓のみをもつてせず、水際よりの太い葉を巧みに使ひ、之を十分に働かせて姿を整へるやうにせねばならぬ。而して葛は大抵一種生となすが、場合によつては野菊やその他秋の小草を配して根締にするも差支はないのである。

本圖は副や副座に相當する枝など萩の枯枝を使つて之を支へしめる事とし、眞の蔓は蔓と蔓とを纏ひあはせて姿を整へることにしたものである。そして下の窓に白花の桔梗を使ひ、上下の調和をはかることにした。花器は竹器・土器・木製器などが適し、専ら連花會合又は普通席に生けるのである。

芒に女郎花 (すすきをみなへし)

芒は山野に自生する禾本科の多年生草本であつて、毎春宿根より莖葉を生じて高さ四五尺にも及び、秋に至つて長き穂を出す、此の期に至つて専ら尾花と稱せられる。花は黄褐色を呈し美しいものではないが、一種の風情を有し捨て難い挿花材料である。生花としては花なき頃より尾花の時期まで、何れも使用することになつて居る。

女郎花も山野に自生する多年生宿根草本で、莖の高さ三四尺を普通とする、初秋の頃黄色の花を梢頭に繖房状に綴り相當美觀を呈す。生花としては主として一種生をなすが場合によつては他の草花と挿し合せることがある。女郎花に相應しいものは桔梗・河原撫子・野菊などであるが、芒や刈草などとの交ぜ生など頗る風情あつてよいものである。

本圖は芒と女郎花の交生であるが、此の場合には必ず兩者の個性に鑑みて、芒を高く女郎花を低く用ふことにせねばならぬ、之れが芒でなくて刈草である時は、女郎花を高く使ふことが自然である。此の交生では女郎花を水際にかたまりとして挿し、その後には芒を挿すのであるが、女郎花は女郎花のみで眞・副・體の姿を整へ、その後に使ふ芒も亦芒のみで不完全ながらも眞・副・體の恰好をなして居るやうにせねばならぬ。尤も此の生方は二種を併せ見て完全な姿となつてゐることが肝要であるから、本圖の如き場合眞や副の部分は、女郎花を軽く使ひ、それを世で補へるが如き取扱をなし、體は全體に調和するやう相當しつかりと女郎花で整へるものである。

筆記欄

芒に女郎花 (すすきをみなへし) 逆勝手 交生 (籠)



桔梗に撫子 (ききやう・なでしこ)

桔梗は桔梗科の多年生草本で山野に自生する、觀賞用として園圃にも多く栽培せられる、莖は高さ三四尺にも達し初秋の頃鐘形五裂の美花をつける。花の色は藍紫色、即ち桔梗色を原色とし其他に、深藍・淺藍・帶黄色・純白などがあり、單瓣・重瓣・八重咲など様々ある。

桔梗は眞又は行の花形に適するものであつて、桔梗のみの一種生又は二色の生合せ、或は撫子・日々草・煎秋羅・がんびなどの草花を根締に使ひ、場合によつては、藤袴・女郎花などを眞副とし、それに桔梗を配するが如き取扱もなすのである。

桔梗の一種生は大抵五七本位より十五本までを使ふのが普通であるが、概して莖のしつかりした物が望ましく、少數の時は本数は素より花數も奇數にせねばならぬが、花數が數十にも及ぶ場合は、必ずしも奇數ならずとも差支はない。而して桔梗は一叢の姿、即ち數本寄り集つた趣に取扱ふのであるから、枝頭より開花する自然性は、一本々々の枝に見せることにする、それで眞・副・體は勿論、その他のあしらひ枝に至るまで、枝頭に開花若くは半開を用ひ、蒼は着き枝に見せることが相應しいのである。

一瓶一色をよいとすも、白と紫の桔梗を挿し合せる場合、輪に大小のない限は原色たる紫を眞副とすることになつて居る。而して他の草花を挿し合せる時には、色彩の調和に重きを置き、なほ兩者の自然出生を考へ、必ず高く育つものを眞副に用ふことが肝要である。

筆記欄

桔梗に撫子 (ききやう・なでしこ) 本勝手 行の花形 (籠)



秋海棠 (しうかいどう)

秋海棠は秋海棠科に属する多年生草本で、多く庭園の濕地を選び栽培せられる。莖は至つて多汁で節々は少しく膨れ紅色を呈してゐる、高さは二尺餘に達し、葉は鋸齒のある歪卵圓形をなし節々に互生す、初秋の頃紅色可憐な花を開く、此の草本は相當大葉で美しく花も亦賞するに足るものであるが、至つて優しく弱々しい感じを與へるものである。

生花としては主として行草の置生として取扱はれるのであるが、材料の如何に依つては掛や釣または棚置とし、草の花形にも出来るのである。而して材料は成るべく多きをさけ、大抵二三本位に止め、力めて物優しい感じを起さしめるやう取扱ふことが肝要である。されば本圖の場合など眞・副を一本で整へ、體に属する部分に一本を用ひたのであるが、此の材料は葉を主とし、葉によつて副や體を整へることが相應しいのであるから、成るべく太くしてつかりした葉を體と副になる部分に使ひ、花は眞と體の上部に見せるやう取扱つたのである。葉數は一枚として算へられるだけの太さのものが、總てで七枚九枚と云つたやうに、奇數に見せることがよいのである。

秋海棠は他の草木の花と挿し合せることは好ましくないので一種生を専らとするが、極めて優しいものであるから、花の姿もこの點に留意して取扱ふことの大切なるは申す迄もなく、之を生ける花器にも意を用ひ、成るべく優し味ある器即ち土器・籠の類を選ぶことがよいのである。總て感氣を兼ふのであるから此の點にも注意を要する。

筆記欄

秋海棠 (しうかいどう) 逆勝手 行の花形 (籠器)



蔓梅嫌に龍膽 (つるもどき・りんどう)

蔓梅嫌は街才科に属する蔓性の落葉攀緣灌木で、山野に自生し、其の蔓は互に纏ひ合ひ又は他の木にまといつて成長するが、その巻き方は朝顔と同じく左巻である。六月頃小花を開くもそれは美しいものではないが、花後圓形の小果を結び、黄熟して中秋後落葉する頃に至り、外皮を破つて中より赤色の實を露出する、それは頗る美しいものである。

生花としては此の季節をもつてするのであるから、蔓梅嫌は蔓物の實物と云ふことになるので、必ず草の花形とし、二重の上又は横掛・向掛・月形花生・釣船などの花器に懸垂状に取扱ひ、すべて當季の草花を之が根縮に配することに定められてある。

蔓を整へるには場合によつては他の枯木に纏はせる事も出来るが、此の蔓は相當丈夫なものであるから、他の物の力を借りなくても、蔓と蔓とをからませて使へば、十分に姿を整へ得るのである。而して落葉後のものであるから、蔓を十分に働かせて花形に際のないやうに、心懸けることが肝要である。

なほ此の材料は蔓の垂下せる風情、即ち線的美を賞するものであるから、特に花律以上に垂れ下がるやうな取扱をなすも差支ないとされて居る程である。しかし二重生などでは何程垂れ下がるとしても、床の地板より二寸以上の位置までに止める考が大切である、また蔓物は悉く其の蔓先が上に向つて起き上る其の自然味を保たせることを忘れてはならぬ。なほ根縮は白花か紫花の如きが調和よいものである。

筆記欄

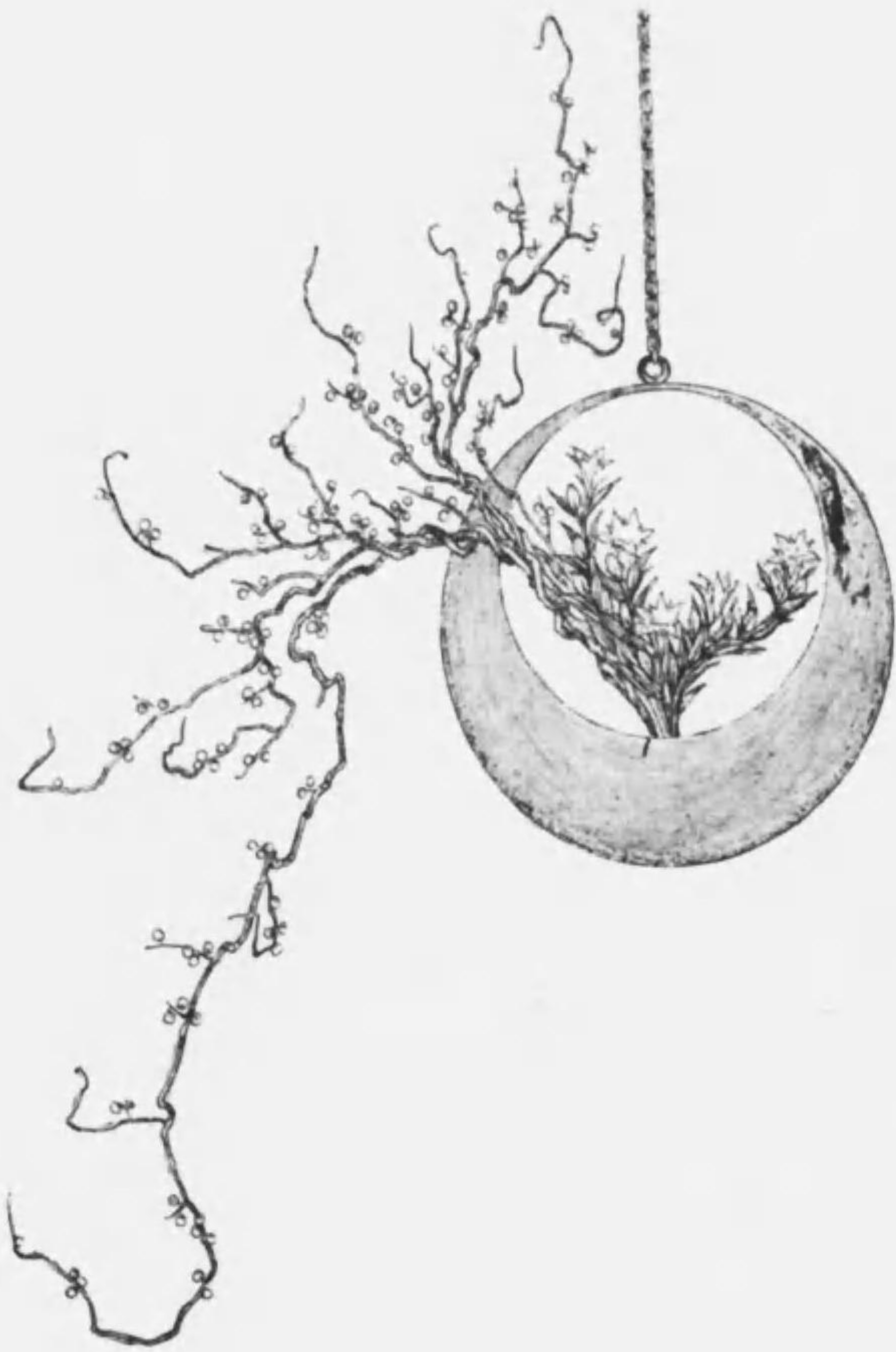
蔓梅嫌に龍膽

(つるもどき・りんどう)

本勝手

草の花形

(月形花生)





芭

蕉

(ばせを)

九枚生

逆勝手

行の花形

(籠)

芭

蕉

(ばせを)(一)

「本項は二枚續く」

筆

記

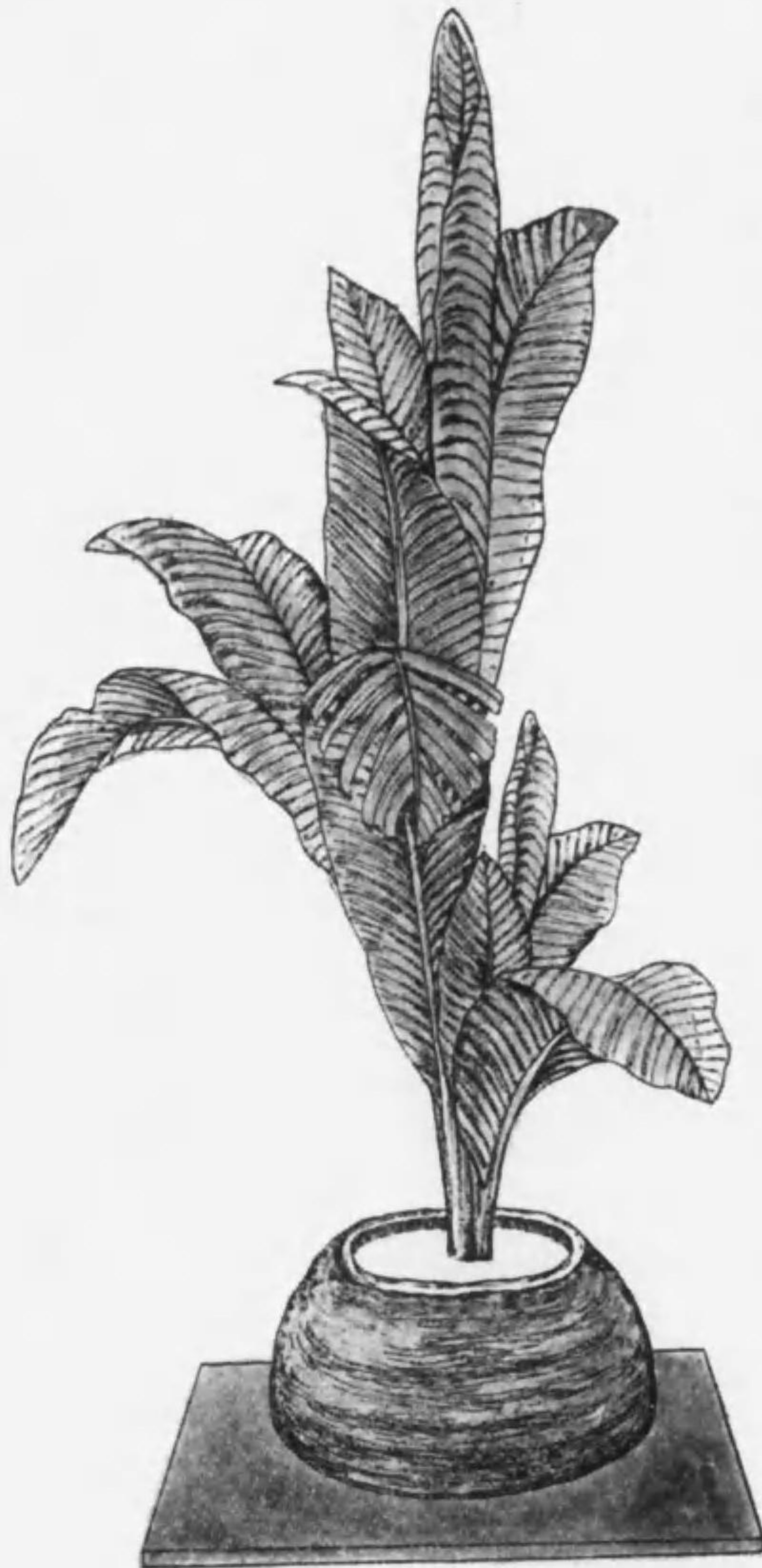
欄

芭蕉は高さ丈餘にも達する草本中最も大きいものであるが、至つて雅致に富んでゐるものであるから、文人墨客に愛敬せられ、専ら觀賞用として庭園などに栽培せられる。この草本は多年生であつて毎春上部に發芽を見、初秋の頃まで次ぎ／＼に堪へず葉を出す、芭蕉には花をつけるのではあるが、それは觀賞に値せぬものである。

芭蕉は葉の太きこと他の何物も及ぶことが出来ず、中肋より兩側に多數の支脈を出しその風姿云ふことの出来ぬ風韻を存して居るのであるから、これ等の點を賞して華道では「葉王」と見て重きをなし、特に傳花とさだめ特別な取扱をされる事になつてゐる。

芭蕉は頗る大きいものであり、殊に肥地に育つたものなどは、到底生花としては取扱ひ得ないのであるから、成るべく瘦地に育つたもので、餘り高く伸びずして姿の整つたものを材料に選定することが肝要である、而して一瓶を普通二株で整へるのであるが、場合によつては三株までは使つても差支はないものである。

芭蕉は直幹なものであるから、總て置生に限るものであり、其の姿より見て行の草くらゐに整へることが相應しい、従つて之を生ける花器は行に屬する土器又は籠の如きもので、忙しきものが調和よいのである。而して大葉のものであるから「大花瓶・大籠・何れも手なき置物よし」と傳書に教へられてあるが如き、心得をもつて選ぶことが肝要である。



芭蕉 (はせを) 十一枚生 本勝手 行の花形 (土器壺)

芭蕉 (はせを) (二)

葉数は七・九・十一などの奇数をもつてするが、葉遣ひに一定の法則があるから、それに基づいて取扱ふことにせねばならぬ。即ち「陰陽の葉の内陰の葉一枚多く入るべし」とあるから、半陰半陽の葉を除いて見て、表の見える葉よりも葉裏の見える葉を一枚多くするのであるが、之は總ての葉物に於ける共通せる法則である。次は「正面に幅の廣き葉を一枚中程より客位へ折るべし、折口より葉末まで二三所破れたる事よし、風叩といふなり」とあるが、之は芭蕉の自然を生け表はすものであつて、此の葉は半陰半陽に屬し、葉先は稍客位即ち體の方向に赴くやう取扱ふことが相應しいのである。

芭蕉は葉王としての尊敬を意味して必ず一種生となし、殊に自身の花でも之をとり除いて、すべて葉のみを以て整へることに定められてある。されば體先や副先になるものは相當太いものを選んで、全體の調和均衡を保たせるやうにするのである。而して眞の葉に限つては傳書に「眞は卷葉よし」と示されてあるが如く取扱ふことにするが、之は芭蕉の個性として春より秋にかけ絶えず莖の上部に新葉を出すものであるから、此の自然に倣つたものであり、また花形を整へる上に於ても都合よいからである。

芭蕉は葉物であり、一切花を使はないのであるから、池坊の規定として葉物は祝儀の席に生けないことになつてゐるのである、それで假令芭蕉は傳花であつても、此の基本法則に準じて、すべての賀席に用ひてならない事に定められてある。

尾花に野菊 (をばな・のぎく)

筆記欄

芒は禾本科の多年生草本で毎春宿根より發芽し、一株より無數の莖を叢生して數尺の高さに及び、九月頃に至り莖頭に穂を出す。通常この時季のものを尾花と稱へる。生花としては五六月頃の花なき時季より用ひられるが、芒としての風情を十分に現はし得るのは尾花の頃であるから、穂の頃に最も多く使はれるのである。芒の莖は直ぐに育つが、其の葉は相當長く伸びて垂れ下がるもの故、華道では之を垂れ物とし、必ず花形中何れの部分かに垂れ葉を見せなければならぬ事になつてゐる。

花の姿は行の置生を適當とし、如何なる場合にも掛や釣など、草の花形に生けることは宜しくない事になつてゐる。而して秋に至れば花を見るのではあるが、それは決して美しいものではない、之を生花の材料となすのは専ら其の風情を賞するが爲であるから、必ず當季の草花を根縮に配することにせねばならぬ。

尾花の根縮に菊、桔梗、女郎花、藤袴などを使ふこともよいが、之等の草花と交生にする時は、一層風情あつてよいものである。而して何れの場合にも其の出生に鑑みて、尾花を眞副として後ろに高く使ひ、其の前に草花を併せ使ふやうにする事が肝要である。

尾花は餘り多くの材料を使はずして、幾分淋しみを見せることが大切であるから、大抵三五本をもつてする、而して交生の際に於ける草花は、其の出生によつて高く低く用ひなければならぬが、本圖の如く野菊などは極めて低く使ふことが相應しい。

尾花に野菊 (をばな・のぎく) 本勝手 交 生 (籠)





葭に燕子花 (よし・かきつばた)

逆勝手 魚道生 (砂鉢)

葭に燕子花 (よし・かきつばた)

葭は蘆とも書き禾本科の水草であつて、淡水又は海邊に自生する、而して地下莖は長く伸びて數間を隔つる地上に莖を出すことが少なくない、爲めに之を水陸通用物かの如く思ふものもあるが、之は純然たる水草と知らねばならぬ。毎春地下莖より新芽を出し五六尺にも達するが、新葉は次ぎ／＼に發生する。八月頃に至ると莖の頂きに圓錐花序の花を撰簇する、通常之を穂と稱へる。晩秋の頃に至れば冬枯れの姿を示し、其の枯葉枯莖などは翌年新芽の出たる後まで其儘に残つてゐる。

葭は花あれども之は賞するに足りないものとして、必らず當季の水草を之が根緒に配することにする、而して之が根緒に最も多く使はれるものは燕子花であるが、其他にも河骨、海芋、澤瀉なども用ひられる。花の姿は行の置生に適するが、水草であるから成るべく水面を多く見せる廣口物に挿すことが最も相應しいものである、それで大抵廣口の花器に一株生をなすか、又は魚道生などに取扱ふ事が普通となつてゐる。傳書草木集には之を六月の材料に上げられてあるが、しかし四月頃に若葉が少しく伸びた頃、枯蘆を高く使つて生ける事もよく、晩秋冬枯に近づいた折に用ふるも面白

いものである。それで普通春より秋まで取扱ふことにする。蘆は直幹なるも其の葉は伸びるにつれて垂下するので、華道では垂物となし、一瓶中何枚かの垂葉を見せる事になすも、若蘆は垂を見せなくてもよい事になつてゐる。

燕子花 (かきつばた)

筆記欄

燕子花の取扱方に就ては、數回記したのであるから、十分御了解の事と思ふ。よつて今回は之が研究問題を提出致します。

一。本圖は十月頃のもので開花を真と、眞の陰方中段に使ひ、苔は眞の陽方中段と、體に配した、そして副には花季を過ぎた散り残りのものを使つたのであるが、此の季の取扱方としての可否を御研究下さい。

二。燕子花の秋の盛期は何時頃ですか。其の時期は何輪位使ふ事が相應しいでせう。

三。十月頃の燕子花では、開花と苔、花と葉の高低は、如何すればよいのですか。

四。夏より秋にかけては、總て姿を緩やかに取扱はねばならぬと云ふが、それは如何する事でせう。

五。十月頃には垂れ葉は何枚位使ふことが相應しいのでせう、そして其れは何の箇所に見せるのですか。

六。先枯れのした葉や、虫喰葉などは、何時ごろから花形に見せてよいのですか。

七。時として花形中に實を生け交へるがありますが、それは何時頃の花ですか、また實のついた莖は花形の何處に使へばよいでせうか。

八。二重や掛釣などに草の姿を生けるのは、何時頃の燕子花が最も相應しいでせう。

九。水草二種の魚道生をなす場合、燕子花を男株にした時に相應しい女株の材料は何でせう。

一〇。また、燕子花を女株にする場合の、男株は如何な水草が使はれるでせうか。

燕子花 (かきつばた) 本勝手 行の花形 (土器廣口)



菊

(其一)

〔本項三頁に続く〕

筆記欄

菊は菊科の多年生草本で種類數百に及び、春夏秋冬の四季を通じて花を見るが、菊の季節としては秋をもつてする。花には大輪、中輪、小輪の區別があり、各々單瓣と重瓣がある、而して花瓣の恰好また色々に變化したものがあつて、色も限りなくあるが、菊の原色は黄である。

元來菊は一本の莖に無數の花をつけるが、一莖に多數をつける時は、輪が小さくなるものであるから、之を育てる時には弱い枝や芽を摘んで、最も生育の旺盛なものを残すことにする。従つて大中輪にあつては、一莖一輪又は數輪に止める、尤も小菊にあつては斯かる事をしない。

菊の賞美せられるのは第一に花をもつてするが、同時に葉に重きをなす物である、殊に生花材料に使ふものは、之が選擇に當つては花以上に葉の美しいものを選ぶやう心掛けるものである。

菊はもと支那の原産であるが、今では純國産と見なされるやうになつた。其の豊麗秀麗ことに閑雅清楚、百花の及び難い氣品あることが、我が國民性に合致し、皇室の御紋章に選ばれた程である。菊の御紋章は後鳥羽上皇が非常に菊花を好まれ、皇室の御用品に悉く御模様や御紋章を御用ひ遊ばされたのに因るとの事であるが、我が皇室の御紋章は八重十六瓣の菊花である。以前では民間にも時に菊花の紋章を用ひたものもあつたが、現今では假令十六瓣の菊でなくても、御紋章に類似したるものは一切用ひてならない事に定められてある。

大輪菊に小菊

(たいりんぎく・こぎく)

逆勝手

交

生

(土器平壺)



菊 (其二)

菊は眞・行・草何れの花形にも生けるが、大・中輪の菊は主として眞又は行の姿に取扱ひ、小菊は行・草の花形に生け、また専ら他物の根締として使用せられて居る。尤も大中輪のものでも野生的な材料で自然に垂れたものなどは、掛や釣など草の姿にも生けられるのである。

本数は五七本より數十本の多きをも用ひられが、すべて奇数をもつてするがよいとされて居る。花の数も大中輪にあつては、二輪の他は奇数とし、數十輪の多きに及ぶ時は、必ずしも奇数たらざるも差支ないとされて居る。

菊は一種一色で一瓶を整へることが一番上品でよいとされて居るが、場合により二色の菊を使つて生けることも差支はない。しかし此の場合には、輪の大小と、色彩の調和に心を用ひ、且つ色の順位をも考へて適當に使用することが肝要である。

輪の用ひ方は總て大輪のものを眞副とし、輪の小さい方を體となすことは申す迄もない。而して色は原色たる黄を上位とし、それに次ぐに白、赤、青、紫と云つた事になるから、池坊規定の色の順位に相違する取扱も差支ないとされて居る。尤も一瓶に二色の菊を挿し合せる時は、色の上下よりも輪の大小によつて用ひ方の定まるものである。

なほ、菊二種を生ける際は、花の大小、枝の強弱、色彩の調和などに意を拂ふべきは申す迄もないが、更に花瓣の形によつての調和、と云ふ事にも心を用ひなければならぬ。

筆記欄

大輪菊 (たいりんぎく) 本勝手 行の花形 (手桶形器)





大輪菊に小菊

(たいりんぎく・こぎく)

逆勝手

蓬萊生方

(竹器鶴龜)

菊

(其三)

茲に掲げたる花圖の第一は大輪菊を眞副の姿に整へ、小菊を併せ用ひた二種の交生であるが、此の材料が大輪と中輪であるならば、中輪を相當高く使ひ、場合によつては副など中輪菊で整へることも差支はないのであるが、本圖の如き小菊は餘り高く上らない事が其の個性であるから、下段より中段までの高さに於て姿を整へることにしたものである。

第二の圖は大輪菊一種を、手桶形の花器に生けたのであるが、此の器は左右に手があるために、普通の置生のやうに取扱ふことが出来ない、それで此の場合は一重の上生と同じやうに、副を眞の後ろに挿し、其の枝先を前斜に振り出すやう取扱ふことにするのである。されば此の花形は立上生と同様の考で生けることが肝要である。

第三の圖は近年に於て使用せられる事になつた、蓬萊生と云ふものであつて、花器は鶴と龜になぞらへて作られ、花の姿は男株女株の如き考で整へることになつて居るが、しかし之は蓬萊山を意味した芽出たものとされ居るので、従つて之に生ける場合は、其の材料が芽出たもの即ち祝儀のものであつて、此の花器と意義の通するものでなくてはならぬ。それで大抵は本圖の如く菊を以てするか、鶴の器に松を生けて根縮に白菊を配し、他の龜の方に黄の小菊など使ひ、或は一方に松と黄小菊、他の一つに白玉椿をもつてするが如き取扱を致すものである。花態は圖に見るが如く兩者調和して完備せる一類たるの意を表はすやう心掛けることが肝要である。



山檀子に小菊・龍膽

(さんざし・りんどう)

本勝手

草の花形 (二重切)

山檀子に小菊・龍膽

(さんざし・りんどう)

山檀子(山檀)は支那の原産であるが、専ら觀賞用として庭園に植ゑられ又は鉢植にも用ひられる。此の木は薔薇科に屬する落葉灌木で高さ六七尺に達し、多くの小枝を分ち、幹には棘針を有する、葉は楔形をなし新葉と共に白色五瓣の小花を簇生するがそれは餘り美しいものではない。花後實を結び熟すれば赤色又は黄色を示すが、其の季節には葉も亦紅をなし相當美觀を呈する。

生花としては此の季節をもつて材料に使用するのであるから、之は實物として必ず當季の草花を根締に使用しなければならぬ、根締の材料としては山檀子が小灌木であるから草物を選ぶことが相應しいのである。本圖は二重切の上に生け體座に白小菊を配したが、之は黄の小菊も調和よいものである、しかし山檀子の實が黄色である場合は白を選ばなければならぬ。従つて下の窓の根締も上口の材料との調和を考へることが大切であるから、窓には紫花をもつ龍膽を配することにしたのである。

山檀子は繊弱いものであるから、多く草の花形を選び、本圖の如き取扱をなすか或は向ふ掛、横掛、釣生などにも使用せられる、而して何れの場合にも必ず當季の草花を之が根締に配するのである。

此の材料は紅葉の季節に多く用ひられ、其の實を賞するのであるから、祝儀の花として使用することは許されない。しかし相當雅味もあり、美しい實を見るものであるから小座敷の床花として、又は普通の席に生けることは面白いものである。

蔓梅嫌に龍膽 (つるうめもどき・りんどう)

蔓梅嫌は俗につるもどきと略稱せられるが、之は衛矛科に屬する落葉攀緣灌木で、多く山野に自生する。毎春發芽し伸びて蔓狀をなし、六月ごろ小花を開き花後圓形の小さな果を結ぶ、その果は初秋の頃に至つて黄色となり、晚秋落葉の時季になれば、自ら外皮破れて、赤色の實を露出し頗る美觀を呈するものである。

蔓梅嫌は蔓物で垂れ下がるものであるから、生花では二重の上や横掛、向ふ掛け、月形花生、釣船など總て草の姿に取扱ふことになつてゐる。而して之は實物であるから必ず當季の花物を根縮に配さなければならぬが、元來この材料は華道で草木通用物とせられてあるから、之が根縮はすべて草花に限られるのであるが、それには色彩の關係上白色の小菊や紫花の龍膽、よめな菊などが専ら用ひられてゐる。

蔓は朝顔や葛などの草物と違つて、相當力をもつて居るから、他物の支柱を用ふことをしない。大抵自分の幹に絡ませて姿を整へるとか、又は蔓と蔓とを絡ませることにするが、之が巻き方は朝顔と同じやうに左巻である。

二重切に生ける時などの眞は、蔓と蔓とを絡ませて相當長く垂下せしめるが、其の蔓先は下口の水際程度に止める考が大切である。而して蔓の末端は必ず起き上るやうに取扱ふことを忘れてはならぬ。其他の生方に於てもよく蔓を働らかせて、花形に隙のないやう心掛けることを肝要とする。蔓梅嫌は實物であり垂下するもの故、祝儀の席には用ひられぬ。

筆記欄



蔓梅嫌に龍膽

(つるうめもどき・りんどう)

逆勝手 横掛

草の花形 (竹掛花生)

梅嫌に小菊 (むめもどき・こぎく)

梅嫌は落霜紅とも書き冬青科に属する落葉小喬木で、山野に自生するも観賞用として庭園にも栽培せられる。樹は丈餘に及び毎春四五月頃發芽して葉腋に淡紫色又は白色紅暈の小花を簇生して後ち實を結ぶ。この實は秋に至つて紅色・黄色・白色等を呈するが、最も普通なるは紅色であつて頗る美觀を呈する。

生花としては十月十一月ごろをもつて季となし、すべて實物として取扱ふことになつて居る。従つて之は一種生をなさす必らず當季の花物を以て之が根縮となすのであるが、此の材料に最も相應しいものは、木物では椿・草物では小菊などである。

梅嫌の枝は相當曲を見せるものであるから、普通行又は草の花形に取扱ふことにするが、しかし若木は概して素直に育つもの故、斯かる材料をもつてする場合は、眞の花形に生けることが都合よいものである。

此の木は至つて質の脆いものであるから、成るべく撓めずに姿を整へ得るやう、材料の選擇に意を用ひなければならぬが、自然の曲を利用する時は相當面白く取扱ふことが出来る。また小枝が多く前後左右に出て居る爲めに、稍もすれば花形に纏れを生ずるのであるから、此の點には餘程注意を拂ひ、小枝に至るまで、折らさないやう丁寧に撓めることが肝要である。

初秋の頃には葉の落ち残りを見せ、晩秋には悉く取り除くやうにする。そして花形中に相當な幹を使ふことがよく、殊に砂鉢などには是非必要である。

筆記欄

梅嫌に小菊 (むめもどき・こぎく) 本勝手 行の花形 (御玄猪)



寒 櫻 (かんざくら)

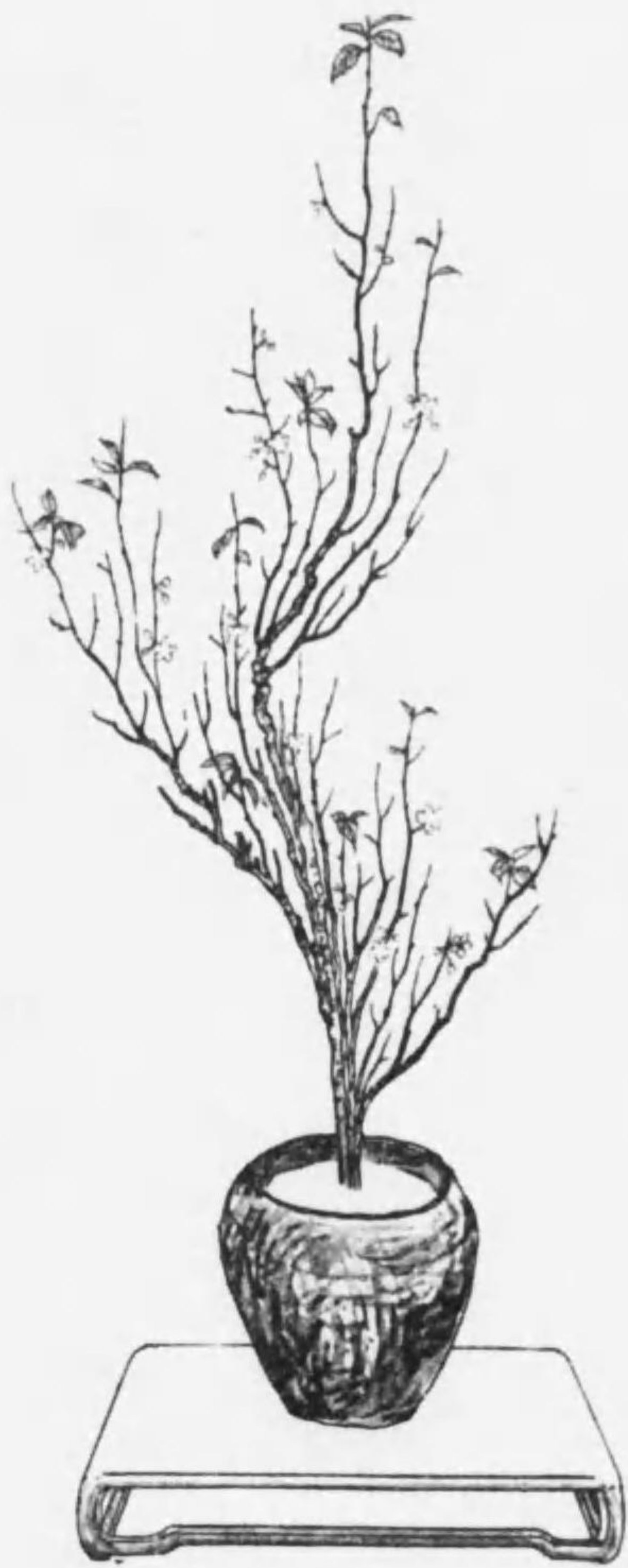
寒櫻は薔薇科の落葉喬木で、之は櫻の一種ではあるが、他の種類と異り晩秋より冬季にかけて花を見せる、それで之を寒緋櫻または元日櫻など稱へられる。一見彼岸櫻に似てゐるが、それよりも幹や枝が細くて節立つて居り、花は八重咲で白く、散り残りの紅葉や、秋に出た若葉の間に混つて、點々花を見せるものである。尤も中には相當花数をつけるものもあるが、到底彼岸櫻の比ではない。

寒櫻は自然の姿より見て行の花形に取扱ふことが最も相應しいが、材料を得れば眞の姿に生けるもよく、また二重の山口などに草の花形を生ける事も出来るが、之を草に取扱ふことは甚だ稀である。而して之は一種生を主とするも場合により小菊や寒菊などを根締に配することもあるが、椿やその他の木物を根締にすることは相應しくない。寒櫻は幾分淋し味を見せることが肝要である。それで餘り花の多い材料を使ふ時は稍もすると寒櫻の風情を失ふことがある。しかし着花を強いて取り捨てるには及ばないが、求めて花の多いのを選ぶの要はないのである。また枝も少ない数であつたりと生けることが好ましい。

落ち残りの葉や新葉は其儘に使用するのであるが、眞の表や副の部分に紅葉の四五枚も見せ、眞の下端に近い所や體奥などに若葉のついた小枝を使ふことが、自然味の表はれてよい許りでなく姿も整へよいものである。また副と眞との間に、餘り艶々しくない葉を適當にあしらふことも、場合によつては非常に引立つものである。

筆 記 欄

寒 櫻 (かんざくら) 本勝手 行の花形 (土器壺)



茶 (ちや)

茶は山茶科に属する常緑灌木であつて、稍暖地を好んで生育する。この木は高さ三四尺より五六尺にも及び、枝葉甚だしく繁茂し、中秋の頃より花を見る、花は白色で小さく總て單瓣である。而して寒さに向つて咲くのであるから、雪霜をさける爲めに花は稍俯向きの姿になつて居る。此の花は美しいと云ふよりも、清雅な風を備へ且つ清香を有するものである。

生花では専ら花の季節を以てし、花の姿は眞行・草何れにも適するが、其の自然の姿を生け表はす上に於ては行又は草の花形が相應しいのである。而して之は一種生をなすことが最も個性を表し得るものではあるが、場合によつては他の草花を之が根縮に使ふも差支はない。しかし茶の樹は枝葉が至つて繁茂せるものであるから、之が根縮に使ふ材料はこの點に鑑みて、適當のものを選ぶことにせねばならぬ。

茶は茶梅や椿と似通つた點はあるが、他は喬木であり、茶は灌木であつて低い箇所より枝を岐つのであるから、生花に於ても其の自然に倣つて水際を割合に低く取扱ひ全體の姿を瘦せないやうに、こんもりと繁味を見せ、そして俗に「茶籠」と云ふ言葉の如く、中段以下にこの意味に施れる趣を表はすことが肝要である。

茶は若木の新枝はすく／＼と勢よく伸びるのであるが、老樹になると餘り著くない、また相當の幹を使ふことも好ましい。

筆記欄

茶 (ちや) 逆勝手 行の花形 (土器平鉢)



晩秋の燕子花 (ばんしゅうのかきつばた)

十一月頃になると冷氣募り、ために發育著るしく衰へ、花莖の伸びが悪くなり、花數も極めて少くなるものである。それで此の季の初め頃には花を葉よりも僅に高く又は低く使つたものが、終り頃になれば葉よりも低く見るやうにせねばならぬ。

而して花の數も二輪乃至三輪位に止め、眞・副・體に都合よく配置するのであるが、開花と莖とは何れを高く用ふるも差支はないのである。そして秋の季節に入ると實を結ぶのであるから、場合によつては、これを副の部分に生け合せることもよいとされて居る。

燕子花の葉は年中つき／＼と新しい葉を生するのであるから、體やその他に低く使ふものは青々とした完全な葉を使ふ事にするが、眞や副の高い葉、即ち早く出來た葉は霜や冷氣のために、葉先より漸時枯れを示すのであるから、それ等のものには稍先枯れのしたものが相應しい。そして眞の後あしらひや副などに垂れを見せることも此の季の燕子花としての風情を表はし得て面白いものである。また葉先が枯れて少しく破れたものや、虫喰ひの葉なども生け合せて差支ないものである。また葉先が枯れて少しく破れたものや、虫喰ひの葉なども生け合せて差支ないものである。また葉先が枯れて少しく破れたものや、虫喰ひの葉なども生け合せて差支ないものである。また葉先が枯れて少しく破れたものや、虫喰ひの葉なども生け合せて差支ないものである。

花の姿は成るべく緩やかに整へることが肝要であつて、花形は行や草に適する。

晩秋の燕子花 (かきつばた) 逆勝手 行の花形 (土器長壺)



紅葉 (もみぢ) (其一)

秋になると錦木・眞弓・樅その他色々紅葉するものが多いが、生花ではそれ等のは何れも普通の花と同様に取扱ひ、たゞ紅葉ものとして幾分意を用ふることになつて居るが、特に楓樹の紅葉したものに限つて、之を紅葉と稱へ傳花物として特別の取扱ひをなすことに定められてある。

この樹は楓樹科の落葉喬木であつて三月頃發芽する。此の芽は紅色の美しいものであるから、生花ではしほでの紅葉と云つて、之に白椿の根縮などを使つて生ける。それから四五月頃に到ると小花を開き、八九月頃に及んで實を結ぶ。そして晩秋十一月初旬より紅葉を始め下旬に紅葉し終り、漸次落葉するのである。されば之が生花としての季節は十一月いつばいと見るべきであらう。

傳花五箇條に櫻と紅葉とが對照的に示されて居る、これは味ふべき點であつて櫻は春を代表する花であり、紅葉は秋を代表するものである。されば前者を對照する時は其の間に云ひ知れない味を感じる。即ち櫻も紅葉も紅葉も共に季節の野山を飾る第一のもので、其の美觀は何れとも云ひ難い程であるが、しかし櫻は陽氣と華やかさを背景にその美を發揮するものであり、紅葉は美しい中に秋の静けさと寂しさを想はせ、詩人ならずとも浮いた氣分では見ることの出来ない、しんみりとした雅趣を備へてゐるものである。

斯の如く兩者相通じた點があるので、生花では大體に於て同じ様に行の姿に取扱ひ何れも置生に限り、姿の瘦せないやうに整へることになつて居る。

紅葉 (もみぢ) (其一) 本勝手 行の花形 (土器壺)



紅葉 (もみぢ) (其二)

紅葉の生方に於て最も大切とされてゐる事は葉色の使ひ方である。之が自然として山のものより里に及び、一本の木も陽當りよく雪霜を受け易い部分より紅葉し、蔭の部に及ぶのである、それで生花では之に倣つて、適當な材料を選び、次の如く取扱ふことにする。

眞は最も高く紅葉も早いもの故、頭の方のよく紅葉したものを選び、眞の前あしらい等も成るべく枝頭の濃紅なものとするが、しかし枝の元の方や後あしらい等は紅色に稍黄味を帯びた位のものが望ましい。

副も大體に於て眞同様であるが、之は陽方であつて、一番早く紅葉したものであるから、已に散り始めた趣を示すために、散り残り一本を生け交ぜることにする。しかし副も直接霜のかからない日蔭の部分には黄味勝ちのものを巧みに配さなければならぬ。なほ主位即ち副の枝に葉裏を見る枝を使ふことも傳花としての定めである。

體は低い箇所にあるので、黄葉を主とし、蔭の部分には青葉をも見せることにせねばならぬが、體先の如きは陰方ながら幾分陽や霜を受けるので、紅味を帯びた葉を使ふべきである。

これ等の事柄を都合よく生け表すには、材料を選ぶ時によく注意し、一本の木または成るべく接近した枝によつて求めることが肝要である。また翌日花席に生ける時などは、葉の色付に少々餘裕ある位のものを見計らつて、材料を整へることにせねばならぬ。

筆記欄

紅葉 (もみぢ) (其二) 逆勝手 行の花形 (平籠)





紅葉に白椿 (もみぢ・しろつばき) (其三) 逆勝手 行の形花 (土器平壺)

紅葉に白椿 (もみぢ・しろつばき) (其三)

紅葉の生花は老いたる大木を意味するものであるから、若木の如く梢の立ち上つたものでなく、各枝葉が玉をなして段々に見えるやうに取扱ふことが風情の表はれるものである。そして紅葉は陽木であるから苔木を使はず曝木を用ふることになつて居るが、之は水際より見せず、中段の葉の間より現はすことにする。而して砂鉢など大花瓶には二本も用ふることが出来る。

我が池坊の規定として、花なきものには必ず當季の花物を根縮に用ひることになつて居るが、此の紅葉は勿論花は無いが「花よりも紅なり」とさへ賞讃され、紅葉の王と稱される程のものであるから、それ等の點を尊重して一種生に取扱ふことになつて居る。また實際に於て他物の根縮など用ひない方が、美觀を傷ける虞が無くてよいものである。しかし本来根縮を用ふべき種類のものであるから、之に最も調和よく白椿のみは用ひてよい事になつて居るのである。

花の姿は總て行に取扱ふことになつて居る、そして花形の瘦せないやう、堂々とした姿に生けるのであるから、花器も之に相應しい程度の花瓶または手なき大籠を用ひ、或は廣口、砂鉢の如きを使ふことになつて居る。

楓樹は切口に風が當ると水が揚がらなくなり、紅葉せる葉は直ぐに葉が縮んで了ふのであるから、總て伐り取る時に注意し、濡布に切口を包み、箱か蔕で枝葉に風の當らないやうにして持ち歸ることが大切である。なほ紅葉は一切の祝席には用ひないものである。



水

仙 (すゐせん)

(其一)

逆勝手

眞の花形

(土器長壺)

水

仙 (すゐせん)

(其二)

水仙は石蒜科に属する陰性の多年生草本で、湿润な土地を好んで生育する。花の色は白と黄があるが、其の原種は白色の一重咲で中央に黄色の盞形(せんけい)の葉をもつたものである。此の種は一番品位もあり、色澤(しきさく)芳香(かこう)も相伴(あひま)ひ、加ふるに發育(たか)う状態(じょうたい)最も規則(きぎ)的(てき)であり、且つ花葉(はなば)の質(た)極めて素直(すぢ)であるので、花道(はなみち)では最も之を珍重(めづ)する。

水仙は陰性の草本であるが、花道(はなみち)では特に之を賞(あ)して、如何(いか)なる祝席(しゆせき)にも用(もち)ひられ更に傳花(でんか)として重き取扱(てと)をなすことになつて居る。それは初冬(しゆとう)の頃(ころ)即ち陰の季節(きせう)より咲き始め、陽春(やうしゆん)の頃(ころ)まで咲き續けるので、陰より陽(やう)に趣(おも)くものとして芽出(め)たき意味(い)を含むものとし、ことに其の生育(じゆふ)状態(じょうたい)が他の草木(くさき)に全く例(れい)のない正(ただ)しき繁殖(はんしゆ)をなすものである。それは球根(きうこん)が分離(ぶんり)するに、必ず一球(いちきう)は二株(にさく)又は三株(さんさく)に限(か)られ、二株(にさく)のものは翌年(あしたねん)三株(さんさく)となり、三株(さんさく)のものは親株(おやさく)は分離(ぶんり)して、新たに新株(しんさく)を生(な)じて二株(にさく)となる。この整然(せいぜん)たる生育(じゆふ)状態(じょうたい)は一家(いけ)繁榮(はんりやう)を象(かた)るものであり、花季(はなき)も殆(たいてい)んど半歲(はんさい)に亘(わた)り、他に類(るい)を見(み)ざる長壽(ちやうじゆ)を意味(い)し、加ふるに極寒(ごくかん)の折雪霜(せつじゆ)を凌(しの)いで秀花(しゆか)を開(ひ)き、馥郁(ふよく)たる芳香(かこう)を放(はな)つなどの諸點(しよてん)を賞(あ)するのである。

水仙(すゐせん)はすべて葉四枚(はなはよこ)の中央(ちゆうじやう)より莖(こ)を抽(ひ)んでるものであつて、一球(いちきう)内(うち)には二株(にさく)又は三株(さんさく)に限(か)られて居る、この自然(しぜん)に倣(な)つて花道(はなみち)では必ず一瓶(いっぺい)を二本生(にほんせい)と三本生(さんほんせい)の二通り(にどおり)に限(か)られて居るのである。

水仙 (すゐせん) (其二)

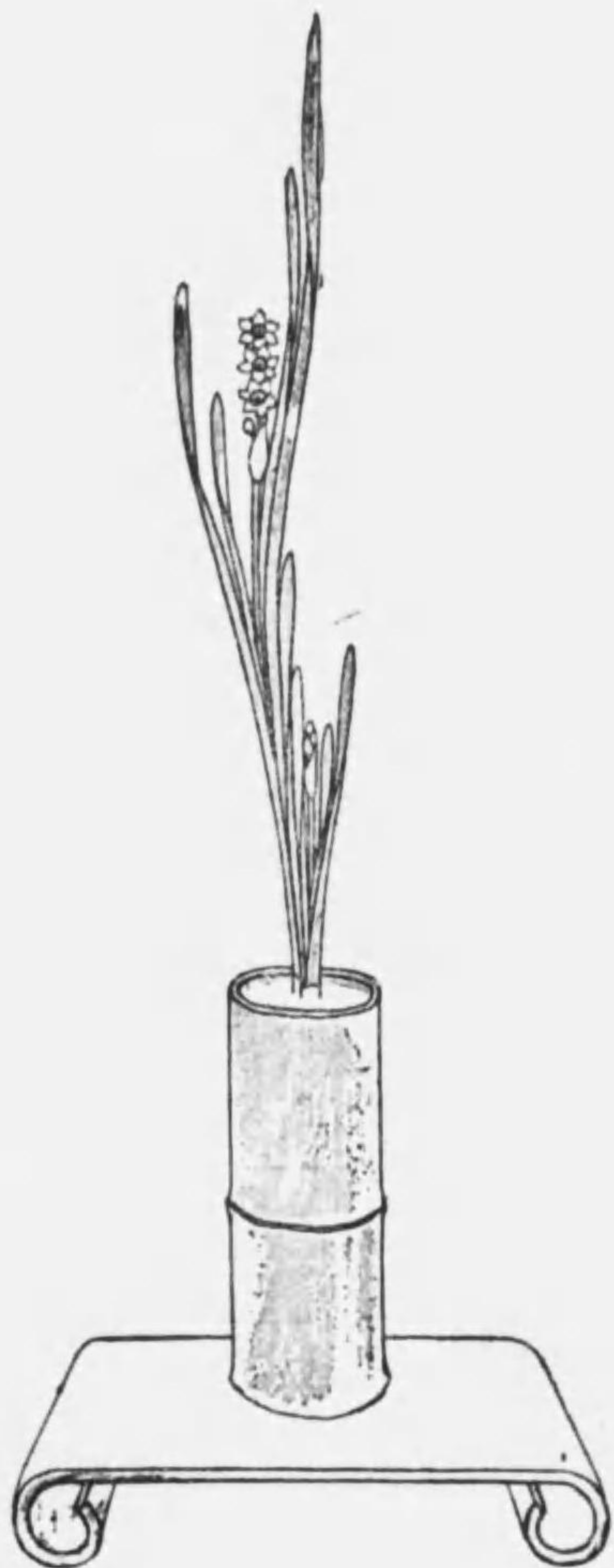
水仙は陰地に生育し、陽を受け陰方の葉が高く伸びるのが自然であるから、生花では之に準じて必ず後ろ高く前低く整へることになつて居る。而して水仙は眞直ぐに育つものであるから、之を倒した姿に生けることなく、専ら眞又は行の花形とし總て置生に限られて居る。しかし時として向ふ掛などには用ふることあるも、横掛など花を横に出すやうの取扱ひは一切しない事になつて居る。

水仙の季節は初冬(十二月)より節分(二月)までとし、季節前のものを珍花とし、節分後は残花として取扱ふことになつてゐる。而して初季の花は主として二本生位になし、姿もスナナリと整へ、花を葉に比して稍低く使つて初花らしき気分を見せることが肝要である。また花は眞を開花一二輪とし體などは蒼勝ちのものが相應しい。尤も初花も終り頃になれば眞に二三輪、體に蒼勝ち又は一輪の開花を使ふ程度がよいと思ふ。中季よりは三本生などが適し、眞に三四輪、副に二三輪、體に一輪と云つたやうに取扱ひ、晩季には眞に近い行の姿くらゐに生け、花数も稍多く賑やかに取扱ひ、花莖も少しく高い目に配し、花形を緩やかに生け、花を餘り整理し過ぎないやうにするが相應しい。

水仙は一度袴を取りはつして挿しかへ、葉の向や高さを整へることにする。そして水仙に限り眞よりも前に副を使ふ、所謂前副とすることが規定されてゐる。而して總て一種生に限るが、節分後即ち残花季に及んでよりは、他物の根緒に用ふるも差支はないのである。

筆記欄

水仙 (すゐせん) (其二) 本勝手 眞の花形 (寸筒)



南天に小菊 (なんてんこぎく)

南天は小蘗科に属する常緑灌木で、幹は細く高さも七八尺位である。葉は羽状複葉で花は五六月咲くも美しいものではない。南天を賞するのは晩秋紅果を結ぶ頃より春にかけてのもので、生花としても此の季節に實物として取扱ふことになつて居る。

南天は葉の大きいものであるから、成るべく縮つた小形のものを選ぶことがよく、一瓶に二三本使ふことが普通であるが、場合によつては五本までは用ふことがある。此の木は葉が一團をなしてゐるから、生花では二段または三、五、七段などに整へる。而して實物であるから、必らず當季の花物を之が根締に配しなければならぬが、元來南天は通用物であるから、椿の如き木物は好ましくない。それで寒菊、金盞花、菜の花または節分後の水仙などが適する。葉牡丹などは美しいけれども之は花でないから、南天の根締には用ひてならないのである。

花の姿は普通行をもつてするが、而して之が自然味を表はすために、眞や副などに映葉を使ひ、低い部分や陰になる所に青い葉を見せることなどは老練な手法である。

また初冬の頃には房々とした實を用ひ、初春後には實の渺いものを使ふことが相應しい。而して一瓶全體より云へば眞に成熟期の實を使ひ、副には稍落ち始めた位のものをを用ひ、陰方のあしらひに未成熟のものを配するなど、進んだ取扱方である。

南天に小菊 (なんてんこぎく)

逆勝手

行の花形

(土器壺)



松竹梅 (しょうちくばい) 其一 『本稿七頁載』

筆記欄

松竹梅生けは池坊傳花五ヶ條中の第一に選ばれたものであつて、それが所以は主として次の二點に因るものである。即ち我が池坊の生花は一瓶を必らず一種乃至二種の草木を限り用ふることになつて居る。然るに松竹梅生にあつては全然類を異にせる三種のものを取り合せて一瓶を整へるのであるから、之を特種取扱物と定められたのである。尤も二重切は三種の草木をもつてするも、それは生け口が二ヶ所に別れて居るので、この場合とは全然意味を異にするのである。而して第二は花形構成上の相違である、普通の生花では總て一瓶の姿を眞副體の主要三枝をもつて整へ、其の他は應合枝として極めて軽く使ふことにするが、獨り松竹梅生にあつては此の三枝の他に『副』と稱へる一枝を併せ用ふることになつて居る。元來この副と云ふのは、立華に限り使ふ所の役枝である、それを松竹梅生けに用ふるのであるから、松竹梅生けは立華に屬するものであるかのやうに思へるが、しかし他の七九の道具などが使はれて居ないので勿論立華ではない、この意味に於て古來松竹梅生けを指して『立華に非ず生花にあらず』など稱へられて居る譯である。

斯の如く松竹梅は特異な取扱ひをなされ、而も曲線の多い松、屈折のはけしい梅、それに直幹の竹を配するのであるから、之が花形の構成は餘程難事である、然るに我が池坊にて定められた花姿は實に整然として寸分の缺陷なき迄に考定されて居る事に於ては、如何に創始者が非凡であつたかを想像するに餘りあるのである。

松竹梅「若松眞」逆勝手 眞の花形 其一(紫雲)



松竹梅 其二

松竹梅生けは總て眞に屬するものと定められてあるが、更に之を眞行草の三つに區別せられる事になつて居る。然るにそれが區別は他の花形に於けるが如く、枝葉の曲や花の恰好などによつて分たれるのではなく、總て之に使用せられる材料の如何によつて相違することになつて居る。而してそれが根本規定となつて居るのは次の通りである。

眞の松竹梅 總て眞に若松を使はれたものであつて、其の若松は翠松でもよければ、四方へ小枝を出した若松でもよいのである。そして竹や梅をもつて副、胴、體などを形造ることにする。

草の松竹梅 眞、副、胴を松と梅にて整へ、體に熊笹を用ひたものは總て草の花と定められてある。それで此の生方に於ては眞は松でも梅でも、または老樹でも中年樹でもそれは決して差支ないものである。

行の松竹梅 前に記した眞、草の松竹梅生けを除く他の生け方は悉く行の花と見ることになつて居る。それで行の花形にあつては、若松の眞と熊笹の體さへ用ひて無ければ、眞を松、梅、竹の何れになすとも差支なくまた副、胴、體(體に竹は用ひない)に如何なるものを配するもよい事になつて居るのである。

松竹梅生けの花配は青竹の割たものを眞の花配り井筒にすることが本則となつて居るが、特に草の松竹梅生けに限り普通の股木を用ひて生けることが許されてゐるのである。

筆記欄

松竹梅『老松眞』本勝手 行の花形 其二(壺形)





松竹梅「梅」

真

本勝手

行の花形

其三(薄端)

松竹梅 其三

松竹梅は材料の使ひ方によつて數十種の變化を生ずるのであるから、茲に一般に行はれて居る代表的の花形數種を表示して參考に供する事とした。

欄記筆

體	胴	副座	副	真	
梅	竹	／＼	梅	松 若	真(若松真)
松 若	竹	／＼	梅	松 若	
梅	竹	／＼	梅	松 若	松
梅	竹	／＼	松 若	松 若	
松 老	竹	／＼	梅	松 老	真
梅	竹	／＼	松 老	松 老	
梅	／＼	／＼	竹	松	竹
松	梅	／＼	竹	松	
松	／＼	梅	竹	竹	真
松	竹	梅	竹	竹	
梅	竹	松	竹	竹	梅
松	梅	／＼	梅	竹	
梅	松	／＼	梅	竹	真
松	竹	／＼	松	竹	
松	竹	／＼	松	梅	草(熊笹體)
松	竹	／＼	松	梅	
松	／＼	梅	竹	梅	梅
梅	松	松	竹	梅	
笹 熊	／＼	／＼	松	梅	真
笹 熊	梅	／＼	松	梅	
笹 熊	松	／＼	梅	梅	竹
笹 熊	梅	／＼	松	松	

松 竹 梅 其 四

筆 記 欄

材料 松竹梅生は云ふ迄もなく松と竹と梅の三種を一瓶に生け合せたものであつて、傳書に『もし梅なき時は松竹に當季の芽出度花を添へて用ふ』とあるのは、松竹梅生けではなく、松竹梅の如き祝儀の花を生けんとする場合、梅が無くて生け得ない時は、松と竹とを別の瓶に生け、何れにも當季の芽出度花を添へて祝儀花に用ひよとの調である。而して松竹梅生けをなす場合の材料選定に就ては次の如き心得をもつて居なければならぬ。

松 老松、若松ともに用ひるが、若松には二通りあつて枝松と稱へるもの即ち若松の枝が左右へ出でた整然たる姿のもので一般の賀席などに喜ばれ、翠松は一本一本の松の翠枝で數本を使ふことにし新年の床花として賞散される。

竹 竹には幾多の種類があつて何れも生花としては用ひられるが、松竹梅生けとしては孟宗竹、眞竹、淡竹の如きが多く用ひられ、熊笹は草の花形に限り使用せられる。

梅 松や竹は年中いつにても得られるが、梅のみは花の季節に限り使用するので季節を制限せられる譯である、しかし梅にも七月梅、八朔梅、冬至梅、普通の白梅、紅梅など種々あつて、一年中七八ヶ月は使用することが出来る。

松竹梅生けをなす祝儀の席は、第一に婚禮の席、新年の床などであつて、其の他に出産、入營、出征、初老、還曆、古稀、喜壽、米壽などの賀席に相應しく、また金婚、銀婚、新築落成の祝席にも好ましいが、特に注意する事は、婚禮席には鳥臺の松竹梅と重複することを避け、新築の際紅梅などを用ひない等の點である。

松 竹 梅 『梅』 眞 本勝手 行の花形 其四(鼎形)

